
Real Game

片倉葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Real Game

【Nコード】

N3779K

【作者名】

片倉葵

【あらすじ】

Real Gameという乙女系ゲームを友人から借りた神楽藍は全キャラクター後、寝ているうちにキャラクターの1人、レガードの手によって異世界に召喚されてしまう。宮廷魔導師、騎士副団長、そして、呪われた王子に囲まれて藍は自分がなぜ召喚されたのか理由を知った。『あなたを召喚したのはこのわたしです。そして、あなたは元の世界には帰れません。セリオス殿下の子供を孕み産むまでは』『王子って、誰？』『この少年です』レガードの傍には10歳ぐらいの少年が・・・『あたし、少年趣味じゃありません』『安

心してください。中身は20歳すぎています』 『そついつ問題じゃないから!』』

この作品は都合よく書かれており、内容も滅茶苦茶な上、作者の文章力がとてつもなく低いので読みにくいです。

プロローグ（前書き）

初めて書く小説です。異世界トリップ物で主人公は女子高校生になっています。

基本がコメディですがシリアスもまじります。ですがシリアスには前書きでシリアスありと書きますので苦手な方も安心してくださいね。

プロローグ

……来たれ……女神よ……

奇跡を起こす子供を神の子といい、それを産む女性を人は女神という。

今よりおよそ400年前。1人の異界の女が子供を産んだ。

その子供は荒れた大地に潤いをもたらし、やがて国を作り、繁栄へと導いた。

子の名はセリオス。

セリオス・エルタイン。

エルタイン王国初代王である。

そして、400年後の今、1つの予言が下された。

『レィムスの日に生まれし王子、20の歳月を得て呪いを受けるであらう。』

その呪いにかかりし時、もう1つの世界より女神を呼び寄せよ。

その女神、王子の呪いを解き、子をもつけ、生まれし子供は、異端の力を持ち、国を更なる発展へと導き、豊かな大地を作り上げるで

あるじ』

予言より1年後のレイムスの日、エルタイン王国に1人の後継者が現れた。

さらに、20年後。

運命の歯車は動き出した……

「さて、全キャラクターおめでとぅ〜……てね」

最後のスチルを手に入れて神楽藍……あたしはガッツポーズをした。クリアしたばかりのゲーム。ブラウン管の向こうではキャラクター

の1人、ヒロイン『愛』が異世界『ルース』に手を振っていた。

このゲームはReal Gameという乙女恋愛ゲーム。

ヒロイン『愛』がいきなり異世界トリップをさせられ、王子の呪いを解く方法を探しながら異世界『ルース』で一年を過ごすというお約束な展開になっている。

クリア条件は2つ。

1つはキャラEDと就職ED。

- ・王子セリオス
- ・王宮魔導師レガード
- ・騎士シリウス

この3名と恋に落ちてEDを迎えルースに残る事。

もちろん元の世界に戻ることは出来るけどそれはバッドEDになる。それから友情EDとか……職業EDとかもある。

2つめはセリオスの呪いを解くノーマルED。

帰還EDとでも言うべきか。

これは誰とも恋に落ちずに無事王子の呪いをつければこのEDに辿りつける。

これがまたえらく色々な条件があって苦労した。

でも、苦労した甲斐があった。

「これで全部のスチルが手に入ったのよね。

長かったわ、この一週間！寝不足のまま学校に行って、休みとなれば不眠不休！！」

その苦労が今！報われた！！

「あした真衣に自慢しようっと」

ふんふんと、鼻歌を歌いながらゲームのボタンを消して、ディスクを取り出す。

時刻は午前2時。

少し遅い時間だけどこれくらいなら何とかなる。いざとなったら授業サボって保健室で寝よう。

うーんと、背伸びをしてマイ抱き枕を抱きしめて電気を消した。

明日は火曜日だから遅刻しないように……最近の寝不足が原因かあ。たしはすぐにストンと眠りについた。

良い夢、観そうだなって思った。

『……来たれ、女神よ!』

その声を聞くまでは。

1章・誘拐されて異世界へ（前書き）

この章から異世界へと向かいます。

1章・誘拐されて異世界へ

いつもとは違った柔らかい感触の中、あたしは目を覚ました。

めちやくちや気持ちいい……暖かくて、やわらかい。

うわぁ〜雲の中でお昼寝をしているみたい。ぬくぬく……

今の気持ちを表すならこう表現するだろう。それほど気持ちのいい寝床。

けれどそろそろ起きなければいけない。学校がある。

……起きるの……やだなあ。

起きなければいけない。

頭では分かっているのだが体は欲望に忠実だった。

軽く瞳を開ければ、太陽の光が部屋全体を包み込んでいる。

……朝、……でも、まだ眠い。

捲るべき毛布を被っていく。

そして、やがておかしい事に気がついた。

……あれ？なんで……あたし寝ているの……？

記憶が正しければ今日は火曜日のはずだ。

一昨日は日曜日で学校は休み。昨日は月曜日で学校へ行った。

…………どうしてお母さんは起こしにこないんだろう？

目覚まし時計を置かない主義のあたしの一日の始まりは母である神楽美奈の大声から始まる。

この感覚からもう起こしに来てもいいはずだ。だって多分時刻は7時過ぎ。

毎朝きちんと同じ時間に起こす母に限って今日は寝坊しまだ起きていないとか？

いや、それはない。

なんたつて化け物並みに寝起きが良い母だ。

あたしが知っている十数年のうち、一度でもあの人寝坊したという事は無かった。

と、いう事はだ。

- 1・起こしても起きないあたしに呆れ起こしにこなかった。
- 2・実は今日学校が休みなんです。
- 3・誘拐された。

可能性を述べるならこんなところだろう。

…… 2番は火曜日という線からありえない。

それに、創立記念日なんてものは我が高校には存在しない。

なら3番か？

…… いや、さすがにありえないから1番を選ぶべきだね。

うん。1番が…… 1番が…… 1番？

1番1番1番1番…… 学校遅刻…… 遅刻？

「ぎゃあああああ」

遅刻！！遅刻はやバイ！！！！

今日の1時間目は確か数学！数学の先生、洒落にならないくらい厳しいんだから！！
しかも今日は確か小テストをするとか言ってた。受けなければ即留年の危機に陥る！！

遅刻だけはするまい！と、あたしは布団の中から飛び跳ねた。完全に目が覚めた。

そこでやっと気がついた。部屋の異変に。

なに、あの高価そうな壺は？（少なくとも十数万はいく）
なに、あの高価そうな絵画は？（最低でも数百万はいきそう）
てか、この異常にゴージャスな部屋はなんなわけ？

「……………」マジでどっ？」

グルリと辺りを見回したが見覚えが無い。

見覚えがあつたらまだ安心していられたのに！！

そう心の中で叫びながらまだ夢を見ているのかと思ひ頬を力一杯に抓ると物凄い痛みがした。

ちよー痛い。マジで痛い（泣）

つまりは……………夢じゃないって事だ。

……………え、ほんとにどこ！？

明らかに自分の寝室ではない。

眠っていたベッドは涼しそうなアイスブルーの色をしていて、手触りの良い絹のようなシーツはどこまでも優しく包み込んでいた。

窓を囲む淡いグリーンのカーテンの傍にあるのは派手な装飾品の数々。

その下に敷かれた豪華そうな赤い絨毯。天井からぶら下がっている大きなクリスタルのシャンデリア。

金持ちなのに誘拐か？

あきからに混乱していた。

まったくの的外れな考えが次から次へと浮かんでくる。
微かに響く頭痛。

クラクラする。頭痛い……そうだ。外を見ればなにか分かるかも！！

「ま、窓……窓どこ？」

見つけた窓も豪華そうな装飾が施されていた。

乗ってる壺を割らないようにしなくちゃ。弁償できないし……あれ
鍵が、開くかな？

不安があったがその不安を消し去るようにカタカタと音を鳴らし鍵
はずんなり開いた。

とにかく外を見て確認しよう……窓の外にある景色を見て、

「……………うそおお！！」

驚愕した。

そこには日本ではあきらかにお目にかかれない美しく澄み切った空

とエメラルドグリーンの海があった。
港には御伽噺に出てくるような船がいくつもある。
鉄ではなく、木でできたような物。あんなものは海賊映画や本でしか見たことはない。

それに空を羽ばたく青や緑の色合いをした鳥はなに？

青なんて色の鳥はインコ以外では見たことがない。

否、インコより濃い色合いをしているからインコではないだろう。
尾の部分も長く、まるでライオンのような鬣っぽい毛が頭の天辺部分を覆っている。

あんな鳥、見たことない。

それに外国の映画に登場するような作りの町並み。まるでタイムスリップしたかのように……

……あたしどこに誘拐されたの？

へなへなと力が抜けて座り込む。

そもそもここは日本……なわけない。絶対違う!!

けれど、日本じゃないとしたらどのくらい眠っていたの？

1日？2日？もしかして……1週間、とか？

ああ、つーかあたしの家は、

ピンボーですからお金はありませんよ？

犯人さんにはそう伝えないと……

そんな考え中、不意にドアの扉が開いた。

「オイ！！目が覚めたか」

初めに聞き覚えがあるような声が聞こえた。

ドアの外から現れたのは10才前後の美少年だった。

……怖いぐらいの、美形の少年。

蒼の髪はサラサラと風を受けてなびき、長い睫毛に縁取られた紫闇の瞳は目の前の1点……つまりあたしを見ていた。

その身を飾るのは染み1つ無い白いタキシード。

襟元は金糸で薔薇のような刺繍となにかの模様が施されている……

うん……タキシードっていうよりまるで御伽噺に出てくる王子様みたいな格好だわ。

うん。その表現が1番あっている。

さらにその左背後には魔導士のような格好をして紺の長い髪を無造作に垂れ流した金色の目の美青年がいて、右背後には濃い緑の目に青銀の髪を三つ編みにした女神のように美しい美形さんがいる。

表情も実に個性的だ。美少年はムツリした顔で苛立っているようだし、美青年はとってもニコニコ笑っているが目が笑っていない。美形さんなんて無表情だ。

……あれ？んん？待てよ……どっかで見たような……

「目が覚めたかと聞いている。俺の言っている言葉が分からないのか？」

うん……この口調……

「貴様……なんとか言ったらどうなんだ!!」

つて、

「思い出した!!!!」

思い出した。思い出したよ。

ああ、なんだ。コレは夢だ。

夢に違いない。

だって、目の前にいるキャラクターは友人、真衣から借りた恋愛ゲーム、

『Real Game』

に出てくる攻略キャラクターの1人、クリスト王国第一王子、セリオス・エルティンだったから。

なんだ。夜中までゲームしていたから夢にまで出てきっちゃったんだね。あたししたらお茶目さん!!

いやああ……でもやけにリアルな夢だね。まるで本物が目の前にいるかのようだよ。

「な、なんだ、この女は……」

10歳の美少年、セリオスが驚いたようにあたしを凝視した。それはまるで頭大丈夫かこの女?と、言っているみたいに。

「あ、御免ね。あたしは神楽藍。こっちでは……アイ・カグラかな?」

「……俺はセリオス・エルティン。このエルティン王国の第一王子

だ。そしてこっちが……」

「初めまして。わたしの名前はレガートといいます。この城の宮廷魔導士をさせていただいています。そしてわたしの後ろに控えているのがこの王国の騎士団副団長にして白銀の騎士の称号を持つ、シリウスです」

「初めまして、シリウスといいます」

「あ、ご丁寧にどうも」

ペコンとお辞儀をする。
いや、マジでリアルだね。
まるで本物……以上だよ。

「さて、まずはご説明いたしましょう。
今あなたはこれを夢、もしくは幻と思っているでしょう」

「夢だし（キツパリ）」

ドキツパリとあたしは言った。
それにレガートとか言った美青年が困ったように笑う。

「そう思つのも無理はありませんが……ハッキリと言いましょ。
これは現実です。
そして、あなたは召喚されたのです。このわたし、レガードの手に
よって」

「……はあああああ!？」

……頭、おかしいんじゃないやありません？

つかさ、召喚？召喚って、あたしゲームのやりすぎたか。

「もう！夢なのに冗談キツイって！」

「夢ではありませんよ。あなた、さつき自分で自分の頬を抓ったでしょう。赤くなっていますよ」

瞬間、頬に痛みを感じた。

そつえばさつき、抓ったね。自分の頬。

「……夢、だよな？」

と聞けば目の前にいる少年+2名は真面目な顔をして頭を横に振った。

騎士、シリウスに至っては哀れみの表情さえ浮かべている。

次第に不安になってきたぞ。これが夢でないとすれば………もしかして……あたし、相当ヤバイ事に巻き込まれていない？

「あ、あのさ！！」

あたしを召喚したんだよね？なら、戻す事も可能では！？

淡い期待を抱いてレガードを見る。

しかし、彼は藍が言いたい事を悟ったのかニッコリと微笑んで、

「ちなみに戻す事は無理です。この国の、次期国王であるセリオス殿下の子供を産むまでは」

「……ごめん。耳が可笑しくなった。幻覚が聞こえた。初めから、ゆっくりとちゃんともう1度言ってみて」

「ですから、あなたを召喚したのはわたしです。そして、あなたは元の世界には帰れません。セリオス殿下の子供を孕み産むまでは」

……えっと……つまり、妊娠しろってことですか？ゲーム通りに？

ハッキリ言われて……頭の中が真っ白になった。

あれれ？今なんつった？

目の前の美青年はなんとおっしゃいましたか？

孕め？子供を？誰の？

妊娠しろ？子供を産め？……王子様の？

………うそん！！

「わんもあぷりーずもう1度」

「（わんもあぷりーず？）ですから、帰りたかったらさっさと殿下の子供を産んでくださいと言っているんです」

「………なんで？」

「数日前、セリオス殿下が何者かによって呪いを受けて子供の姿に変えられてしまいました。まあ、多分敵国の仕業だとは思うのですが……もちろん、呪いを解くためにありとあらゆる手を尽くしその方法が書き記された古文書を見つけ出し、解読もすみました。それです。その古文書によれば、最も安全にその呪いを解くには異世界の少女と交わり子を授かる必要があると記されていたのです。失礼だとは思いましたがまあ、わが国のために犠牲になって貰おう

かと思ひまして。それで我が国の呪い師に協力してもらい、殿下と相性のよさそうな貴方を無断で召喚したというわけです」

ですからあなたを帰すわけにはいきません……ってねえ。

「……確認の為に聞くけど、王子って誰？」

「この少年です」

レガードの傍に控えていた少年、もといセリオスが嫌そうに眉を歪めプイツと左を向いた。

……可愛くねえ。すげえ可愛くねえ。

っーかね、あたしはね。

「あたし、シヨタコンじゃありません」

ですからお断りします。全身全霊を持って。

「安心してください。中身は20歳を過ぎています」

「そういう問題じゃないから……！」

「おやおや。ではどういう理由なんでしょうねえ。言っておきますが、このわたし以外にあなたを元の世界に戻せるだけの魔力を持った魔導師はそうそういませんよ？ ついでに言ってしまうえば、帰るために必要な儀式の道具もわたしの手の中ですから」

キラリンとレガードの眼鏡が不気味な光を発する。

あ、悪魔の化身だこの人。

「さて、どうしますか？」

ふざけんなー！

……そう叫んでみたものあたしの言葉なんて聞きとめてもらえず、

『興奮ぎみのようですのでまた来ますねV』

と彼らはこの部屋から出て行った。二度と来んなー！

……さて、と。落ち着いて整理してみよう。落ち着いて。

1・まずこれは夢ではないかもしれない。
だってリアルすぎるし抓ったら痛かったもん。これで夢だったら凄
すぎ。

2・帰る方法

憶測だけど、多分レガードって人は帰り方を知っていると思う。
王子の子供を孕んで産めばなんとかしてあげる……みたいな事言っ
てたし、知っているはずだ。

……でも子供産むのはさすがに嫌だ。

3・これからどうするべきか

とにかくこの世界の情報を集める事。そして、帰るための手段を手
に入れること。

その際に、バットED行きには気をつけること。目指せノーマルE
D！！

「とにかく、まずはこの世界を知る事から始めないといけないか」

これは、いつものゲームじゃないんだから。

……ああ、地球にいるお母さん、お父さん、意地悪な兄さん。

どうやら神楽藍はマジで異世界トリップ（イン ゲームバージョン）を体験してしまったようです。

ですが心配しないで下さい。

無事に帰って見せますから。

ええ、もう絶対に。

つか、いくらなんでもね、初めて会った（クリア済みでも）ゲームキャラに処女渡せるか……！！

こうして、あたし、神楽藍の『望まぬ』初の海外旅行は始まってしまったのであった。
アーメン。

1章・誘拐されて異世界へ（後書き）

セリオスの呪いを解くには異世界との間にできた子供が必要です。
その理由はこの後に分かってきます。

2章・とりあえずやむを得ない

エルタイン王国

国土面積はそれほど大きくはない。小国というほど小さくはないが、大国というほど広くはない。

だが四方を豊かな緑に囲まれたこの大地では作物や鉱物が豊富に採れ、それによって国庫は潤い、国がなりたっている。

自然の恵みを与えてくれる精霊たちに守られたこの場所をかつて人は聖地と言い、今でも親しみも込めてこう呼ばれることもある。

『ウィル・ガーディアン』……緑の都と。

「……ふざけんな」

「ふざけてなどいませんよ」

もう半日も続く守攻戦。

いい加減にして欲しいわけよ。マジで。

「あのさ、いきなり子供を産めとかありえないでしょ」

「ありえませんがねえ、普通なら」

「だったら！！早くあたしを元の世界に戻してよ！！！！」

「頭の悪い子ですね。子供を産んだら帰してあげるといつているんですよ」

理解してくださいと、レガートは子供をなだめるようにあたしに言う。

それがまたガキ扱いされているようで癪に障る。

理解していないように思えるがあたしはきちんと自分の状況と立場を十分に理解していた。

反抗するのはせめてもの意地だ。

だってあたしはまだ処女なんだから！！！！！！

産まれてから約15年。

小・中学校と女子中に通い、高校も女子高に通う予定のあたしは今まで男性と体験していなければファーストキスもまだな今時珍しい清く正しく美しく、な乙女だ（相手がいなかったともいう）

それなのにいきなりお付き合ひ、婚約、結婚すつとばして妊娠だ！？絶対に無理！！！！！！

しかも相手は自分より年下の10歳の少年。

たとえ本来の姿が20過ぎた年上だとしても、どうやってもありえない。

だから反抗してやる！絶対に妊娠してたまるものか！！！！
そんなに子供が欲しけりや他をあたれ。仮にも王族でしょ。
女の子なんて選り取り見取りでしょ！！！！

そう言えば『そうですね』と言われた。

「まあ、確かに女なんて選り取り見取りでしょうね。

ですが、それとこれとは話が別です。なにが不満なんですか？

呪いが解ければセリオス殿下は絶世の美青年になりますし、しかも王族ですよ？

あなたが子供を産めば、ゆくゆくは王妃に……まあ、しよせん側室止まりでしょうけど……良い思いができる事は保障いたしましょう」

「ぜってえ嫌」

やれやれ。と、困った顔をして肩をすくめるレガードの顔をぶん殴ってやりたい気持ちになったあたしは手元にあったクッションを彼の顔めがけて投げた。

が、彼はヒョイッと軽くかわす。

外れたか！！

「、ちくしょう!!!」

「いけませんねえ。まったくお転婆なんですから」

ニコリと笑う彼。

クソ!! 胡散臭い笑顔しやがってこの×××野郎!!

放送禁止用語を心の中で叫びながらため息を吐いて空を見つめた。

この世界に来てから約3日。

朝から昼にかけてはレガートとこのやり取りが続けられていた。

ちなみに昼から夕方にかけては自由時間でこのお城の中で書物を読む毎日。

この世界の文字はリルバ文字とよばれる文字を使っていて、あたしの世界で言うローマ字のような文字だった。物凄く分かりやすく、正直助かった。おかげで勉強がやりやすい

そもでもって初日からセリオスとの攻防戦が繰り広げられた。

セリオスも自分の身がかかっているせいか本気で犯されるかと思っ
た。あんな子供のようななりをしているくせにメチャクチャ力強い
しね。

(でも×××蹴ったら次の日からいきなり襲われなくなっただ)

2日目はなぜか食事に催眠薬っぽいものが混ぜられていて、やけに
優しいセリオスに警戒して食事を交換したおかげでなんとか純潔を
守れた。

今夜からはこの部屋ではなく正式にお客様として客室が用意された

らしいが……用心はしたほうが良いだろう。
いつ処女喪失になるか分からない。

そして、今現在。3日目。

逆に純潔守っている自分が凄い気がしてくるのはあたしの気のせい
だろうか？

否、気のせいじゃないな（汗）

「で、レガート。今日の予定は何ですか？」

「おや？ついに観念しましたが」

「誰がするか……！」

これ以上話し合っても昨日と同じ返事はNOなんでしょう……！
だったらさっさと次の予定聞いてあなたの側から離れたいわけ

「おやおや。随分と嫌われたものですねぇ」

悲しいです。わたくし。

嘘つくんじゃないよ……！！

「……さて、冗談はこのくらいにしてどちらを希望しますか？」

「質問の意味が分かりません」

「これは失礼。申し訳ありませんでした」

「白々しい」

「（無視）では、第1選択の花嫁修業を始めますか？」

それとも第2選択のこれから殿下の私室にて甘い一時をお2人でお過ごしになられ「第3選択の勉強」……つまらないですねえ」

「つまらないって……別にあたしはあんたを喜ばせるために生きてんじゃないから」

「やれやれ……そのお言葉使いも直していただきますよ」

ハアツとため息を出しながら呆れた顔をされた。

言っとくけど、あたしを召喚したのあんた達なんだからね。

文句があるなら他の人、少年ラブのシヨタコン女でも召喚して、呪いを解かせてあたしを元の世界に戻せってんだ。

……………ん？呪いを……解くって。

「……………そういえばこの国と争っている……アークザル王国、だっけ？」

アークザル王国。

この国とは対照的に砂に覆われた大地に栄えた国。

イメージ的にはアラブ系が一番近い。

緑豊かなこのエルタイン王国とは違い砂で覆われた灼熱の国アークザルは主に商業でなりたっている（ちなみにこの2つの国が長年対立しているのは有名な話だった。アークザルはエルタインの鉱石や作物がどうしても欲しいらしい）

「ええ。アークザル王国がどうかいたしましたか？」

「アークザルの魔導士がセリオスに呪いを掛けたんなら、解くこと

も可能なんだよね?」

「理論的には可能ですが」

「じゃあ! 呪いを掛けた相手をひっ捕らえてきて呪いを解かせれば万事旨くいくんじゃない?」

「無理です(ズバツ)」

「なんでやねん!?!」

これ結構良い感じじゃない!? 呪い解けんじゃない!? その期待をザックリと奴は切り裂きやがった。少し馬鹿にもしている。

「あのですね、どうやって魔法を掛けた相手を特定するんですか?」

「……………う……………そ、それは」

「仮に特定できたとしても、使われている呪いが邪法ですから、解くの何年かかるか分かりませんよ」

「うっうっうっ(汗)」

「そもそも、あなたは魔法と邪法の違いは分りますか?」

「魔法は自然界の源、精霊の慈悲を借りて力とし、邪法は人の怨念や無念を源としている。です」

「昨日今日で良く理解できましたね……………そうですね、70点差し上

げます」

「一応ゲーム攻略済みですから。最低限の事はね、覚えているよ。つーか、70点ってなにが基準になっているわけ？」

「簡潔に言いすぎなので70点にいたしました。では、おさらいの為に簡単にご説明しましょう。」

「まず魔法には簡単に分けて8つの精霊の力、すなわち火・水・風・土・雷・木・闇・光といったものが存在します」

「……今心の中読んだよね？」

「（無視）8つの力はそれぞれ特殊な【魔力】が存在しているため、特定はそう難しくありません。」

「たとえば『水』の力でわたしがあなたに呪いをかけたとしても直ぐに同じ属性の『水』が必要だと特定されて解除されてしまいます。ですが、邪法ではそうはいきません」

「（無視された！！）現在確認されている邪法はすでに失われた技法で作成されているために通常の呪いの解き方では解除することは出来ない。」

「さらにそのほとんどが対になっていてそのため発見は極めて難しいし、今回使用された邪法と対、または同じ種類のものを探すのにはほぼ不可能に近いと思われる……これであつてる？」

「合格です。その通りですよ。」

「セリオス殿下にかけられた邪法は恐らく弱者の呪い。その対となる強者の邪法、もしくは同じ物を探し出すなんて無理です。不可能です。第一、そんな面倒な事してられないでしょう？」

「本音出たね。面倒って」

「……おや」

わたしとしたことが……っと、彼、レガードは困ったようにあたしの方を見た。

ニヤニヤって……お芝居か、こんきちしょう!!

ん?けど、待てよ。

ゲームでは確か……アークザル国の第二王子、ブライド・アークザルが弱者の呪いを持っていなかったっけ?

……うん。持ってたような気がする。

それに、ゲーム後半で確かヒロインがアークザルに誘拐され自国に招待される場面があった。

その時に城で監禁されるが逃げ出して……その時にブライドの部屋で弱者の呪いを見つけるといふシーンがあったはず。

この場合、ヒロインはあたしになるから、あたしが誘拐されるはずだ。

ゲームは何度かプレイした。

お城の構造もなんとなく分る。

だったら大人しく誘拐されて、ブライドの部屋から呪いを盗んでなんとかこの国に戻って来ることが出来れば、晴れてあたしは自由の身になれるんじゃない……

そうよ、出来る!!あたしなら出来る!!

なんていったってあたしは元プレイヤーのゲーマー!!多少のバグが起きたとしても持ち前の根性と度胸で乗り切ってやるわ。

ビバ！自由。帰れる！！帰れるわ！！

「つーことでレガード」

「なにが『つーことで』なのか分りませんがなんでしょっつ？」

「あ、あたし、武道やりたいです」

「……は？」

無事にこの国に戻って帰るために。

2章・とりあえずやれること（後書き）

えっと、この世界の魔法について説明しますね。大きく分けて3つあります。

魔法はそのままのイメージで使います。たとえ炎の塊を飛ばしたり空を飛んだりするのが『魔法』。これは精霊と呼ばれる人たちの力を借りて使います。精霊は魔術を持った人間にしか見えませんというか、恥ずかしがりやなのでめったに姿を現したりはしません。

次は邪法です。これは人の悪意や怨念が形になったものです。通常は穢された地に漂っていたり、まれに箱や水晶に閉じ込められていたりもします。主に呪いに使われます。常に2つ、対で作られている為呪いを解くのが滅茶苦茶難しい。

最後は召喚術です。レガードがおこなった術もこれです。異世界からモノを呼び込んだりします。人以外の生物と契約をおこなえば世界どこにいても呼び出す事も可能ですが大変高度な術で1つの国に1人いれば良い方です。

ちなみに現在まったく使用不可能になっている魔法は古代魔法と呼ばれます。

3章・とりあえず体を鍛えましょう

「では始めましょうか」

「お願いします先生」

用意された槍を模った木の棒を持って腰を落とし、目の前の藁で出来た人形に突きつけるようにポーズを決める。

気分はまるでRPGの戦士。なかなかさまになっているかもしれない。なんてね。

けどこれ、結構もちやすいな。こんなところで用意したんだろう？

その後、レガートに無理を言って午後の予定を全て護身術の習得に変えてもらった。

嫌そうな顔をしたがあれよこれよと言いくるめ、やっとの事で許可をいただいたのだ。

その代償はけして軽いものではなかったが……背に腹は変えられぬ。

そう。それが例え自分の運命を左右する 形だけの婚約指輪をはめるはめになったとしても。

あたしはそつと贈られた婚約指輪を見つめた。

淡い桃色をした石が嵌められた指輪。しかもご丁寧に外れない呪いつき。外すには清らかな乙女をやめること。

……つまり、処女でなくなったときに自然に外れる仕組みになっているらしい。嫌な呪いだよね。

逃げられないこと前提に仕掛けてきやがった。クソツッ！なんとか外そうとしたけれどビクともしやがらねえ。あのクソ魔道士め……今に見てるよ！

「なにを考えているか大体想像はつきますが今はまず目の前の事に集中して貰えませんか？中途半端な心構えだと怪我しますよ」

「あ、ごめんなさい」

「では、まず基本から練習しましょう。

その人形に攻撃してみてください。どんな構えからでも良いですから」

「はい」

本日より剣術の先生になったシリウスに言われてあたしはありった

けの憎しみと力をこめて人形を貫いた。

人形の顔には眼鏡が掛けられている。その為かいつそう技に磨きがかかり見事に槍は人形の股間あたりに命中した。

「ウォー！！見事だわ」

本物なら即、再起不能になったことだろう。うん、本物じゃなくて残念だ。

しかしシリウス、驚いていても無表情なんですね。

……笑ったらさぞ綺麗だと思うんだけど……もったいない。

「……まあ……筋はなかなか良いですね。見事なものです」

「やったー!!」

「ですがどうも右に偏りすぎているようですね。攻撃が丸見えです」

「素人にそこまで期待しないでもらえます」

「それもそうですね」

……この男、白に見せかけて黒か。否、黒に限りなく近い灰色だね。

「で、人形破壊しちゃったけどどうすれば良い？」

「そのまま使いましょう。幸い破けたのは×××部分のみのようですし」

「……ちょっと」

「はい？」

「はい？じゃないわよ！！乙女の前でなんて破廉恥な言葉を出すのよ！！！」

とてもじゃないけどそんな言葉は口には出来ない。聞きたくもない。いやね、狙って攻撃したけどさ。

腐ってても一応乙女。いくらなんでもその言葉はヤバイだろう。するとシリウスが笑った。貴重だけど心からの微笑ではない。ああワザとなのね。

「……なんかあたしあなたの性格つかめてきた」

絶世の美青年。女神の生まれ変わり。そんな巷の噂なんてしよせん噂だったようだ。

少なくとも、女神様のような慈悲深さは持ち合わせていないだろう。魔王なら理解できるが。

「失礼ですね」

「だって考えても見てよ。シリウスって絶対自分に被害がなければたとえ街中で乱闘が起きても放っておくでしょう？」

「そんなわけありません」

「本当？」

だったらかなり意外かもしれない。少なくともあたしから見た彼は見た目爽やかお腹真っ黒だから。

被害さえ酷くなければ乱闘程度放っておきそうだが……結構良い人

なのかも。

「いくらなんでも街中で乱闘なんて起きたら止めますから。僕のイメージ悪くなるでしょう?」

前回撤回。

やっぱお腹真っ黒だ。

「灰色ですよ」

「認めやがったしかも心読みやがった」

こいつ怖ッ!!マジ怖ッ!!

「……さて、お喋りはこのくらいにしておいて修行を再開しましょうか。心臓か、人体の急所を狙って攻撃してみてくださいね」

「ハッキリ言って心臓以外には男性のシンボルしか急所しりません」

「……とにかく、体の中心部を狙ってください。数打てば当たりますから」

「オーケー」

人形に眼鏡を掛けてみよう効果。

その日の稽古は思った以上に上手くいった。

次回から使用不能になった人形にはいくつもの穴が開き、それをみたシリウスは『次からも眼鏡着用の特注で作りましょうか。その方が上達しそうです』と言われた。

うん。自分でもそう思う。普通の人形じゃもう上手くできない。お金がかかっても特注でお願いします。

眼鏡がかかっていたほうがなんだか気分がいいし、あの男に直に攻撃している気になれて調子いいもんね。

ルンタツタルンタツと城の中を見学する。

指輪効果のおかげか、逃走不可能となったあたしははれて（この城の中限定。街では騎士付きだ）自由となった。

まあ、街の外には出れないけど、城の部屋に監禁されていた頃に比べてはかなり楽になった。精神的にも肉体的にも。

時折挨拶してくれるメイドさんやお手伝いさんと話をしながら誰も近づかないと言われている離れにあたしは向かっている。

目指すは北。誰もいないいくつかの廊下と様々な花が咲きほころぶ庭を横切り一角の建物についた。

円形でいかにも古そうな建物。
鍵は掛かっていなかった。だからそつとノブの部分に触れ開けた。
ギイッと錆びた独特の音と一緒にドアが開く。

初めに感じたのはインクと紙の香り。
次に暖かな風の感じ。

「……………わぁ……………」

見渡す限りの書物があった。
端のほうに簡易な机と椅子があるがそれ以外は全てが棚と本。
二階にも上るスペースがあり、そこからどれだけ巨大な書庫なのかが分かる。

けれど、埃等はない。定期的に整理されているおかげである。
シリウスに聞いたとおり、誰もこないせいかととても静かだ。

フラフラと近くの本を手にとって見る。

王家専用の書庫であって貴重そうなものばかり。
雑学用や専門用だけではなく、神話や御伽噺も揃っているという。

難しい本は読めないけれど、簡単な本なら読めそう。

あ、この神話なんていいかも。

選んだものはこの国の始まりの物語だった。
400年もの昔の神話。

『黒の女神』

これにしよつ。

一冊の本を持って隅に座る。

椅子もあるけど、あたしには高すぎるかなと思って床に座ることにした。

サラサラと時折撫でる風が心地よかった。

都会では感じることの出来ない緑の匂い。

それを満喫しながら、絵本を捲る。

昔々、この国には

偶然か、選んだ絵本はこの国で最も読まれている国の成り立ちについてだった。

3章・とりあえず体を鍛えましょう(後書き)

もしよろしければ感想や評価など欲しいです。一言でもやる気が全然違うので・・・

誤字、などの報告も受け付けております。遠慮なくどうぞ。

4章・とりあえず話してみましよう

ゴーンゴーンゴーンと、3回鐘が鳴り響いた。

ハツとする。随分集中していたらしい。腰が、お尻が痛い。

ああ、まだ読み終わってもいないのに……でも、借りていっても良いかとその本をもって王宮へと戻った。

また嫌な時間帯がやってくる。どうせまた口げんかで終わりそう……

憂鬱な気持ちでオウジサマ……セリオスの元へ向かう。

これも、1つの契約だった。自由を獲得するために。

4回目の鐘がなるまでに最低でも一回はセリオスの元に挨拶に向かう。

(朝に1回、お昼に2回、夕方に3回、そして夜に4回鐘がなる)つまり一日に一回は顔を見なくちゃいけないってわけ。どんな時でも。

コンコンとドアを叩く。

入れと入室の許可を貰い入ると夕日の逆行で少し大人っぽく見えるセリオスが机に向かって仕事をしていた。

今は呪いで小さくなっていても殿下は殿下。やるべき事は沢山ある。しかも実年齢は20歳だしね。

「ああ、お前か」

「お前つて……いい加減名前覚えてたら？」

いくらなんでも名前ぐらい呼びなさいよ。

「……ハッ！覚えて欲しかったらそれなりの態度を示すんだな」

「だったらあたしも呼ぶわよ。坊やって」

眉間にしわがよった。ヤベツ！やりすぎたか？

そう思っても既に時遅し。

ツカツカとやってきたセリオスは小さいながらも鋭い目つきであったしを睨み付けた。

隣の壁がドンと凄まじい音を発した。セリオスが殴ったから。かなり大きな音だったから少し驚いた。

本来ならこれ&顎をつかまれるか押さえつけられるんだろうけれどなんせ彼は150cm未満の少年。

睨み付けるのが精一杯のようだ（ドアを叩きつけても吃驚しただけで怖くないし。寧ろ見上げているから少し可愛い）

それでも、威厳を損なわない彼はさすがというべきか。

「坊や……だと？貴様、この俺を怒らせる気か？」

「……言われて嫌な事は人にも言わなければ良いでしょ。あんたが不愉快に思うようにあたしも不愉快なの」

「俺は王子だぞ！！この国の！！次期国王だ！！」

「だからなによ。あたしはこの国の人じゃないの。あんたなんて知らないわー!!」

「うるさい!!お前も、俺の物なんだぞ!?身の程を知れ!!!」

「誰があんたのものなのよ!!ふざけないで!!」

「なんだと……!?!」

「無理矢理呼んだんじゃない!好きであんたの傍にいるわけじゃないわ!!」

「帰してよ!!あたしを元の世界に!!」

「……それは無理だ。方法はレガードしか知らない。それに、帰すつもりもない。この俺の呪いが解けるまでは」

「ありったけの言葉をぶつければセリオスは黙った。

言い過ぎたかもしれない。けど、素直には謝れない。

頭が痛いとはかりに彼は眉間を押さえた。

「俺だって……好きでお前を傍に置いているわけではない」

「でしようね。お互い会って数日だし」

「一目惚れして傍にいるわけじゃないし。」

「義務だ。俺がお前を抱くのは。子供さえ残せば後はどうにでもすればいい。」

「残るなり、帰るなり自由にすれば良い。嫌な思いをするのはたった

1・2年だぞ。

他の女なら、喜んで俺に身を任す」

「少なくとも、あたしは愛してもいない男の子供を産むのはごめん
なんだけど」

「……だが、産んでもらわなくては困る。それが、唯一確実な呪い
の解き方だからな」

「てか、なんで子供を産むことが呪いの解き方につながるわけ？」

それが一番謎なんだけど？

ゲームだとその辺の所、隠されてたのよね（来年続編が出る予定だ
つたから）

首を傾げるとセリオスの紫闇の瞳が驚きに染まる。

「レガードから聞いていないのか？」

「セリオスに聞けって」

レガードは教えてくれなかった。そう言うとセリオスはため息を吐
く。

その答えに想像でもついていたのか、殿下は眉間に皺を寄せた。

「……そうか」

疲れたように座れと椅子を進めるセリオス。

豪華そうな椅子……あ、沈む。

それに座ると彼は書類の入った机から一枚の紙を取り出す。

「説明してやるう。まずは、これを見る」

「なに、これ？」

見せてもらったその紙は所々赤いインクでチェックが付けられていた。

左上には龍と百合っぽいマークが司られた版行が押されている。なにか特別な物だということは一目で分かる。

「これは、我が国の魔導師に探させた呪いの解き方を綴ったものだ。お前が来る前に様々な方法を、ありとあらゆる手段を探させた……だが……」

1〜5のチェックが付けられた文字は最後の一箇所を残して全て塗りつぶされていた。

「この最後の文字が召喚の儀式？」

「ああ。初めは対となる邪法を探させた。だが、見つからなかった。次に水の都、シャルティスから大魔導師殿に協力を願った。だが、解けなかった。

他の方法も試してみたが……全滅だ」

そして、藁にも掴むほどで召喚の儀式をしたという。

400年前にただ一度限り成功したと伝わる異世界から女神を呼び寄せる伝説の大魔法を。

「伝承では、異世界の少女との間に生まれた子は神の祝福を受けるといわれている。

全ての精霊を操り使役する能力を神から授かるんだ。

どんな魔法も使える。闇も光も、邪法の呪いさえ無効化する魔法も……正直なところ、異世界などただの伝説に過ぎないと思っていたが……な」

なるほど……それで異世界の女がどうしても必要だったわけね。

でもその様子じゃ本当に気休め程度にしてみただけだったみたいだね。その気持ち、凄く良く分かるよ。

「普通は思わないでしょうよ。大体、異世界があるかどうかも怪しいものでしょう?」

「ああ、そうだな。だが、そんな怪しい伝説でもそれが我が国の成り立ちが成り立ちだからな」

「あの、異世界から来た女神が……ってやつ?」

「知っていたのか?」

そんなに驚くことでもないでしょう?

これくらいなら知っているよ。確か本も持ってきて……あ、あった! 厚さが結構あって銀で細工された竜と金で細工された花が彫ってあるいかにも貴重そうな本。

……今更だけど持ってきて大丈夫だよな? 読めば返すし。

不安になってきたけどなにも言われなかったから大丈夫だと判断し、セリオスに見せる。

「これ!! 今日読んだ絵本に描いてあったしレガードも言ってた。本当の事なの?」

「そう言われているな。実際にはどうだか……なにせ400年以上

も昔の事だ。

それにしても良くこんな古い物を引っ張り出したな。もっと新しい物があったらどう？」

「そりゃあつたけど子供向きすぎて簡潔にしか書いてなかったし……けどこの絵本、子供向けは子供向けだけど詳しく書いてあったから」

「そうだろうな。一応、それは学問の都『リシユールア』から取り寄せた原本だ。詳しく書いてあるだろう。貴重な品だぞ」

「……勝手に持ってきたらまずかった？」

「かまわん。誰も読む者がいなければ宝の持ち腐れだ。お前にやる」

「……良いの？」

「ああ」

「……うん。ありがとう！」

貰えるなら貰っておこう。

素直にあたしはお礼を言ってお頭を下げた。

その時カチャツといつの間にかお茶が用意された。

ナイスタイミング！！

ちょうど喉が渴いていたのと言えばメイドが挨拶をして出て行った。ドアの前にはいつでも用事が言いつけられるように常に数名の人が待機している。

大変だなあと思いつつ、美味しいお茶を堪能させていただく。
今日のお茶は八チミツ風のやつですか（ちなみに個人的にはラズベ
リーみたいなのが一番美味しかった）

「でも大変じゃなかった？召喚の儀式って簡単に出来るものじゃな
いでしょ？」

「危険も伴うしなにより厄介だ。道具の手配に必要な人材探し……
おかげで色々結構苦労したな。

準備ももちろんだが……なにより召喚されたのはこんな女だしな」

「むっ……それ、どういう意味？」

「はつきり言って欲しいのか？」

ニヤニヤとセリオスは笑う。

それがまた憎らしい。

ムカついて、てりやあつと足を蹴り上げた。

足で一番痛い場所に当たっただけらしい。

短い悲鳴が聞こえキツと睨み付けられたが怖くもなんともない。

優雅にお茶を飲み続ける。

オホホ……ざまあみろ！！

「……俺にこんな事をして許されるのはお前ぐらいなものだぞ」

「あら。光栄ですわ」

忌々しげにお茶を飲む彼。

こうしてみるとセリオスもゲームのキャラクターではなくセリオスという1人の人間なんだなってつくづく思う。

ブラウン管の向こうにいて、けして手の届かない場所にいた彼。プライドが高くて、意地悪で、女嫌いのプレイボーイで、

「セリオスの性欲処理って恋人じゃなくてその道専用の女性ってホントウ？」

思わず出てしまった言葉。

もちろん情報提供者はレガード。こんな要らない情報ばかりが増えていつている。

あの人本当にあたしと王子をくつつけたいのかな？なぞだ。

ブフツと紅茶を吐き出す音がしてごほごほと咳き込む彼はその体勢のまま固まった。

その後片付けを無表情でこなすメイドさんはこの国で一番立派だと思っ。

傍にいる兵士さんでさえ青ざめている。

ここにレガードがいたら高確率で笑っていたな。

「……………貴様……………」

地を這うような声と蛇のようにギリリとした目で睨まれた。

今日1日で何回睨まれたかな？3回？4回？

ここまで睨まれたら逆に怖くなくなった。

「有名だったよ。セリオスの女遊びの噂。

セリオスから誘うの？それとも女のほうから寄ってくるのかな？元々のセリオスならモテそうだもんね。選り取りみどりでウハウハ？」

「くだらん」

「え〜つまんない」

「つまらなくて結構だ。」

「だいたい、寄ってくる女や誘われて付いてくる女なんて俺の地位と見た目にしか興味のないやつらばかりだったぞ」

「……そっかな？」

「なに？」

「確かにセリオスの見た目や妃の座って普通の人から見れば魅力的だと思う。」

「けど、中にはセリオス自身のが好きっていう人だっていたと思うよ。」

「現にあたしはセリオスの見た目はカッコいいと思うけどそれだけだもん。」

「しいていえば観賞用みたいな感じ。」

「地位だって、未来のお妃様になれる〜って、そう言われたって興味なし。」

「面倒だと思うし、なりたくなんてない。」

「というか、妃の器ってないからね、あたし。これっぽっちも欲しくない。」

「だからさ、あたしみたいな人間がいるくらいだから好きになつてくれた人全てが見た目や権力目当てって考えは悪いと思う。」

「1人ぐらいはセリオス自身を見てくれた人、いると思うし。」

「……よく、分からないな」

「そう?」

まあ、それも仕方ないか。

生まれたときから彼は王子様だったしね。

環境的に難しかったのかも。あからさまに目当てで近づいた人も沢山いたと思うし。

そう思ってお茶を口に含めば彼はとんでもないことを言った。

「……だったら、お前が俺に惚れる」

ブツと、今度はあたしの方が吐いちゃった。もったいない。

「~~~~!!いきなりなに言つのよ」

面白いことを思いついたとばかりに彼は笑う。

あ、嫌な予感。

「お前は俺の権力にも見た目にも興味はないのだろう?」

「……ない」

「だったら俺に教えてみる。その、愛というものを」

真剣な眼差しと、手を取って。

まるで忠誠を誓う騎士がするような優しいキスをされた。

……正直かつこよかった。

悔しいけど、このままじゃ惚れるかもしれない……でも、なんか悔しい。
だから、

「だったら……惚れさせてみてよ」

悔しいから、反撃してやるっ。

じっと見つめてニッコリ。

「セリオスの子供を産んでも良いって思わせるぐらい、あたしを惚れさせてみせてよ。

ね、オウジサマ」

「……ああ」

4章・とりあえず話してみよう(後書き)

セリオス殿下、アイに興味を持ち始めました。

5章・とりあえず礼儀作法を覚えましょう

パシントンと、鈍い音と共に赤い色と痛みが手の平に広がった。

「いい加減していただけませんか？何度も同じ事を言わせないでください。」

お辞儀もろくに出来ない。たった20mも満足に歩けないなど……
今までどれだけ甘やかさせてきたのですか」

「……やってられつかあああ!!!」

頭の上に乗つけられていた本をミシエル先生目掛けて投げつける。
けれどそれをさも予測していました的にサツと右に顔だけ移動させてよけた彼はこちらの方が疲れましたため息を付きながらハラハラと泣きまねを試みせた。
もちろんハンカチを目に当てたまま。

すでに日常化されたこのやり取り、作法の『ミシエル先生』VS『あたし、神楽藍』の戦いは既に伝説化しているんじゃないかと思う。

お忘れかもしれないがあたしは異世界人。

作法とは程遠い生活をしてきた人種なわけだから一歩歩くにもお上品に……なんて真似にも苦勞する。

それを部屋の端から端まで。

はい、お辞儀から……なんてそんな高度な真似は難しすぎる。

「これくらい出来て当然なんですよ。年頃の女性が、今までどんな教育を受けてきたんですか？」

初めからやり直しです。

ハイ！！パンパパン！！今日はこのリズムを体が覚えるまで帰しませんよ」

「無理無理むりり！！」

もうヤダと、暑いわけでもないのだが緊張のせいで汗がドバドバ出てくる。

駄々をこねてもしょうがないけど無理なものは無理。難しすぎる。

挨拶の作法、食事の作法、ダンスの作法、上げればきりがなくらい、作法はある。

それをある程度こなしてみせるのが当たり前だとミシエル先生は無理なことを言う。

セリオスのお嫁さん候補の貴族からしてみればパツと現れた庶民出のあたしが側室候補（と認識されている）というだけでもありえないうのに、その上さらに礼儀作法を1つも知らないというのはかなり不味いらしい。

事実、何度も注意と嫌味を繰り返された。

なぜ、あなたみたいな下賤な輩が……身の程を知りなさい……と。

例えば第一妃候補のマリン・モンド嬢や第二妃候補のシャルロット・バノン嬢。

特にこの2人は相当あたしの存在が目障りなんだろう。毎日飽きずにやってきては喧嘩を吹っかけてくるのだから。

それを黙らせるならそれ相当の身の振る舞いをするべきだと言われた。

分かってはいるのだけれど……頭では理解していても体がついていかないのだからしょうがない。

「ほら！！笑顔！！笑顔がたりない！！」

「だいぶ手こずっている様だな、ミシエル」

「陛下……」

現れたセリオスに驚いたようだがすぐに深くお辞儀をする。

あ、ヤバッ！！あたしもしくちゃ。

ジロツとミシエル先生に睨まれ慌てて頭を下げる。礼儀作法基本中の基本。お辞儀。

これだけなんだよね、唯一合格点もらえたのって。

「成果のほうはどうだ？」

「このとおり」

真っ赤になった手を見ればそれだけで今日の結果が分かるというもの。

その行動にミシエル先生は怒って真っ赤になり、セリオスは面白そうに笑った。

あの2人きりで色々話した日からセリオスは少しずつだが本当の笑顔を見せるようになった。
それまでは義務的な会話しかなかったのだが最近では他愛のない話もするようになった。

家族のこと

友達のこと

自分の考え

好きな本

好きな花

好きな時間

どんなことが好きか

嫌いか

愛しあっているわけじゃない。
いうなれば……少しだけ、心を開いたというべきか。

「クツ……ハハハッ！！苦勞かけるな、ミシエル」

「いえ、これくらいの事は」

「で、セリオスなんか用？」

「~~~~！！アイ様！！セリオス殿下になんという口の聞き方を！！」

「良い。かまわん」

「そうそう。セリオスとあたしの仲だもんね」

「……どんな仲だ」

セリオス……そんな小さいうちから眉間に皺寄せてるとおっきくなつても直らなくなっちゃうよ？

……あ、セリオスもう20だっけ？もう手遅れか。

「……お前、なんか企んでないか？」

「ソナナコトアリマセン……で、何のよう？」

「リデイがお茶会にお前を招待したいらしい」

「リデイ様が？」

リデイアース・エルタイン

このエルタイン王国の王位継承権第二位を持つセリオスの妹君。
つまりお姫様ってわけ。

歳は今年で13歳。あたしの2つ下でセリオスとは正反対のお転婆
だといわれている。

これらは全て噂だけのものでしかないけどね。

でもまだ会ったこともないのに……なんであたしなんか誘われる
わけ？

「お兄様。わたしく、この二週間一度もアイお姉さまにお会いし
たことはありませんのよ。」

ですから、今日催すお茶会にアイお姉様をご招待したいと思います
の『だと』

「セリオス、完璧に言い切ったね」

「これくらい当然だ」

「褒めてないよ!？」

「……ですがセリオス殿下、アイ様はまだ礼儀作法など」

「無視ですか!?!？」

「今回のお茶会は身内のみで行われる。問題ない」

「こつちも無視!?!？」

「ですが」

「喜んで参加させていただきます」

「……アイ様」

「ごめん。実はもう限界だったの。」

「朝から約5時間。延々と行われる礼儀作法にはもつぱら倒れそうだった。」

「つーかマジ切れる3秒前。」

「決まりだな」

ですがさすがにその普段着で茶会に参加させるわけには行かない。
参加なさるならそれ相応の服装をしていただきます。

ミシエル先生のその一言でこれだけの精神的ダメージを負うことになろうとは……つくづくこの暮らしは自分にはあっていない気がする。

それに今だって……

「この衣装なに？」

心の底からウンザリとした顔をしているだろう。今のあたしは。

現在の衣装。

映画やゲームの中の貴族の着るようなフワフワドレスにアップにして整えられた髪。

薄く化粧された顔に豪華な装飾品。

激しく似合わないと言論したがその希望が叶えられることはなかった。

ああ……映画なんかで見る貴族のお姫様みたい……格好だけは。

これでもかなり妥協したのですよ、アイ様が嫌がりますから……と先日任命されたあたし付きの侍女リサ（17歳）はそれはそれは不満そうな顔でそう言った。

似合わないんだけどなあ……ホント。

「ねえ、ホントにこの服じゃなきゃダメ？いつものじゃ」

「ダメです。リディ姫様とお茶会をあのよう質素な服で参加なさるおつもりですか？」

「あんな服でもあたしにとっちゃ十分豪華なんだけど……この服には負けるけどさ」

「豪華って……あれでもかなり抑えてあるんですよ。普段着ですし」

「普段着にしては豪華すぎなの。もっとこう……いっその事メイド服なんかが良いな。結構動きやすそうだし」

「……アイ様」

「……」ごめんなさい」

リサ滅茶苦茶怖い。美人が怒ると迫力あるんだからやめて欲しいよ。

「もう……アイ様ったら……」

「ごめんごめん。反省しました」

「本当ですか？」

「うん。もちろん。」

じゃ、仕度も済んだことだし」

お茶会を始めましょう。

5章・とりあえず礼儀作法を覚えましょう（後書き）

藍が異世界から来たことを知るのはその場にいた3人と王族のみです。周りには田舎育ちの貴族であり、セリオスの側室候補として認識されています。

6章・とりあえずお茶会をしましょう

あたしの中では『姫』というイメージには2通りあった。

1つは可憐なお姫様で花よ、蝶よと育てられた無垢なイメージ。

もう1つは我侷なお姫様で自分の思い通りにならないと癪癪を起すイメージ。

だが、この国のお姫様であるリディアート、通称リディはそのどちらでもなかった。

どんな人物か……例えるならばその2つのイメージを足したような方だった。

見た目は可憐で性格は……

「それで、アイには好きな人がいませんの？」

初めのおしとやかな感じはどこに行った!？」

リディは若干冷えたであろう紅茶をグビツと飲み干した。実に見事な飲みっぷりだ。

プハアっと、ついでにクツキーもボリボリ。

随分美味しそうに食べるけど……これはお上品には程遠いんじゃない……

…良いの？

「…か、ミシエル先生がこれを見たらなんて言うか……恐ろしい。

そもそも本当にお姫様なの？お姫様の仮面をかぶった他人なんじゃ

……

ツツ と嫌な汗が頬を伝う。

部屋の中にいるのはあたしの他にはこの部屋の家主であるリディの

み。

その場に待機していた侍女はセリオスが仕事の関係で退場した瞬間下がらされた。

目の前にいるこのお姫様によって。

見た目は文句なしの可憐なお姫様だった。

絹のように軟らかい銀の髪。

長い睫毛に縁どられ宝石のように輝くアメジストの瞳。

桜色に染まった頬に果実のように瑞々しい唇。

異性を虜にする愛らしい顔立ち。

男女関係なく触れてみたいと思わせる陶器のような滑らかな肌。

世界中の女性が欲しがるような容姿を持っていながらリディは……

その、非常にイイ性格をしていた。

その様子を表すなら『超!!!!!!!!!!最強』である。

レガードやシリウスのような腹黒とは違う。似てるんだけど違う。

なんていうか……説明しにくい。

「今のところはいないよ。見た目は良い人ばっかなんだけど性格にね……」

「それには同感ですわ。

お兄様はプライド高いし、レガードは女関係に何あり……シリウスも危険よ」

見た目は温厚そうだけど絶対お腹の中真っ黒よ。

慣れてしまったが可憐な美少女からポンポンと出るその言葉に啞然となる。

実際に知っていたとしても驚愕してしまうだろう。

うふふふ、おほほほな会話はセリオスが居た時だけだ。誰も居なくなつた時点でケツとなつた。

文字どおり、ケツとだ。

リディの事を好きな男が見たら発狂する事間違いなし。

もしくは夢だと思つて見なかつたことにするだろう。かけても良い。

けど、そんなリディにも女の子らしいところがあつた。

それは年頃の女の子なら誰でもする会話。

「あたしの事より、リディには好きな人いないの？」

「さあ、どうかしらね。でも、一応第一王女だから後1年もすれば縁談が舞い込んできて政略結婚でもさせられるんじゃないかしら。

つか、今からもう手紙きているからさうも、ウザツたくてしょうがないの」

「ちなみのその手紙は？」

「読まずに燃やすわ。ほら、あそこ」

確かに暖炉の脇には並べられた大量の手紙が薪の代わりになるうとしている。

送つた男は悲惨である。読まれた後ならまだしも封も切られないうちに燃やされる。

「ちょっとだけ。哀れだね」

「そ〜お？大体、噂だけで送ってくるほうが悪いんですわ」

『会ったこともありませんのに』とリディは言う。

だがリディのその美貌を観れば納得もいくというもの。

銀のセリナギ……と人は呼ぶ。

セリナギとは神話に出てくる聖花の事である。

エルティンにある聖樹カリンの根元に咲き、芳醇な匂いと美しさで人々を魅了する。

年に一度しか咲かないその花はバラに良く似ており確かにリディを表すのに相応しい。

銀のセリナギ……そのリディの容姿は大陸中に広まっている。

曰く、どんな宝石も彼女の輝きには叶わない。

曰く、どんな鳥の鳴き声も彼女の声には叶わない。

曰く、どんな美しいものも彼女の引き立てにしかない。

このご時勢、噂のくせに正確だ。たいそう恐ろしい。

そして噂を聞きつけた有力な権力者はその美しい花を手に入れようと求愛の手紙を書く。

しかし、哀れだ。そのラブレターはリディの目に止まることはない。

でも、それも仕方がないと思う。

実際に一目ぼれしたのであれば分かる。だが、見たこともない容姿を褒め、愛をささやくなんて真似は薄ら寒いというか……正直気持ち悪いの一言だろう。

「ちなみに下は5歳児のガキ、上は60過ぎの爺よ」

「そりゃ無理だね」

「でしょ。ふざけんなっての！」

あゝあ、いつその事家出でもしたいですわ」

怒ったように、それでも紅茶を飲む姿は様になる。

「難しいと思うよ、それ」

「分かっています。ちょっと言ってみただけですわ」

ペロツと悪戯っ子のように舌を出す。

どうやら本当にただ言ってみただけのようだ。とりあえず、安心。

「でも、無理矢理ロリコン爺の嫁にされそうになったらマジで家出しますわ。」

その時は協力お願いしますわよ」

「喜んで協力しましょ」

可愛いリデイを変態爺の所に嫁にはあげたくない。

その時は絶対協力する。

ありがとう。と、可愛らしく微笑んで彼女はお礼を言う。

「これで協力者ゲットです。手を血に染めなくてすみませすわ」

ブハツと紅茶を吐き出した。

恐ろしいことをサラリと言った彼女はコロコロ笑って美味しそうに

ケーキを突っついていた。

……やっぱり、普通じゃない」の子。

「ねえ、アイ」

「なに？リディ」

「私、あなたが義姉になるのなら上手くやっていけそうですわ」

「……考えておくよ」

「ええ。考えておいてください」

6・6章・とりあえず過去話1（前書き）

6章に出てきたリデイのお話です。とりあえず設定は

・リデイとユーリは幼馴染です。

そしてユーリはリデイのより1つ年上。

6・6章・とりあえず過去話1

銀のセリナギ

人は私の事をそう呼ぶわ。

セリナギとは聖樹の根元に咲く奇跡の花の事。

年に一度しか咲かないその花はよく神話や御伽噺に出てくる。

大体は精霊化身とか、女神様の化身とかそんな感じに。

だから、セリナギの化身と噂される私を想像する事は難しくはないの。

すごく簡単。

5歳児にだってできるわ。

そう。

一流の画家が描いた絵画を見て想像すれば良い。

すっとした顔立ち。

少し垂れ目がちな瞳

愛くるしい唇

そして……輝く銀髪

みんながみんな私の容姿を褒める。

美しいと

可愛らしいと

みんながみんな私に求愛の手紙を送る。

愛していますと
会いたいと

ふざけんじゃないわよ

愛しているですって？

会いたいですって？

どの面下げて言っているの。

会ったこともないのに私の何を知っているというの？

「……本当に、うざったいですわ」

新たに積まれた求愛の手紙を暖炉に投げながら呟く。

ポウポウと燃える炎が綺麗。

でも、その行為を見たユーリが悲鳴を上げた。

「ユーリ、煩いですわよ」

「う、煩いって、それ、姫様に送られた手紙じゃないですかあああ
あ！…！」

「あら。読む価値さえないわ。邪魔にならないよう、燃えカスにす
れば良いんです」

「良いわけじゃないですよおお！ただの手紙じゃないんですよ！一応正
式な手順を踏んだ書類で、」

「そおれ！…！」

バサバサと残りの手紙が暖炉の中で燃えカスと化した。
黒い灰が熱気によって舞い上がる。
ほら、再利用。

「ひ、姫様あ」

「なっさけない声ださないで下さいな。どうせ書いてあることなんて一緒なんですから読まなくても問題ありませんのよ」

「……そういう問題じゃありません」

「そういう問題ですの」

泣き出すユーリにリデイは呆れてため息をついた。
こいつ、マジで泣き出しそうですわね。

無意識のうちに拳を握る。

ああ、いつからだったかしら。

私が、彼、ユーリ・ハウランドに恋をしたのは。

リデイは横目で彼を見る。

ユーリはせつせと灰の塊を集めていた。

そんなもの、他の男から送られた手紙なんて、放っておけば良いのに……

「……馬鹿」

「姫様、なにか言いました？」

「……なにも言つてませんわ」

素っ気無く私は言い、また灰を拾いだした彼の横顔を見つめた。

雪から生まれたような白い肌。

木漏れ日から生まれたような金の髪。

灰にまみれたせいで今は薄汚れているがそれすらも美しい。

体は無駄な筋肉1つ付いていないだろう。だって彼はあのディオスの部下だ。

今はまだ良い。彼だつてまだ幼い。

けれど、後3年もすれば？

成人すればどうなるかしら。

目をつぶれば想像できる。

まるで美の女神の如く美しく、戦の神の如く雄雄しく逞しく……強く。

立派な騎士になるだろう。

そしてきつと、隣には私がついて、

私を守るのだ。

幼い頃に約束したとおりに。

でも、でも本当は守ってもらつより対等の位置に立ちたかつた。

王族としてではなく、幼馴染としてではなく、

恋人として、対等の場所に立つてみたかつた。

思いを伝える事は簡単。

けれど、彼が私を受け入れる事はないだろう。

だって彼の願いは『私が有力な貴族のもとに嫁ぐ』事だから。

それが私の幸せだと。
彼はそう、信じている。

ツンと、鼻がなった。
想像だけで涙が出てきそうになる。

「わ、わわわ！姫様、どうしました!？」

「……なんでもないですわ」

ユーリの心配そうな態度にも素っ気無くなってしまっ
だって、今ここで自分の気持ちを抑えないと大変な事になっ
てしま
う。

……分かってるわ。

あなたが私を、なんて思っているか。

そう。近い言葉にするならば『親愛』

妹としか見てくれない。

私の気持ちを言葉にすれば、きっと貴方は悩んで私の前から姿を消
してしまっしょう。

だから、私はこの気持ちに蓋をする。

……いつか、あなたと離れる事になるでしょう。
いつか、私は他の男の物になるでしょう。

その時あなたは、

少しは、悲しんでくれるでしょうか？

いえ、彼はきつとこう言うわ。

『姫様、おめでとございます。幸せになってくださいね』

その想像があまりにもリアルすぎてポロリと涙が一滴、絨毯に染み
た。
それをユーリに見られたくなくて、慌ててユーリにお茶の催促をす
る。

部屋を出たユーリを確認して、私は身を屈めて涙を零した。

私は王家の娘。

政略結婚は……当たり前なんだから。

だから、自分の気持ちに蓋をしよう。

「姫様、お茶をお持ちしましたよ」

「……そこに、置いてくれる？」

カチャツと食器の鳴る音がして、次に目の前に差し出された。
琥珀の液体。香りは……花。

「そこに、置いてって」

「姫様、これ、スイートミルっていうお茶なんです」

テーブルにお茶が置かれ、次に甘いケーキが用意されていく。
戸惑う私にユーリはポンツと頭を置く。
完全に、子供扱いだけど、

「心を落ち着かせる効果があるんですよ……ゆっくり、飲んでくださいね」

彼は出て行く。
私を苦しめた手紙を持って。

「……美味しい」

紅茶は爽やかな香り。
けど、とても甘い。

そう。私はこういう優しさと、さりげなさを持つ彼を好きになった。
昔から、私が泣くと用意された甘いお菓子。

癖なのか、必ず私の頭を撫でてから1人にしてくれる。
彼は言った。

私はまだ子供。だから無理をして背伸びしなくて良いと。
周りは早く大人になれと言った。私は王族だから人より早く大人にならないといけないって。

理解はしていた。
でも、苦しかった。

いつもいつも気を張っていて、心安らぐ時間さえこの部屋の中だけ。
だから、ユーリの言葉は本当に嬉しかった。

初めて私を『子供扱い』してくれた彼を好きになった。
ねえ、もしも、もしも私が王女でなかったら、

貴方は傍にいてくれた？

「……ユーリ」

呟きは誰にも聞こえる事がないまま消えた。

そつ。これはアイが召喚される、一ヶ月前の出来事。

6・6章・とりあえず過去話1（後書き）

分かりにくかった人への為に。

リデイは周りから『王族なんですから』とか『王家に相応しい』とか『早く成長なさってください』とか大人になる事を常日頃言われ続けています。そのために唯一子供扱いしてくれたユーリに恋心を抱きました。ユーリがある日呟いた『僕の夢はリデイ様が有力な貴族のもとに嫁ぐ所を見届ける事です』を聞いて芽生えた恋心に蓋をします。そして自己暗示で『私は王族、私は王族。王族の結婚は政略結婚』と納得しようとしています。いつかこの2人の中篇でも書きたいです

7章・とりあえず・・・見たくなかった(前書き)

少しなんです。が性的な表現があります。
苦手な方は戻ってくださいね。

7章・とりあえず・・・見たくなかった

そもそも好奇心というものを現さなければ良かったのだ。

微かに聞こえた声に興味を持ったあたしはその声に導かれるように
宮殿の一角に迷い込んだ。

そして壁の影から見てしまったのだ。目の前で繰り返されているそ
の行為を。

う、ぎゃあああ！！

何日も会えなかった恋人同士のように激しいキスを重ねていく男女
がそこにいた。

その2人はあたしの事に気づかずにいるみたい。

……ど、どうしよう（汗）逃げた方が良かったかな……？う、うわわわ
わ！！

彼らの行為は留まることを知らないように激しくなっていく。

映画で何度見てもなれなかったディーブなキスシーンがそこではあ
った。

日本人であり、学生であつたあたしにとってキスといえばソフトキスが基本だつた。
触れ合うだけのキス。そんな優しいものではない生々しいキスを見ているだけで顔が赤くなる。

……最悪だ。

目が合わさつた。その男性と。
その瞬間、神を呪つたといつても過言ではなかつた。

「おや。アイ様ではないですか」

「!.....どうも」

嫌な所で嫌な奴に嫌な状況で会ったなど、自分出来る精一杯の『嫌なんです』表情を作った。

それを見ても彼はニヤニヤ笑うだけ。

少しはあわててみるべきだと思う。こいつ。

お茶会が終わり、さて戻ろうとリディの部屋から出て出会ったのは一番相性が悪いといえるレガードだった。

普段なら、

はい、こんにちは。はい、さようなら

と言つべきだろうが今はできない。

逃がさないと、奴の目が言っている。

ああ、もう!! 嫌悪感たつぷりの顔で睨むしかできない。

それには理由があった。

レガードが今身に付けているものは黒のジーパン1つのみ。上着は一切つけていない。

余分な筋肉のついていない、肉体を惜しみなく晒している。

普段は無造作に垂らされている髪も、1つに束ねていた。

極めつけは汗と、多少赤くなった顔と体。

その彼の腕の中にいるのは色気漂う女性。娼婦だろう。布で出来たレースのドレスは体の3分の1を露出している。磨かれた宝石を身に纏い、化粧は少々濃い目だが彼女は誰よりも美しく輝いていた。見事に自分という素材を上手く引き立てている。百合に似た香水も彼女以上に似合う女性はいないかもしれない。彼女が振り替えればふわりと香りが漂った。優雅でとても良い匂い。その身なりと仕草で彼女が国にある『スノウドール』と言われる店の高級娼婦と理解した。

……なるほど。考えるまでもない。

性交の、後だ。

「クスツ。可愛いお嬢さんね。レガードの、新しい恋人？」

「まさか」

「でしょうね。レガードが相手にするにはまだ幼いわ。お嬢さん、お名前は？」

「あ、藍です」

「アイちゃん、ね。わたしはスノウドールで働かせているアシユリアといいます」

「どうぞ、宜しく。」

優雅にお辞儀をする様は何処かの貴族のようだった。否、下手な貴族より貴族らしい。

そういえばスノウドールの6割は没落した貴族だと聞いたことがある。それが本当なら納得できる。

「では、レガード。わたくし、次の予定があるからそろそろお暇させていただくわ」

「ええ。次に会うときはあなたに似合いのドレスでも用意しましょう」

「まあ。それは楽しみにしていますわ」

男性が女性に服を送るのは脱がせたいという意味がこめられていると聞く。

それを分かった上での会話かもしれない。

クスクス笑って彼女は立ち去った。

フワフワ漂うのは彼女の香り香。

「……………覗き、ですか？」

良いご趣味をお持ちで。

嫌味かこんちくしょう。

アシュリアさんが消えた途端、2つの瞳に映ったのは軽蔑だった。

確かに、すぐに立ち去らなかつたあたしにも非はあるが、こんな目立つ場所ではちやっついていられるレガードにも問題があるのではないか？
そもそも、なぜそんなに責められなくてはならないのか？

考え出せばイラついてきた。

「言っておきますけど、覗こうと思って覗いたわけではないんですからね。」

大体、こんな目立つ場所で逢引してるほうも悪いと思います」

「すぐに立ち去れば良かったでしょうに……」

「……とっさの事で動けなかったの！！あんなのを見たの、初めてだったんだから！！」

「へ〜そうですか……それはそれは……ん、もしかして」

欲情しましたか？

耳元で低く囁かれた声。

ビクリ……と体が反応した。

ゾクゾクする。

あ、と思ったときには遅かった。部屋に連れ込まれていた。光のない暗い部屋でレガードの金色の目が覗き込む。

「れ、がーど」

「こんなに簡単に男性の部屋に入るものではありませんよ」

「……あ、あんたがつれこんだんでしょー！」

「……そうでしたね」

顔が近づく。

微かに香るのはアルコールの匂い。

なるほど。酔っているの行動か。

だったら、酔っ払いを相手にしても無駄だ。

我が家の兄のように酔った相手に常識などは通じない。

信じがたく理解できないような行動をとったりする人だっているのだ。

例えば妹を口説いたり、男を口説いたり。

これもその1つだろう。そう思うことにした。

「レガード、あんた酔っているでしょう？」

「……酔っていませんよ」

酔っ払いはみんなそういうんだよ。

呆れたようにため息を吐く。

こんな顔のレガードは始めて見る。

いつも嫌味な笑顔で毒を吐く青年。

その青年に笑顔がない。

それだけでなにかがおかしかった。

「……なにかあったの？」

無意識のうちにその言葉に出していた。

踏み込んではいけない領域に踏み込んでしまったのかもしれない。レガードの瞳が曇った。

「……なにも、ありませんよ」

それだけを言葉にした。
途端に彼はスコンと意識を失った。

……どうなったかは言う必要はないかもしれない。
力勝負に負けたあたしは彼と一緒に床に沈んだ。
ひんやりとした心地よい冷たさを体に感じた。
下は冷たい。
上は暖かい。
耳元を感じるのは、すうすうという静かな寝息。

「……これ、どうしろと？」

どれだけ押しても動かなかった。

7章・とりあえず・・・見たくなかった（後書き）

久しぶりの更新です。

次回はレガードの過去を書く予定です。

かなり暗い話になりそうなので苦手な方は無視してください。

7・7章・とりあえず過去話2（前書き）

レガードの過去話になります。

結構なシリアスで拷問系も入るので苦手な方はご遠慮をお願いします。

『その目も、髪の色も、全てが気持ち悪い!!! ipp その事、お前など産まなければ良かった!!!』

幼い頃から母はそう言いつづけた。
それは、一種の呪いの言葉だった。

紺の髪。金色の瞳。

母の髪は紺よりも濃い茶の色だった。
瞳は緋色。

容姿も、彼女はどちらかといえば可愛い感じのする女性だった。
対して自分はすっきりとした顔立ちだった。
母に似たところなど、何もなかった。

『お前など、生まれてこなければ良かったのに!!!』

それは口ぐせだった。

なにかと母は自分に辛くあたった。

幼い頃の記憶といえば、ワインを浴びるように飲む姿。

耳を支配する呪いの言葉。

目を支配する憎しみに満ちた鬼のような形相。

そして、体を支配する痛みと熱さ。

これだけだった。

記憶の中で、母が優しくかった事など、なかった。

毎日のように繰り返される痛みは次第に思考を奪っていった。

産みたくなければなぜ産んだのか。

一度だけ、母に聞いたことがあった。

彼女はニヤツと笑った。

『あなたの父親から金をせびる為よ。それ以外、あなたの価値なんてどこにあるのよ』

自分の生まれた意味を知った。

どのくらいの時間が経ったのか、いつしか『魔法』という存在を知った。

他の子供とは違う。それがまた異端のようで嫌だった。

だが、次第にそれは安らぎとなっていくた。

望めば、精霊は姿を現してくれた。力を貸してくれた。常に傍にいて、支えてくれた。

苦しいだけの暮らしが少しだけ楽になった。

さらに2年の月日が経った。
それは唐突に現れた。

父である存在がわたしを養子に引き取りに来たのだ。
母は喜んで大金と引き換えにわたしを『売った』
本当に道具なのだと思った。

父は中流とはいえ貴族だった。

暮らしは前に比べると大分楽だった。だが、覚えることも多かった。

父には正式な妻がいた。

母とは不当な関係だったらしい。

憎い愛人。

その子供であるわたしにソニア様は辛く当たった。

2人の間には子供がいなかった。

ソニア様は子供が出来にくい体質だったらしい。

そうか、だからわたしは引き取られたのか。父の正当な血を引く跡
継ぎとして。

だがその結果にソニア様が不満なのは分かりきっていた。

ネイリス家の次期当主として、その名に恥じない行動をとるように
言われた。

魔法など、もつてのほかだった。

いつしか、精霊のことも忘れた。

5年の歳月が流れ、12歳の誕生日を迎えた。
父とソニア様の間に子が生まれた。
男の子だった。

わたしは本当の意味で必要なくなった。

その年から、地獄は始まった。

『汚らわしいっ……汚らわしいわ!!』

いくつも束ねた鞭で毎日背中を打たれた。
熱さと痛みが同時に襲い、逃げようにも首につながれた鎖のせいで
逃げることは叶わなかった。

あまりの苦痛に悲鳴を上げる。
少しでも逃げたいと床に爪を立て前へと進むがジャラジャラという音を鳴るだけで無駄に終わった。

血が流レレル。

爪が剥ガレル。

体ガ……コワレル

その行為が早く終わるように祈り続けた。
ソニア様の顔がいつそう歪む。

『お前など!!お前などに!!ネイリス家の名を渡すものかあああ
あ!!』

そんなものはいらないと、心の中で叫び続けた。
いつそ、すべてを吐き出してしまいたかった。自分の思い、なにもかも。

だがその言葉を口に出せばどんなおぞましい事になるか、これまでの生活で分かりきっていた。

クツと唇を咬み……耐えつづける。

自分に来れることはただ意味もなく謝り続けることのみ。

たとえ、どんな非道な扱いを受けたとしても……

『あああああああ!!!!』

家畜のように、背中に『刻印』を刻まれたこともあった。

鉄で熱されたそれを背中に捺され、ジュツと嫌な音と臭いが部屋中に充満する。

肉を焼かれる感覚。ありったけの声を出し、逃げようとするが叶わない。荒い息。体を庇うように丸めるその惨めな姿をソニア様は気に入った。

体はその日のうちに優秀な魔導師によって癒された。だが、治れば痛めつけられ、痛めつけられれば治され、その繰り返しの中で心は病んでいった。

父はソニア様の言いなりで、助けてなどくれなかった。

わたしは悟った。

所詮この世界は強者が勝つように出来ている。弱い者は惨めに生きるしかないのだと。

わたしは誓った。

いつか、自由を手に入れると。

さらに3年という月日が経ち、15歳になった。

わたしの存在を知った幼い殿下がわたしを地獄から解放した。守るために低いながら地位を与えた。

王国宮廷魔導師の見習いという地位を。

『お前に力があるのなら、這い上がって来い。力を示せ。』

目的を果たすなら、利用できるものは利用しろ。この、俺さえもな』

ええ。あなたの王子という地位を利用させていただきます。

本当の意味で、自由を獲得するために。

穢れているとはいえ、貴族の血筋もあり、出世は実力も伴って難しくはなかった。

その実力が真に認められ、新たな『セシル』の名を頂いたのは18の時。

わたしはレガード・ネイリスからレガード・セシルになった。

「……っっ!!」

小さなうめき声がもれた。

何度も繰り返す荒い呼吸。じわじわと流れる汗が気持ち悪い。
遙か昔に棄てた過去。その夢を、今更観るとは……

「……これのせいですかねえ」

もう何年も会うどころか連絡すらとらずにいた義母より送られた一通の手紙。

悪夢はこれが原因か……それにしても、

「なんなんですか……この状況は」

思い出そうとしても……正直記憶が飛んでいた。

酷く酔うほど酒に弱いわけではない。なら、どれほど飲んだのか。床に散らばったワインのビンを数えるのが恐ろしい。

(そういえば、アシユリアを呼んだ気もしますが……)

もはや記憶などない。

……言ってしまうばなせ床でアイ様を抱きしめているのだろうか？
服を着て寝ているのだから間違えは起こしていないだろが……ふむ。

(………とりあえず)

彼女を起こして事情を聞くべきか。

ワタワタと慌てる彼女の姿が安易に予想でき、レガードの瞳が笑った。

7・7章・とりあえず過去話2（後書き）

レガードは女性好きな感じがありますが実は女性に対して嫌悪感を抱いています。女性は利用するもの。利用してし終われば価値のないものという考えの持ち主なので歪んでいます。

ですが面倒ごとを避けるために手を出す相手は考えています。王宮内で手を出されて・・・というか口説かれていないのはリディとアイぐらいでしょうか？

メイドはもち口説きまくりです。ある意味王宮内のことを知り尽くすのはメイド達でしょうから半数以上は攻略済み（笑）

8章・とりあえず憂と晴らし

最悪最悪最悪だ！！

叫びたい気持ちを押し込んでズンズンと自分の部屋への道なりを進んでいく。

結局、朝まで一緒に寝てしまった。

しかも目覚めてみればベッドの中でレガードは半裸。

(誤解ないように言っておくけどあたしは服着ていたから！！)

非常にいい笑顔を奴は見せた。こう、ニヤリと。

そして一言。

夜這いしたのですか？と。

イヤイヤイヤ！！！！

あんたがベッドに、連れ込んだんでしょー！！？

そういえばこう言った。

・・・覚えてませんねえ。と。

こんの、よっばらい野郎!!

部屋は遠かった。

だから手短な部屋に入り、誰もいないことを確認して。

「……………最悪だ——!!!!」

叫んだ。

「なんだか今日は機嫌が悪いようですね」

「ソウデスカ？」

「なにかありましたか？」

「……ナニモアリマセン」

昨日の夕方、レガードに押し倒されて今日の朝まで一緒に寝ていました。

なんていえるわけがない。

「……なるほど」

「つて！！人の心読まないでよ！！」

「アハハハハ。無理です」

しれっと、シリウスは言う。

もう彼は化け物じみていると思う。心が読めるとかほんとありえない。

それともなにか？この世界の住人になる為には心が読めるといって特殊技能が必要だともいうのか？あゝあん！（ガラ悪ッ）

そう言ってやればシリウスは困ったみたいにため息をついた。

「アイ様が素直すぎるんですよ。大体、僕は心読めません」

「……前も読んでなかった？」

「読んでいませんよ……って、疑わしそうな目をしていますね」

「うん」

信用できない。

そう思っていたら頬をつによーんと引つ張られた。

力を加減してくれているみたいだから痛みはあまり無いけど。

「ちりうしゆ……ふあなあしえてえ」

「あなたは僕をなんだと思っっているのですか？僕は心を読むという技能なんてないですよ。あえていうなら他人の表情を読み取るのに長けているだけです。あなたは特に顔に出やすいですから誰にでも読めますよ」

呆れた顔……けれど口元が緩んでいるから怒っているわけではなさそう。

最後にペチリと叩かれて頬を伸ばしていた手がなくなった。ピリピリするよ。

「……そうなの？」

あたしの疑問にシリウスはニコリと……否、ニヤリと笑った。

「はい。ですから心は読んでいません。とはいえ昨日なにがあったかは大体想像付きますがね」

「……この話題、やめよっか」

シリウスって怖すぎる。

絶対にながあつたか分かっている顔だつてあはれは！！

「アイ様がそう言うのなら止めましょう」

「そうしてください。それよりもさ、シリウスってこの国の人なの？」

「……そう見えませんか？」

「ん……シリウスの言葉ってこの国の言葉となんか違う感じがするから出身国が違うのかなって」

訛りっていつのかな？ちよつと違和感を感じる。
そういえばシリウスはあぁと口にした。

「良く分かりましたね。ですが僕はこの国……正確には昔滅んだサ
ーチンと言う村出身です。まあ、幼少の頃は少しの間、他国で過
していましたけど」

「あ、やっぱそうなんだ。どこで育つたの？」

「アークザルです。4歳までは父の元で過ごしていましたからどう
しても少し訛ってしまうんですよ」

「え？でも、アークザル国の民はほとんどが肌の色濃いか髪の色
は黒とか茶とか聞いたけどシリウスの髪の色は青銀だよね。母親似
？」

「はい。顔立ちも色素も母に似ました。しいて言えば剣術ぐらいで

すかね父に似たのは。運が良かったです」

運良くつて……確かに色黒のシリウスは想像付かないけどさ。
……うん、嫌だ。なんか嫌。

「母親に似て良かったね」

「ええ。父に似るなど……考えたただけでおぞましい……」

「そこまで自分の父親の事嫌いなのか？」

「ええ。嫌いですね」

「……理由、聞いてもいい？」

「……」

空気が、変わった。

踏み込んだじゃいけない領域に踏み込んでしまったらしい。
不味い……またやっちゃった。

「あ、もちろん言いたくないなら言わなくてもいいから……あたしの好奇心だしね……」

うっうっうっ……難しい顔してるよ……どうしよう。

それから少しの時間が経って、シリウスはふと、剣を持ち上げた。

「では、アイ様が僕から一本でも取れたら教えるということだ」

「……………は？」

一本って……剣でシリウスから一本取るって？

……………はあ！？

「無理無理無理無理！！！」

普通に無理ですって！！

「大丈夫ですよ。手加減しますから」

言葉の節々が楽しそう。

っーか、なんちゅうイイ笑顔しますか！！

否、微妙に無表情だけどさあ！その微妙な変化が分かるのも嫌！！
そんなスキルいらなかったあ！！！！

「では僕から参りましょうか」

「無理つつってんじゃん！！」

「アイ様、やらない前から諦めてどうしますか」

「普通に考えて剣術始めたばかりの女が国のトップクラスの騎士から一本取れると本気で思っている！？」

「ではハンデとして片手で戦いましょう。オマケに利き腕とは別の腕を」

「それでも無理です!!」

普通に無理です。

「……でしたら僕が素手、というのはどうでしょう?」

「素手でどうやって戦うの」

「戦うのではありません。いわゆる鬼ごっこです」

鬼ごっこ……って。

吃驚するあたしの前にシリウスは500円サイズの玉を取り出した。紫色の石で天辺に穴が開いている。そこを紐で結びシリウスは自分の腰に括り付けた。

「制限時間一時間以内にこの玉を取ればアイ様の勝ち。守りきれれば僕の勝ち。どんな手を使ってもかまいません。もし、アイ様が勝てれば僕に出来ることは何でもしますし何でも話しますよ」

なんでもしてくれる?

あんな事やこんな事を?

う……ちょっと魅惑的な条件……すばらしい誘惑だ。心が揺れる。踊らされる。

「ちなみにあたしが負けたら?」

「そうですねえ……では、昨日の出来事を在る事無い事話していただきましょう」

「拒否します」

「これも修行の一環ですから」

拒否権無しときたか。

正直なところ、逃げちゃおうかと思った。

逃げようと思えば逃げられるかもしれない。けれど怖い。

身に纏う雰囲気がピリピリしていて怖い。

……こいつ、本気だ（汗）

悟ってしまった。

仕方がなく、諦めた様子であたしは剣を持つ。

シリウスは『どんな手を使ってもかまわない』と言った。

と言うことはなにも手で取らなくても剣で切り落としても良いと勝手に解釈させてもらう。

そうでもしないと取れないって。体力もスピードも違うんだから。

って、いうのは建前で本音はイライラ発散だ。

国のトップの騎士なんだから素人の剣ぐらい簡単に避けられるだろうに。

あたしの意思を汲み取ったシリウスはいつもの通り、無表情のままニヤリと笑う（気がした）

「では、どこからでも」

その始まりの合図と同時に飛び掛ったが所詮は齧った程度の剣術。

結果など……言わずとも分かるだろう。

「……参りました」

一時間という時間で行われた鬼ごっこはシリウスの圧勝という結果に終わった。

いや、ね、だって、ね……勝てるわけ無いって!!

早いんだよ!? 残像が見えて2人とかに見えるんだよ!?

ありえない速さだって!! かすりもしないし!!

「では、有る事無い事話しちゃってください」

……その後、シリウスの巧みな話術によって明るみとなった昨夜の出来事は面白いと感じたシリウスによってセリオスの元へと報告されたという。

8章・とりあえず憂さ晴らし（後書き）

一ヶ月ぶりの本編更新です。

最近、セリオス無視してサブキャラとの縁を深めているような気がする。特にレガード、出る回数が多い（汗）書きやすいからなあ・・・

うん。そろそろセリオスといちゃいちゃさせたい。

8・8章・とりあえず過去話3（前書き）

シリウスの過去話になります。シリウスはレガードとまた違った意味でのシリウスになるので読み比べて欲しいです。

8・8章・とりあえず過去話3

母は美しい人だった。

流れる水のような青銀の髪は豊かに波打ち、
極上の紫水晶のようなその瞳はどこまでも輝いていた。

衣類に包まれても丸分かりな見事なスタイル。
幼さを残しつつも妖艶な顔立ち。

母は、美しすぎるほど、美しかった。
美の化身。

サーチンの宝。
どんな美姫も彼女の前では霞んでしまう。

その美貌は他国にも響きわたり連日求愛の手紙が天にも昇るほどだった。

そしてついにあの男、僕の父。

ダラムに目をつけられた。

ダラムはアークザル王国の貴族だった。

デルム伯爵家の二番目の息子。

甘やかされて育った典型的な貴族。

彼はサーチンへ来た際に偶然見かけたシャインに目をつけた。
シャインはサーチンにある小さな花屋の娘だった。

幼い頃から可愛く、年頃になればその愛らしさを残したまま成長した。

なのに体は人より立派に育った。

白桃のように形が良く、弾力があるにもかかわらず柔らかい胸。

スツとした体のライン。抱き締めれば折れて仕舞いそうな腰。

なによりいたぶり易そうな大き目のお尻。

匂いを嗅げば様々な花の香りがある。体に染み付いているのだろうか。

国に帰れば妖艶な女など腐るほどいる。

わざわざ危険を冒してまで手に入れるほどではない。

なのに、欲しかった。

あの女が。

嫌がる体をねじ伏せて、無理やり服を脱がせて、陵辱してしまいたい。

自らの熱を、彼女の中に埋め込みたい。

ああ、彼女はいったいどんな声で泣いてくれるだろう。

ああ、彼女はいったいどんな顔を見せてくれるのだろう。

想像だけで彼の熱は高まった。

奪って

捻じ込んで

犯して

孕ませて

気がつけばダラムは少女を連れて帰っていた。
奪い去った。
彼女の、なにもかも。

シャインはもちろん泣いて抵抗した。
だがすでに成人したダラムに17歳の少女の力などないも当然だった。

力ずくの行為は、彼女の生きる気力を全て奪った。
死にたいと、死に急ぐシャインにダラムはこう囁いた。

『お前が死ねば、お前の家族の命はないな』

ダラムはすでに彼女の両親を抑えていた。
人質。

その言葉だけがシャインの頭の中にあつた。
シャインは泣く泣くダラムの愛妾になった。

朝も

昼も

夜も

ダラムは彼女の体を買った。

自由など、あたえなかつた。

暗い部屋に閉じ込め、ただひたすら彼女を犯し続けた。

やがて5年の歳月を得て2人の間には子供が出来た。

生まれた子供はシャインの面影を持っていた。

可愛らしい顔立ち。

青銀の髪。

紫の瞳。

ダラムに似た所などなかつた。

シャインはギリギリの所で精神を保った。

どれほどの時間がたったのか。

忙しさのあまりか、ダラムはシャインの所に来ることがなくなった。

この時シリウスは3つだった。

やがて風の噂でダラムが新しい愛妾を迎えたことを知った。

まだ12歳だというその少女はすでに立派な『大人』であった。

シャインは、壊れかけた。

なぜなぜなぜ！？

私をこんな目に遭わせたのに！！

私の人生を奪ったのに！！

なぜあの男だけが幸せになれる！？

たとえ愛などなくても、

私にはあの人だけだったのに！！！！！！

いつそ、死ねたらと思った。

けれどシャインにはシリウスがいた。

ただただ1人の、愛する息子が。

それから数ヶ月の間にシャインは開放された。

愛妾に、子供ができたのだ。

男の子だった。

厄介払いされたシャインは4つになるシリウスを連れて、生まれ故郷のサーチンに帰った。

ここからやり直そう・・・大丈夫。私は1人じゃないわ。

家族が居る。母も父もシリウスだって。

だけど緑溢れる活気づいた村『サーチン』は瓦礫の山となっていた。壊れた人形のようにシャインはふらふらと自分の両親の元へと向かう。

なにもなかった。

赤黒い液体が付着した瓦礫以外は。

あのいつも漂う花の香りも

優しい微笑を見せる母親の姿も父の姿も

元気溢れる隣のおばさんも

なに1つ。

残ってはいなかった

『いやあああああ！！！！！！！』

シャインは壊れた。

文字通り、壊れた。

・・・自らの、命を絶って・・・

可愛そうに・・・あの子、あのダラム伯爵の息子なんですって
ダラム伯爵の？ダラム伯爵の子供ってまだ一才ぐらいじゃ・・・
3番目の愛妾よ。飽きたから捨てられたのよ

・・・可愛そうね・・・身内は？

それがずっと前に殺されたんですって。誘拐された娘を返せって騒

いだから不敬罪で

それってサーチン村の？

そう。貴族に逆らった罪で村が1つ潰されたじゃない。あの子の母親、知らなかったみたいで精神病んじやって自殺したって……

まあ！……なら、母親はいないのね。

……なに考えているの？

……ふふふ……あの子、今はまだ子供だけど後数年もすれば私達の相手として……

まあ……楽しそう。

ねえ、あなた。私と一緒に、来る？

シリウスに声をかけて来たのは1人の女性だった。

彼女は傭兵で夫を戦争で亡くし天涯孤独の身となっていた。

シリウスはその日から彼女と共に世界を回り始めた。

時に雪の降る都に足を運び、

時に知識の溢れる都市に足を運び、

時に戦場でその身を任せ、

彼の体は貪欲に求めた。

力を。

地位を。

だがシリウスの様な生まれの者が地位を手に入れるチャンスなどないに等しかった。

けれど、神はシリウスの味方をした。

彼が15歳のときにエルティン王国で武道大会が開催されたのだ。

優勝、否、せめて優秀な成績さえ残せば騎士になれる。

この国で地位を得られる。

目的が、果たせる。

あの男に、復讐を！！

彼は、圧倒的な強さを持って優勝した。

特典として与えられた地位はこの国でもっとも名誉ある『銀の騎士』

長年彼と共に生きてきた女性は叙勲式で見せた彼の表情にゾクリと寒気を覚えた。

シリウスは過去の出来事から笑わなくなった。

まるで仮面を被ったかのように表情を消し、生きてきた。

その彼が、まるで全てをあざ笑うかのように笑った。

冷たい、氷のような瞳を歪ませて、

美しい微笑を見せて。

それから1年後の事だった。

シリウスが、戦場で1人の男性の首を持ち帰ったのは。

なにもかも、捨てたはずだった。
仮面を被り、生きてきた。

なにももらない。誰も信じない。
そう、思っていた。

なのに、

「むりっす　　！！！！不可能～～！！」

「あはははは。ほら、玉はこころですわ」

「ムツキ

！！」

彼女の傍は酷く心地よかった

8・8章・とりあえず過去話3（後書き）

レガードの笑い 人を馬鹿にしたような笑いで不快感を与える。わざとらしい。

シリウスの笑い 無表情。口だけ動く。まるで仮面を被っているかのよう。

セリオスの笑い ニヤリ。

どの笑いもなんか嫌

すみません！！久しぶりに書いたので前回の8章と誤りがありました。

書き直しておきました。本当にすみません（汗）

9章・とりあえず赤き満月

「では、こちらでお待ちください」

「……マジで勘弁してください」

あたしの一生に一度の願いはリサの手によって潰されてしまった。

そして物語の始まりは数時間前に遡る……

手を動かせばパチャリという水の音と花の良い香りがあたり一面に香った。

あゝメチャクチャ気持ち良い。それに良い香り!!

琥珀色のお湯に白い湯気。

そして張られた湯と一緒に動く赤いサラの花弁（薔薇に似ている）

ハーブ効果のあるサラの花弁一杯の温泉に入れば一日の疲れも取れるってもんよ。勿体無いけど。

フフンと思わず鼻歌を歌いながらあたしはゆっくり肩までつかってぼんやりと外を見上げた。

天上がガラス張りになっているために外の様子が良く分かる（ちなみに外からお風呂は覗けなくなっている。マジックミラーみたい）

赤い満月に満天の星空。

ああ〜ロマンチック……これでお酒でもあつたら最高だわ。

未成年ということをおぼろげに忘れることにしたあたしは元の世界ならきつと
していたであろう事を思い浮かべて苦笑した。

とは言つても実際にはしないんだけどね……精々ジューズ程度で。

でも、これだけ豪華なお風呂がこの国にあつたなんてね。

脳裏に浮かぶのはリサの言葉。

なにか特別な事がある時に限つてこの夜空の門は開かれるらしい。

普段はこのお風呂の半分ほどしかないお風呂に入るのだが（それでも
非常に大きいけどね）今日はなぜがこの巨大風呂、夜空の門と呼
ばれるここに通された。

普段使わないとあつてかなりの広さだ（始めてみたときは度肝抜か
した）

しかも誰もいないからゆつくりし放題。

「ふ……はあ〜……気持ちいい〜極楽極楽」

思わずそんな言葉を呟いた。

うう〜本当に極楽

出来ればずっと入っていたい。

お肌艶々。

体中ポツカポカ。

けれどそろそろ出ないと倒れてしまう。

湯辺りでも起こしたのかクラクラしてきた。

体中が熱くなつてきて、さ〜て、出ようかとすればそこで待機して

いたのはリサとその他2人のメイド。
手に持っているのはいつもとは違う寝巻き。

ピンク色で結構透けている。

なんなの、この服。

上は肌が見えそうぐらいには露出しているし、下の部分はやけにヒラヒラしてて……兎に角恥ずかしい。

まるで男を誘惑するためだけに生まれてきたような寝巻きだ。

他のメイドが持っている装飾品も通常のものより派手な物ばかりだ。

……なんかあるの？

「失礼いたします、アイ様」

「ちょー！！自分で出来るって！！」

強引だった。

あれよこれよという間に寝巻きを着せられ、装飾品をつけられていく。

あゝもう！！恥ずかしい！！この着替えの仕方はいつまで経っても慣れないわ。

「で、なんなの、これ？」

綺麗に飾られた姿を見てため息を1つ。
なんだというのだ、一体。

「では、ご案内いたしますね」

「どこへ？」

「こちらになります」

なんだというのだ、一体！！

答える気はありません。

そんな感じに前にリサ。

後ろにメイド2人がかりでガツチリガードされて長い廊下を移動し始める。

たどり着いたところはどこ部屋のドアより装飾が豪華に施された部屋だった。

……嫌な予感。

「リサ、リサ！！この部屋ってさ……」

「では、こちらでお待ちください」

「……マジで勘弁してください」

あたしの予感が当たっていればこの部屋はセリオスの私室のはずだ。

あのドアに描かれたセリナギは国の象徴として使われる紋様。

そしてそのセリナギの紋様を身に付けられるのは王家の者のみ。

現在王家の血を引くものは多くは無い。

直系ではセリオスとリデイのみ。

この王宮にいる王族もセリオスとリデイのみだ。

リデイの私室はここではない。

となればおのずと答えは導かされる。

……ここは間違いなくセリオスの部屋だ。

「アイ様ファイター、です」

「いやいやいや！！待って、ちょっと待って！！」

なんのつもりですかああ！！！！

トンと背中を押されて部屋に閉じ込められた。

抵抗する暇も無い。

逃げられない。

それを理解したのはガチャリという音が鳴り無情にもドアに鍵が掛
けられた時だった。

クソッ！！！！押しても引いても開かねえ！！！！

出して ！！と悲鳴を上げて力任せにぶん殴る。

その一瞬、風が吹いた。

漂う匂いは……セリオスの香水。

そして アルコールの香り。

「……………アイ」

背後から聞こえたのは我が婚約者殿の声。

その声の主はこの状況を説明して貰おうと振りかえった。

「セリ……!!」

名前など、呼びきれなかった。

唇に重なる温度。

耳元で囁かれる声。

なにが起こったのか……とりあえず抱きしめられたことだけは理解した。

9章・とりあえず赤き満月（後書き）

セリオス様ご乱心 !!! 藍ちゃん逃げて !!!!!!

・・・みたいな話を書きたかったので書いてみました。

最近藍がサブメインのキャラとばかり絡んでいる気がする。

それって絶対ギャグの方が書きやすいからだ・・・特にレガード。

10章・とりあえず赤き満月2

時は数時間前に遡る。

シリウスの報告を聞いたセリオスは一瞬シリウスがなにを言っているのか理解できずにいた。

書きかけの書類にポトポトと黒いインクが雫となって落ちていく。

もちろんその件についてすでに報告は来ていた。

来てはいたのだが冗談だと思って放置しておいたのだ。

だってまさかあのレガードがアイを部屋に連れ込むなどということ
は冗談としか思えなかったのだから。

……もちろん冗談としては夕チが悪いが。

王宮内でレガードといえば『女好き』と有名な話だが実際は違う。

レガードはセリオス以上に女性というものが嫌いだ。

否、憎んでいるといっても過言ではない。

それは彼の生い立ちに関係がある。

悲惨な幼時を過ごしたレガードは愛されなかったために愛するとい
うものを知らずにいる。

もちろんセリオスも女性というものに嫌悪感を抱いてはいるがレガ

ードほどは酷くは無い。
女性という生き物を性欲だけ満たす道具として扱ってきたレガード。
そのレガードがアイ相手に本気になるといつか……答えは否だ。

寧ろアイが異世界から召喚された『女神』でなければたとえ、俺の
命令でも近づぐことすらしなかつたであろう。
あれは面食いだからな。

そんなレガードがアイを自室に連れ込んだ。
しかも朝まで2人きりで。

ただの気まぐれか？

それともなにか他に理由があるのか？

クソツ！！イライラする！！

「……お兄様。その手に握られているのは重要な書類ではありません
んでした？」

リデイの呆れたような声がセリオスを現実の世界へと呼び戻した。
ハツとし自らの手元を見て啞然となる。

「……そうだったな」

ギリリと握りしめていたのは今年の花祭りについての書類。
期限は明日まで……迂闊だ。

こんなミス今までの事がないというのに……クソツ！

落ち着かせるように入れ替えた紅茶を口に含む。

リデイの方も自分の護衛である騎士に紅茶の準備をさせていた。
琥珀色の液体が白い陶器の器に注がれていく。

その最中にリディはセリオスの顔に注目した。

クマが薄っすらと出来ている。

「お兄様最近お疲れのご様子ですわ。夜寝ていますの？」

「ああ」

「夜中いつまでもアイと一緒にいちゃいちゃらぶらぶしていちゃダメですわよ。そもそも避妊はきちんとしていますの？まあ、お兄様の事だからその辺のことは抜かりないと思いますけど……万が一、結婚より先に妊娠したなんて事になったらアイが傷つく事になりますから気をつけてくださいませね」

ブフツ！！

ゴワン！！

あまりの発言にセリオスは紅茶を吐き出し、リディの護衛騎士であるユーリ・ハウランドは転んで頭を打った。

注がれるはずだった紅茶が床に染み込みセリオスの顔が歪む。

「す、すみません！！」

真っ青になったユーリは直ぐに後片付けを始めた。

いつもであれば嚴重な注意と処罰が与えられるほどの大失態だがセリオスはそれ以上にリディの発言のことで頭が一杯だった。だからあえて見なかった事にした。ユーリだけが悪いわけではない。

怒りで赤くなつた顔でセリオスはリディを睨み付けた。

「お前はなにを言っているんだ！……！」

「あら。別に変なことは言っていないませんわ、お兄様……まさか、まだアイに手を出していないとか……」

「お前には関係が無い……！」

セリオスのその言葉が決定的だった。

「……まあ……！信じられませんか。あの『セリオス』お兄様が女性に手を出さないなんて……もしかして不能になりましたの……！」

「不能などになどなっておらん……！というか、自分が何を言っているか理解しているのか……？」

「別に変なことは言っていないませんわ」

ツーンと、彼女はそっぽを向いた。

その行動が憎らしく、セリオスは力の限り机を叩きつけたが彼女は気にも留めずにいた。

それがさらに怒りを誘う。

「お前まだ……だろう……！それに女がそのようなふしだらな事を口にするんじゃない……！」

「自分の身は自分で守るものなのよ、お兄様。正しい避妊法やセックスについて知っておくべきだとわたくしは思いますわ」

こつも堂々と言われては身も蓋も無い。

確かに王族の者や貴族の者は性に関してある一定の年齢に達すればそれ専用の教師からそれとなく性教育の勉強を受けることにはなっている。

セリオス自身がその教育を受けたのは10の頃。
リデイが既に受けていても不思議ではない。

しかしだ、

(こいつの教育をしたのは誰だ!!)

まだ早すぎると思ってしまつのはリデイが女だからなのか、それとも妹だからなのか。

頭を抱えるセリオスにリデイは真面目な顔をした。

「なぜ、アイを抱きませんか？」

些細な疑問だった。

その言葉にセリオスは思い出しながら答えた。

「愛情無しで俺に抱かれるのは嫌だと言われた。
子供も、愛していない男の子供は産みたくないそうだ。」

「アイらしいですね」

とても彼女らしい答えだ。

（でもこの調子ではアイとお兄様の間に子供が出来るのは何年先になるのか分かりませんわね）

その反応のしかたに自ら入れた紅茶を口に含んだリディは1つの思惑に包まれていた。

それはどうやって2人の間を進展させるのか、だった。

リディはアイを欲しがっている。

姉として、親友として、リディをただの少女として扱ってくれるアイの事をリディは心の底から欲している。

義姉妹になる……その最も近い道筋は結婚して子供を産み王妃になるか側室になることだ。

だからセリオスがアイを抱いてくれれば良いと思っていた……否、寧ろ抱いているものだと思っていた。

愛情とは育てるもの。政略結婚でも幸せな結婚生活を送る貴族は沢山いる。

だから今は無理でも時が過ぎればこの国に愛着がわき、セリオスを愛し、この世界に残ってくれろと信じていた。

それなのに、子供を作るところか手すら出していないとは……

（これは……計算外ですわね。まさか本当にお兄様がアイに手を出していなかったなんて……）

覚悟を決めるかのようにリディは握りこぶしを作った。

思い出すのは数時間前。

アイを抜かせば最も妃の座に近いとされるセリオスの婚約者、マリ

ン・モンド嬢の一言だった。

『あの娘を傍に置くのはただの珍しさゆえですわ。だって、おかしいじゃありませんか。もしも、もしもセリオス様がほんの少しでもあの娘を好いておられるのなら、とつくに召されても良いはずですよ……知っております？あの娘、いまだにセリオス様からキスすらされていないのですよ』

その言葉にリディはまさかと思った。

セリオスはレガード程ではないが女性に関してはかなりだらしが無いところがある。

レガードみたいにボロボロに利用して棄てる……などということまではないが、それに近い事を平気でやったりもする。つまり娼館通いや摘み喰い……だ。

だから既にアイには手を出しているトリディはそう考えていた。なのに、現実には逆だった。いつそ見事なほどに。

信じられない……本当に一度不能になったのかと心配したほどに信じられなかった。

男性と付き合ったことも、好きな人もいないというアイ。欲望のみで女性と付き合っていたセリオス。

2人の間を『愛情』というもので進展させるのは並大抵の事では無理そうだ。

(……………粗治療ってどうかしら)

ナイスアイデアというようにリディはニッコリと微笑んだ。

「お兄様」

「なんだ？」

「今夜少し時間を下さいますか」

リディが微笑むとろくなことが無い。

それが身に染みて理解しているセリオスは深く思いたため息を吐いた。

10章・とりあえず赤き満月2（後書き）

進展しない2人の関係についてリデイ嬢が動き出します。

リデイさん目的のためなら手段を選ばない子です。だからある意味レガードと同類ですね。

ちなみにレガードと藍の事を密告したのは正妃候補の1人、もしくは側室候補の人たちだと思ってください。

11章・とりあえず赤き満月3

セリオスが自室に戻れば机の上に赤い『物体』が置かれていた。それを持ち上げれば重みが栞の役割をはたしていたのだろう。下敷きになっていたメモ紙がふわりとなびき床に落ちる。

拾い上げて確認すればそれはリディの字であった。

お兄様へ

少々厄介な用事が出来ましたので少し遅れますわ。わたくしが行くまで寝ないでくださいませね。

そうそうそれからこのワインは先日南の国の商人から買いましたのよ。シナウドベースのワインなのですがわたしには少々キツイよ。うなので宜しければお兄様が召し上がってくださいませ。

ワインのラベルには確かに南の特産品であるシナウドのイラストが書かれていた。

シナウドとは小振りの葡萄に良く似た果物の事で南の国ではよく砂

糖や八チミツ漬けにして食されることが多い。
甘くジューシーな果物だがワインになると話は別になる。

シナウドは発酵しやすい果物だ。

ゆえにワイン類などに加工するとアルコールの度数が著しく上昇する。

最低度数を1に、最高度数を10とすればシナウドのワインは7か8辺りになる。

一般的には薄めて飲む品物だ。それを飲めないというのであればおそらく原液のまま飲んだのだらう。

初心者が良くやる手口だ（だがセリオスは原液のまま飲む）

それからシナウドにはもう1つ、他のワインには無い特徴がある。

ワインとは通常年月を掛け熟成させるものだ。

そうすれば味も香りも高まり、価値も貴重になってくる。

しかしシナウドのワインは違う。

シナウドのワインは別名 10年ワインと呼ばれている。

つまりシナウドのワインは10年目に熟成して最高の味と香りを作り出すのだ。

その後はただ酸化していくだけ。飲む品物でな無くなる。

ゆえに10年目を迎えたワインは希少価値が高いとされ高値で取引される。

この城にもあるにはあるのだがせいぜい7年物あたりだ

セリウスはラベルの隣にかかれた文字を見つけた。

そこには丁度10年前の日付が書かれていた。

良い物を手に入れたな。

ピンを空けグラスに注ぐ。

血よりも赤い液体が月の光を浴びて妖しく輝きを放つ。
香りは極上の、スパイスとしてワインを際立たせた。

久しぶりに飲んだがやはり美味しい。

これからリデイに会うということも忘れていたのかもしれない。
気がつけば瓶の中身は半分以上減っていた。

顔にも赤みがささり、体中が熱く燃えるような感覚に陥った。

飲みすぎたか……

椅子にもたれテーブルに頭をついた。

連日の疲れが気づかないうちに溜まっていたのだろう。
深い闇に陥るようにセリオスの意識は遠のいていった。

だがそれほど時間が掛からずに目覚めることになった。

(……んツ……リデイが来たのか?)

それにしてもやかましいと、ズキズキと痛む頭痛を抑えながらその
身を起こせば見知らぬ人物がそこにいた。

薄い生地で作られたドレスを身に纏い、その体を飾るのは様々な豪
華な装飾品。

その中でも特に目立つのは赤色の宝石が埋め込まれた髪飾りであっ
た。それはその女性の黒髪をいつそう美しく際立たせている。

(…………誰だ?)

酔っていたため、一瞬の反応に遅れをとった。

この国で黒髪を持つ女性は少ない。だとすれば刺客か？

護身用の剣に手を伸ばした瞬間、月の光でその女性の姿が完全に浮かび上がった。

それは美しく、貴婦人とよぶのに相応しく磨かれたアイ。

閉じ込められたのか、ドアを一心に叩きつけながら声を上げるその姿は可愛らしい。

ああそうか…………リディの奴め…………

昼間に見たリディの微笑を思い出し、セリオスは苦笑した。

おそらくリディは今夜現れる月の力を利用したのだろう。

今宵は赤い月の満ちる日。

エルティンにとっては吉日といわれ、精霊の魔力が最も高まる月が出る日。

この日に生まれる子は例外なく神の祝福を受け、幸せになれるという。

そしてそれ以上に有名なのは…………赤き月は人を惑わせるという言い伝え。

(…………アイ)

正直なところ、セリオスにはまだ『愛』という感情など分からなかった。

だがアイは言った。

自分を惚れさせてみると。

自分は他の女とは違う。セリオスの身分も権力も欲しくは無い。願いは1つ。

ただ元の世界に帰りたいという思いのみ。

それでもなお、私の力が、子が欲しいなら、

自分を惚れさせてみると。

王妃という地位が面倒だと言った。

なにもいらないと、言った。

だからセリオスは少しばかりアイに興味を持った。他の候補者とは違う思いを持つアイに。

女など、自分の権力が欲しいだけ。

その口から出る言葉は全て偽り。全てが幻。

適当に付き合って、適当に相手をすれば全てが上手くいくはずだった。

皆が欲しがる王妃という椅子。

それをちらつかせれば、誰もが自分に足を開き、体を捧げるはずだった。

その概念を根っこから覆したのは……異世界から召喚された少女。

初めてセリオスという『個人』として見た女。

(……………認めよう)

レガードと噂になったとき、嫉妬したと。

誰にも渡したくないと、願ったと。

この感情をなんと呼ぶのかはまだ分からない。

だが、誰にも渡したくない。

(……アイ)

酒の力もあり、酔った思考では上手く考えが纏まらない。
だが、ただ1つ思い浮かぶのは、

……抱きしめたいという感情。

「……………アイ」

触れたくて、触りたくて、

「セリ……………!!」

心の中で暴れていた想いが一気に押し寄せる。

唇を重ね、抱きしめたとき

鐘が鳴り響く。

11章・とりあえず赤き満月3（後書き）

リデイ嬢やりました！！もちろんリサ&メイド達は共犯者です。喜んで手を貸します。むしろやっちなまえ　　！！な勢いで【笑】
やっと第一部の終わりに近づいてきました。次回の予想が付いている方も多いと思いますが・・・まあ、見ぬ振りをお願いしますね。
では、失礼します！！

12章・とりあえず敵襲（前書き）

軽いですが流血表現があります。苦手な方は注意してください。

12章・とりあえず敵襲

突如響いた鐘の音。

この音に聞き覚えは無い。

だが万が一にと教えられていた事を思い出したあたしはセリオスに抱かれたまま呆然となった。

あたしの考えが当たっていれば……これは侵入者を知らせるための鐘の音だ。

侵入者が狙うのは王族か貴族。もしくは国の重役と相場は決まっている。

ならここは危険。しかも闇に包まれて動きやすい。狙うには絶好のチャンスだ。

自分の想像にヒヤリと、寒気がした。

セリオスもその考えに至ったのだろう。

速やかに部屋の外で待機しているはずの護衛に声をかけた。

だが本来いるはずの護衛からの返事はなく、代わりにガシャンというガラスが割れる音が部屋の外から聞こえた。

同時に悲鳴が城全体を包み込む。

「敵襲だ　　！！」

て、敵襲つてなにさ !!!

わたわたとしているうちにこの部屋の窓ガラスも割られ、数人の黒装束姿の男達（だと思っ）が暗闇の中姿を現した。

凄い殺気が部屋の中を包み込み、男達は剣を抜く。

とくとくと心臓が音を立てて胸を打ち、鳥肌がゾワゾワと立った。

ピンと糸を張ったような空気が辺りを包み込み……動いた。

「!!! ツ!!!」

キンツと近くで金属特有の音がした。

同時にあたしはセリオスの手によって左方面に投げられる。

どこに当たったのか、ドンと痛みを感じ一瞬息が出来なくなる。ただそれを超えて前を向けばセリオスの足元に倒れた人が2名。

微かな明かりの中、良く見れば数が分かった。侵入者は5名だった。残りは……3名。

そのうちの1人がまたセリオスを襲う。

ウンと、風を切る音がしてセリオスの体を捕らえた。

「危ない!!!」

あたしの悲鳴だけがその部屋の中響きわたる。

ギリギリで避けたのだろう。セリオスは無事だった。

逆に、侵入者の体をセリオスは捕らえた。

クツという悲鳴がして床へと沈む。

残り、2名。

けれどその2人が明らかにやられた3名とは実力が違うというのは目に見えて分かる。

体格もさることながら……殺気が凄い。

セリオスの持つ空気もツンと糸を張ったように強くなる。

「……誰の命令で俺を狙う」

「……………」

「アークザルの手の者か……？それとも、」

「……………」

「答えないか」

「全テハ、我ラ、王ノ為ニ」

「なんだと」

初めて聞いた刺客の声はどこか機械的な声だった。キンキンと聞いて聞き取りにくい。

そんな中、刺客の骨格が、変形していった。暗くて良くは分からないがベキベキ音を立てて変わっていく。

「リザードマンか……！」

リザードマン。

トカゲの皮膚とドラゴンのように硬い爪と牙を持つモンスター。種族的にはドラゴンに属性するがドラゴンとは違い知能は低く、また残虐な性格が彼らの特徴。動きが早く攻撃力も強いため厄介な相手だ。

でもそのリザードマンがなぜこのエルタインにいるの……？

この国は精霊に守られているから簡単には進入できないはずなのに
！！

「どうやってこの国に……クソツッ！！」

セリオスも疑問に思っているみたい。戦いに集中できなくなっている。

それもそのはず。モンスターがこの国に侵入できる理由などっつしかない。

1 つめは精霊の守りが弱くなっている。

2 つめは誰かが術を使って結界に穴を開けた。

3 つめは……内部の誰かが招き入れた

どれにしても国の一大事じゃん！！

その時、一際大きな金属音が鳴り響いた。

一瞬の間を突いてリザードマンが踏み入れてきたのだ。

火花が散った。

それを間一髪でセリオスは避けた。

キンキンと、やっと目で追いつけるほどの早い攻撃をギリギリ避けるセリオス。

力が負けていた。

このまま戦いが長引けば負けてしまう。セリオスの体力が持たない。

「っく

！！」

セリオスも自らそれが分かっているだろう。焦りが出てきて余裕もない。

広い部屋で、椅子に足を取られる。

間一髪で避けた。

ヒュンと風の音がなる中、椅子が2つに割れる。

その欠片がセリオスを襲った。

「きゃっ!!」

思わず悲鳴を上げる。

一瞬だった。勝負が決まったのは。

侵入者の剣はセリオスの腕を貫いていた。

だがセリオスの剣も……侵入者の体を捕らえている。

……命尽きたのは侵入者の方だった。

ドタリと盛大な音を立てて倒れた侵入者は動かない。

ゼエゼエと、セリオスの呼吸の音だけが聞こえる。

「セリオス、大丈夫!？」

敵が倒れたという事に安心しきったあたしはセリオスの元へと走った。

忘れてしまっていた。『セリオスが傷ついた』というショックを受けたために。

……侵入者がもう1人いたということに。

「ばっ！！来るなッ！！！」

悲痛な悲鳴が耳を刺激する。

(……………しまった！！！)

迂闊だった。

これは……………完璧にあたしのミスだ。

最後の侵入者はセリオスの元にたどり着く前にあたしを捕らえた。

ガシツとつかまれば動く事さえままならない。

シリウスから教わった護衛術も役に立たない。見事に、間接を捕らえている。

自力で逃げ出すことは不可能だった。

「……………アイを放せ」

要求を聞く気なんてないのだろう。

あたしの首にキラリと光る刃物が添えられる。

軽く引けば血が……………って、本当に引くなよ！！！！

「いつ……………た！！！」

脅しているつもりなのか、首を少し切られた。

ツーンと流れる血はナイフを伝って絨毯にしみこむ。

セリオスの悲痛な顔が目から離れない。

「……なにが目的だ」

「女神ノ命ガ我ヲノ望ミ」

「女神の命？」

女神の命……女神？女神って……もしかしてあたし！？

あたしの命が目的って助からないじゃん！！

セリオスもその答えにたどりつき、青ざめた様子で目を開いた。

冗談じゃない！！

はなせ……と暴ればナイフがいつそう首に食い込んだ。

鈍い痛みが首に走り、これは結構な深い傷になるんじゃないかと思えば容赦ない関節技がさらに決まり……痛みで涙が溢れ出すがそれをグツと歯を食い縛った。

泣かない。泣いてたまるものか！！！！

（誰だが知らないけど恨むからな！！）

何もかもが分からない状態であたしは死を迎えようとしていた。
ギリリと、ナイフが頭上にかざされ……

「アイツ！！！！」

「おっおっバットFEED?」

12章・とりあえず敵襲（後書き）

藍ちゃんいきなりピンチです。この危機を救ってくれるのは・・・
もちろんあの人なんです。皆さんはどちらを想像しますか？

13章・とりあえず決着

振り下ろされる短剣は間違いなくあたしの体に突き刺さり命を奪うだろう。

わずか一瞬のうちにその考えに至り自然と体が動いた。

逃げ切れない、避けきれない。

ならば逃げるのではなく、急所を守れ。

とつさに目をつぶり、手でグーを作って頭の上でガードする。

襲い来る衝撃に備えてジツと堪えて待っていると、

「ご無事ですか、アイ様」

「……あれ？」

聞き覚えのある声。

サラリと、青銀の長い髪とそれを纏める髪飾りがあたしの頬を撫でた。

その手にあるのは細かい装飾が施された槍。あたしの使う訓練用ではなく実用的なもの。

その槍はある一点を貫いていた。

「……シリウス？」

「はい。お怪我はありませんか？」

「怪我？怪我なんてしていないけど……それより侵入者は！？」

確認しようとするれば耳元で見ないようにに囁かれ抱き締められて止められた。

それで侵入者がどうなったのか……分かった。

部屋に入ってきた騎士団が動かなくなった侵入者の遺体を確認する。

「ご無事ですか、セリオス様」

「ああ。少しやられたがな……護衛はどうした？」

「皆、廊下で眠っています。おそらく眠りの魔法でも使ったのでし
よう」

だから誰もこなかったのか……あ。

「セリオス！！怪我平気！？」

最後に見た光景が頭をよぎった。

侵入者の剣は確かにセリオスの腕を貫通していた。

「……俺は平気だ。それよりもお前の方が」

「平気なわけがないでしょ……！！」

怒鳴ったことで部屋の時間が一瞬止まった。けど、無視だ。それより言いたいことがある！！

「平気なわけがないよ！！腕、貫通していたじゃん！！」

「この程度の事、いつものことだ」

「いつものことって……」

「殿下、失礼します」

白い法衣を着た女性がセリオスの腕を持ち、杖を媒体として風と水の精霊を呼び起こした。

風と水は癒しの精霊。

不思議な光がセリオスを包むと傷はあっという間に塞がり、薄い傷跡を残す程度にまでなった。

これが、魔法。

「うわぁ」

魔法をまじかに見たのは初めてだった。

レガードは実技をするにはまだ早いとって見せてくれなかったし（見たらやりたくなる）

「違和感などはございませんか？」

「大丈夫だ。問題ない。アイ、お前の方はどうなんだ？」

あたし？あたしって……ああ（ポン）

「首の怪我のこと？」

「それもあるが……俺が突き飛ばしたせいで体も打つただろう？」

……そういえば打つたね。完璧に忘れていたよ。

思い出したら急に痛くなってきて、どうして良いか分からずにとりあえず体を丸めた。

ズキンズキンって、これ腰打ってない？

「やはり思っていた以上に怪我が酷いみたいだな。マリン、アイの傷も直してやってくれ」

「はい」

女性……マリンさんが杖を振るとセリオスと同じ不思議な光があたしの体を包み込んだ。

薄っすらと斬られていた首の傷は消え、体中の痛みも消えうせる。

「どうだ？傷の具合は」

「あ、痛くない……！」

魔法って凄い……！

「ありがとうございます……！」

「いえ、ご無事でなによりです」

「マリン、この部屋の始末は任せる。アイ、来い」

「あ、うん」

治してもらった御礼を言っつて、セリオスに引つ張られて一緒に部屋を出た。シリウスも他の騎士と話すにあたし達の後を追いかける。

向かった先はセリオスの部屋から少し離れた貴賓室。流石にガラスだらけの部屋で今夜眠ることは出来ないからね。

用意された貴賓室は貴族御用達の専用ルームで、中は豪華な仕上がりになっていた。

触り心地の良いカーペット。見るからに貴重な品々。壁にかけられた絵画。

落ち着かない……とりあえずお茶でも入れよう。

あたしの分と、セリオスの分。

それからシリウスの分も。

今夜は部屋の中でシリウスが護衛に付くようになった。

さすがに襲撃があった直後だから必要以上の警戒がなされるみたい。

「セリオス、シリウス、紅茶飲む？入れるけど……」

「メイドに入れさせたらどうだ」

「でもなんか自分でしたいの。落ち着かないから……飲むでしょ？」

「頂きます」

「ああ、頂く」

「オツケー。でも吃驚したよね。襲撃だ　！！なんてさあ。2人も無事に済んでよかったけど」

「そうだな……無事でよかった」

セリオスはソファァーから降りてあたしの前までやってきた。その手を顔に近づけると、耳元辺りをサラリとなで上げる。

ドッキン

……ドキンって、あれ？

セリオスの浮かべる穏やかな微笑に……胸が一瞬きゅんとなった。あれれ？あたし、どうなったの？

胸が、胸がドキドキして止まらない。

いや、ね……顔は好みなんですよ。マジなところ。

ただ性格に難アリ。おまけに10歳の子供の姿っていうのが恋愛の対象外になっちゃっているわけで……うん。

……あたし、セリオスのこと、嫌いじゃない。むしろ、むしろね

「でんか」

「ぎゃああああー！！」

考え中に後ろからポンツと肩に手を置かれ、【天敵】といえるヤツの出現で吃驚したあたしは思わず最大級の悲鳴を上げてしまった。

おま、吃驚したわ　　！！！！

「なんですか騒々しい。それに人の顔見て悲鳴上げるなんて失礼にもほどがありますよ」

「痛ッ！！」

ピコンとおでこを叩かれて、痛みを堪えて睨めば前には不機嫌そうな顔。

でも、あたしに非はないはずだ。

なにせいきなり驚かしたのはレガードの方なんだしね！！

「なんで叩かれないといけないわけ！？いきなり驚かしたレガードが悪いんじゃない！！」

「そうですね。レガードさんはもう少し時と場合を考えて行動していただきませんか……せつかく良い雰囲気でしたのに……お邪魔虫ですね」

「……おやゝ。いたんですか」

「クスクス……この距離で気がつかないなんて……老眼鏡でもプレゼントいたしましょうか？」

「結構ですよ。嫌味ですから」

「地味な嫌味ですね。年の功があるのですからもう少し頑張っただけませんか？」

「……………」

し、シリウスの背後に大蛇が、レガードの背後に黒豹が見える……
！！（汗）

「セリオス、この2人って仲悪いの？」

「火と油だ」

納得しました。

「それでレガード、侵入者の身元は割れたか？」

「今のところ、侵入者の半数以上が魔物ということ以外は分かっていますね」

「すぐに調べ上げる」

「了解しました。それから双竜が逃げた者達の後を追っています」

「そうか……危険であれば深追いはするな。この国に侵入したほどの腕前だ。禁術を使用している可能性もある」

「分かりました。そう伝えておきましょう」

「……ねえ、双竜ってなに？」

聞き覚えが無い。なにそれ、人間？

「二つ名の事ですよ。青竜、アリアス。朱雀、ディオス。2人あわせてエルタインの守護戦士『双竜』と呼ばれているんです」

シリウス丁寧な説明ありがとう。
へへ始めて聞いた。

「ところでなぜあなたがここにいるんですか？」

……………ん？

さっきから疑問に思っていたのだろう。

レガードの言葉にシリウスもあたしにその目を向けた。

……………どう説明すれば良いの？

「……………いや〜ついにアイ様も観念しましたが。これで我が国も安泰
ですね〜」

「いやいやいや！！待て待て待って！！」

「照れなくても良いですよ。いや〜本当に目出度いですね〜」

いやあ〜！！このままじゃマジで誤解されるうう！！！！！！

自分の気持ちがハッキリとまだ分からないうちに結婚になるのは嫌
ああ！！

「レガード、冗談はその辺で止める。アイがこの部屋にいたのはリ
ディの策略だ」

「……………なるほど」

必死な想いが伝わったのか、セリオスが苦笑いをしながらレガード

を止めてくれた。
ホッと一安心。

でもリデイの仕業とだけしか言っていないのにみんな納得してするなんて……リデイ、あんた凄すぎよ。

「とにかく今夜は疲れた。シリウス、護衛は頼むぞ」

「はい。お任せください」

「アイ。お前、今夜は俺と一緒に寝ろ」

「……………え!!」

にやんですと!?

い、一緒に寝ろって……もしかして、

「あ、あの、あの、あの!!同じ……ベッドで?」

「フツ……安心しろ。手は、出さない。それに今離れるのは危険だぞ」

「そ、それはそうだけど……」

あたしも、今夜はさすがに一人で寝るのは怖いけどさ。

セリオスが1人、ベッドにもぐるとシーツをめくりあたしに微笑みかける。

いつもとは違う、優しい微笑み。

脳裏にキスされた事が一瞬浮かんだ。

だがその人懐っこい笑顔を見せられ、シリウスと一緒にいるという

事を思い出し、大事には至らないだろうと考えおそるおそるキングサイズのベッドにあたしは潜り込む。

心臓が、バクバク波打って 息が出来ない

「……大丈夫だ」

震える体をギュッと抱きしめられた。

多少の警戒心はあったけど、優しいセリオスの表情にあたしはすっかりと安心しきってしまった。

眠気を誘う暖かさに、逆らえない。

「……セリオス」

「お休み、アイ」

お休み、なさい。

最後に感じたのは額への柔らかな感触だった。

13章・とりあえず決着（後書き）

はい。先に間に合ったのはシリウスでした。色々考えたのですがやっぱり戦闘にはレガードむかないなって。レガードは裏での活躍の方があつてますから。

ちなみに今まで書くことも無かったので新事実となつてしまいました。レガードとシリウスの仲は悪いです。理由は番外編みたいにして書きたいと思つていますが感の良い方はお気づきになつてしまうでしょうね（笑）

新キャラも出てきたのでそろそろキャラクター紹介でも書こうかなつて思います。他にも出てきた国の名前も

*誤字のご報告を受けて編集させていただきました。教えてくれた方、本当にありがとうございます。結構調べないで使うこともあるのでこの使い方違つよ〜と言われると恥ずかしさより何よりありがたいです。

13・13章・とりあえず短編（前書き）

仲が悪いレガードとシリウス。

実はこんな出会いです。滅茶苦茶短いです。

13・13章・とりあえず短編

エルタイン王国でおこなわれた武道大会。

史上最年少で優勝したのはわずか15歳の少年だった。

獲物はレイピアとよばれる細身の剣。

一瞬のうちに相手の急所を掴み軽やかに敵を倒すその姿はまるで天使が踊っているかのように美しかったと誰かが言った。

女か、男か。

傭兵という仕事に付いていたシリウスに対し侮辱の意味も込め、性別をあらさまに聞いてきた輩は大勢いた。

中には男装しているのでは無いかという声も上がった。もちろん、わざとである。

屈辱に震えるシリウスはなんとか怒りを納め騎士団の訓練所へと向かい始めた。

クスクスと笑う声が酷く耳触りで一刻も早くこの場を離れたかった。

そんなシリウスの前に進路を塞ぐかのように現れた男性がいた。眼鏡をかけた若い男。なにやらうんうんと頷いている。

「なにか？」

「ああ、少し確認したいことがあります」

その男性はニッコリと嫌な笑顔を貼り付けて

「・・・おや？やはり、男ですか」

胸を掴んだ。

しかも掴んだだけではない。揉んでいる。それはもう、モミモミと。周囲の男達から【おお〜】という尊敬のような声が上がった。

「レガード様、どうですか、感触は!？」

「男性なのでやはり硬いですね。見た目が麗しいのでもしかしたらと思ったのですが・・・ハア」

「レガード様〜!!女性の中にはほぼまな板と言つのに相應しい胸の持ち主もいるんですからもしかしたらその類かもしれませんよ」

「それもそうですね。どれ、一つ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・男ですよ」

ピクピクピク。

怒りのあまり頬が引きつる。

ギロリとした眼差しでレガードと呼ばれた奴を睨んで男だと、ハッキリ言っただけだ。

にも関わらずレガードはシリウスの服に手をかけ脱がせようとする。

我慢も限界だった。

一瞬のうちにレイピアを取り出し横へと引いた。
死んだら死んだ時だ。あの男が悪い。

捉えたと、そう感じた。

感じた手ごたえにシリウスは薄っすらと口元を歪めた。

「いや〜中々の腕前で」

「……………なに？」

死んだと思った。

だが、レガードは生きていた。

僅かな時間で魔法を発動させたのだろう。

青い鎖で編まれた球体がぐるりとレガードの周りを囲み彼を守っていた。

結界魔法である。

しかも、かなりの強度を誇る最高のもの。
限界を迎えたのは剣のほうだった。

パキンと、砕けた。

「おやく折れちゃいましたね。すみません。新しいの、買ってあげ
ましようか？」

嫌な笑顔。

あきらかに馬鹿にされていた。

チャキツと無言でシリウスは二本目のレイピアを取り出した。
構え。

そして、

切った

シユンと、風を切る音が木霊する。

剣の風圧はレガードを通り越し、その後ろに聳え立つ大木を切り裂いた。

ドシンと大きな音を立て左右に倒れこむ。

その有様を見てパニックを起こしたのは先ほどまでレガードと一緒にシリウスをからかっていたギャラリー達であった。

今更ながら自分達が敵に回した者の実力がどれほど凄まじいものなのかを理解してしまったらしい。

だって、ほら。国一番の実力者であるレガード様に、

「……………やりますね」

傷を負わせたのだから……

レガードはスウツと目を細めると絶対零度の眼差しをシリウスに送った。

その頬には数ミリの傷が横に出来ており真っ赤な血液が垂れ始めていた。

レガードはクイツと血を拭う。

「殺す」

地の底から響くような2つの異なった声が合図となり、コングが鳴った。

その戦いは実に2時間にもわたり、城の約四分の一を破壊したという……

「……………それ、全体的にレガードが悪くねえ？」

「ですよね」

リアから聞いた仲の悪い2人の事情。

やっぱり悪いのはレガードだと、かつて半壊したという騎士団の訓練所を見てアイは脱力した。

キャラクター設定（前書き）

本編ではなくキャラクターの容姿や設定になっています。イメージは大まかなものなので色々想像してみてください

キャラクター設定

アイ・カグラ
神楽藍（15） セミロングの黒髪で黒目

中学3年の15歳。友人から借りた乙女ゲームを全キャラクタークリア後、キャラクターの1人であるレガードの手によって異世界からよばれた少女。なんでも全ての精霊を使役しどんな魔法も使え無効化する【奇跡の子】を産むことができる女神として召喚された。エルタイン王国の第一王子、セリオスの子供を孕み産むことができれば元の世界に戻るらしい。平凡な顔立ちで決して美人とはいえないために自らが美形とくつつくという考えは持ち合わせてなく、あくまで美形って観賞用だよねという考えの持ち主。セリオスの妹であるリディアートとは仲が良く暇さえ見つければお茶会を楽しんでいる。

セリオス・エルタイン（20） 肩で揃えた蒼い髪に紫闇の瞳
エルタイン王国の第一王子であり王位継承権第一位を持つ青年。本来は20歳の誕生日を迎えたばかりだがアークザルの魔道士によって10歳前後の少年の姿に変えられてしまった。プライドが高く、自分の身分に擦り寄ってきた貴族の女達のせいで軽く女性に嫌悪感を抱いており女は全て汚らわしい生き物という考えの持ち主だったがアイの行動により徐々にその考えを改めていく。結構嫉妬深い。

レガード・セシル（29）

金の目に紺の長い髪を無雑作

に垂らしている。眼鏡着用

宮廷魔道士でありエルタイン王国唯一の召喚師。魔力、実力、共にトップクラスの持ち主だが性格に難がある。過去の出来事から女性に酷い嫌悪感を抱いており、女性は全て道具として見なしている。

一応アイの教育係り（魔道の）シリウスとは犬猿の仲。

シリウス（22）

濃い緑の目に青銀の長い髪を三つ編み。女に

間違えるほどの絶世の美形。

わずか15歳の時、エルタイン王国で開催された武道大会で優勝し名誉ある「銀の騎士」の称号を与えられた青年。現在は聖騎士団の副団長を務めている。孤児なので血のつながった家族はすでおらず、お世話になった傭兵の女性が唯一の家族となっている。普段は無表情で笑っても、怒ってもその表情が変わる事は殆ど無い。アイの教育係りを務める（護身術）レガードとは犬猿の仲。

リディアート・エルタイン（13）

波打つ銀の髪に薄紫の目

セリオスの妹で第一王女。王位継承権第二位を持つ。13歳という若さでありながら美しく可憐で見る者を虜にする美貌を持つがその見た目に反して非常にイイ性格の持ち主。自分の見た目を気にしないアイを気に入っている。現在ユーリに片思い中。気に入った者には愛称のリディアリアと呼ばせている。

ユーリ・ハウランド（14）

雪のように白い肌に新緑の目。短い

金の髪をギリギリ結んでいる

幼いながらも剣の腕前は確かでその腕を見込まれてリディアートの護衛騎士に任命された。リディアートとはいわゆる幼馴染でリディアーのことを妹として大切にしており有力な貴族と結ばれる日を夢見ているという。白の騎士の称号を持つ。

宮廷魔道士・・・国や宮廷に使える魔道士。レガードが所属している。上位魔道士には宮殿内に部屋が、下級魔道士には城の端に専用の建物が用意されており皆そこで寝泊りする。

聖騎士団・・・国や王宮に仕える騎士。シリウスが所属している。

上位騎士は宮殿内に部屋を持ち下級騎士は城の端に専用の訓練所が用意され一般的にはそこで寝泊りする。聖騎士団には位があり上から順に【銀】・【金】・【白】・【紫】・【青】・【赤】・【黒】となっている。

キャラクター設定（後書き）

よく出てくるメインキャラクターのみを書いてみました。その内サブキャラや国の名前なども書かせていただきますね。

・・・あ、ユーリはサブキャラだった（汗）

14章・とりあえず第二部スタート（前書き）

第二部がスタートしました。予定としては第一部が異世界での生活。第二部が謎あわせ。第三部が決着編と考えています。大体のストーリーとかEDとか考えてはいるんですが・・・書くとなんか難しくなりま
すね（苦笑）スラスラかける人が羨ましい。

14章・とりあえず第二部スタート

あの襲撃事件から1ヶ月経った。

あの日、奇跡的に死者は出なかったらしい。

怪我人のみで重傷者もいたらしいが命に別状は無かったと聞く。

結局のところ、リザードマンを操っていた魔導師は発見できずいた。だが、まったく手がかりが無かったわけではない。

双竜の1人、アリアス・ファウストが結界の綻びを発見したのだ。

その結果、精霊の結界石に傷が付いたために守りが弱くなりリザードマンが進入した。そう世間には発表された。

もちろん、結界石が簡単に傷つかないという事はレガードから説明を受けている。

あの侵入者達も言っていた。狙いは女神ノ命。つまりあたしの命だと。

となれば……今回の事件の首謀者が結界石を破壊しようとした。もしくは傷をつけた。

そう考えるべきだとセリオスは言う。

あたしもその考えに賛成。

あたしの命は狙われている……あたしを疎ましく思っている人達に。

そして、この1ヶ月。

……いまだに犯人はつかまらずにいた。

この世界に来て3ヶ月が経った。
後、9カ月。

長いようで短かったと思う。大分この世界にも慣れてきた。
でも……

「……………ひま」

そう。ひまなのだ。
分かっている。危険なのは分かっている。
むやみやたらに出歩けないのも理解している。
理解はしているのだが……クソオ……！！

盛大なため息をついて窓の外を見つめた。
城下町はかなり大きい。他国と同じぐらいなのかどうなのかと
りあえず分からないけど見た感じは大きい。

つーことは、楽しみは一杯あるはずだ。
ショッピング・散歩・見世物。

目の前にあるのに遊べない……うっ〜っらい（泣）

「嬢ちゃん、ひまそうだな」

「……ひまですよ。この3ヶ月、城の中で入れるところはほとんど
コンプリートしちゃいましたもん。あゝあ、城下町いつてみたい…
…ねえ、ディオス」

「ダメだ」

「……まだなにも言っていないのに……」

「嬢ちゃんの考えることなんてお見通しだつーの。ほれ、今日の
土産のパプトンだ」

「うわあ、嬉しい!!……って、あのね」

「ん？なんだ？」

「これ、どうやって食べるの？」

ディオスがお土産と渡したのはこの世界でもっともポピュラーな果
物、パプトン。

見た目はパイナップルに似ている。

トゲが殻のようになっていて……これ、どうやって食べていいのか
分からない。

試しに2つに割ってみようと試みればトゲが刺さって痛い（泣）

「まったく……嬢ちゃんほんとにとっから来たんだ？パプトンの剥きかたも知らねえなんて……よっぽどの田舎育ちじゃねえかぎりありえねえぞ」

「アハハハハハ……（汗）」

とりあえず笑つてごまかそう。

異世界人ですから知りませんって！！

食べたことあるけど（食事のときに）その時は皮むいてあつたし。

その果物をディオスはナイフで器用に皮をむいていった。

色はオレンジ色。味はマンゴーに似ている。

甘くて美味しい。程よい酸味がまさに絶品なんだよね！！

「ほれ」

「サンキュー。ありがとう」

黄金色の果物。そのあまりの美味しさに思わず手掴みをしてしまう。

……ヤバイなあ思わず癖でやっちゃった（汗）

こんな食べ方、ミシエル先生に見られたら『はしたない！！』って怒られて叩かれちゃうよ。

けど、この場にいるのはあたしと護衛のディオスだけ。チロリツとディオスを見れば特に気にした様子は無い。

……良いよね、これでも。手で直接摘んじゃおう！！

この食べ方が一番美味しいもん

「ん~~~~!!あまあい!!!!」

「オイオイ……マジであんたどこから来たんだよ……」

「ん?」

果汁の付いた指をぺろり舐める。

……ちよつと、その顔はなに?

「嬢ちゃん、正直に答えてくれ」

なにになんですか?

「あんたはセリオス殿下の婚約者でシエルダー公爵家縁のご令嬢なんだよな?」

「……………!!? (はあ!?)」

ちよ、ちよつと待って!!

シエルダー公爵家ってかなり身分の高い家じゃん!しかも、王家の血も入っているとされる由緒正しいお家柄の!!

……そういえばあの事件の後、念のために身分を偽造しておくって言われた。あたしが犯人にされないようにと(あの後一部の貴族があたしの自作自演じゃないかって噂していたらしい)

そりゃね、異世界の事は軽々しく言えないし、王家の秘密ってものもあるから賛成したよ。

それでもね、いくらなんでもやりすぎ!!なんちゅー設定にしますか!!

道理でこの頃ジロジロ見られるわけだ。嫌味言われるわけだ。かの有名なシエルダー公爵家縁のご令嬢が礼儀作法できない。手づかみで果物を食べる。

そんな事はありません。クソッ！！

「…………その情報源どっから？」

「あ？レガードさんだけだよお」

やりやがったな、レガード！！

「…………ディオス、あたしちょっと用事が思い出したから」

「はっ！？オイ、ちょっと待て！！！」

待てません。

礼儀作法もなんのその。

長いスカートを下着が見えないギリギリまで手繰り寄せ、レガードの私室まで全速疾走した。

この時間なら多分休憩しているはずだ。へたな所を探すより私室に行ったほうが確率が高い。

誰にもこんな姿見られませんように！！見られたらミシエル先生が怖い…………！！

そんな事を考えながら走れば目の前にはレガードの私室の扉。

…………あれ？護衛がない。置いてきちゃった？…………まあ、いつか。

あたしは足でドアを蹴り開けた。

「…………アイ様」

部屋の中にはまたしてもいやらしい格好をしたレガードがベッドに腰掛けていた。

…………ヤバツ（汗）もう少し早かったらお楽しみ中を邪魔する所だったよ…………次からはノックをしてから蹴り破ろう。

「蹴破らないでください（怒）それから、口に出てますよ」

「…………あれま！」

「まったく…………護衛はどうしました？」

「走ったらついてこれなかったみたいですよ」

「…………はぁ（あきました）で、なんの用ですか？」

「話があつて来た！」

「…………どうやら面倒そうな話のようですね。まあ座ってください。紅茶でもいれましょう」

その言葉にあたしは部屋の中央に設置された椅子に腰掛け、レガードが淹れる紅茶の音を聞きながら、どうしたものかと頭を押さえた。

14章・とりあえず第二部スタート（後書き）

アイは身分を手に入れた（チャララン〜）

設定・田舎貴族の娘でセリオスの側室候補 由緒正しき公爵家の娘。
正室候補。

他の側室候補からはさらに嫌味のオンパレードを受ける羽目になる
でしょう。

15章・とりあえず令嬢（前書き）

アイの身分について説明させて頂きます。

アイが異世界から召喚された存在というのは王者以外ではその場にいたレガード、シリウス以外知りません。アイが召喚された理由は子供を産む為、なので必要最低限の身分が必要です。そこでアイは田舎貴族でセリオスに見初められて城につれてこられた側室候補とされています。ですが命を狙われたためにこりゃいかなとかなり高い身分にチェンジされています。この世界ではすぐれた子供を養子に引取るといった事が結構頻繁にあります。この事を頭に入れて頂ければ理解しやすいかと。

15章・とりあえず令嬢

「ねえ、あたし果物のやつが良い」

「ありませんよ、そんなの。紅茶はやはりストレートが一番ですか
ら」

（ストレートだと苦いじゃん。砂糖も無いのかよこの部屋は！！）

「ありません」

「心読むな！！いい加減訴えんぞ！！！！」

「で、なんであたしがシエルダー公爵家の令嬢なんて噂が広がっているの」

からになったティーカップをトンと置いて、あたしは本題へと入った。

そもそも、そこまで大げさな設定にする必要ってあったわけ？
公爵家だよ、公爵家。

しかも数代遡れば王族の血も入ったという由緒正しい。
当初の予定ではとある男爵の娘ぐらゐの設定だったじゃん。

そう言えばレガードはキョトンとした。目が点状態だ。

「……ああ。そんな事ですか」

「そんな事じゃないし、ちゃんと説明して」

「……あなたを守るためです」

あたしを守るため？

なんの冗談を、そう吐き出そうとした言葉は喉の奥で消えた。
バサツと、紙束が投げ出される。

読めっていうの？

その紙には王家の刻印がくつきりと押されていた。
読んで、絶句。

「　　つちよ、これ！」

慌ててあたしはレガードに問い詰めた。

その紙にはあたしについて書かれていた。

正式に養女としてシエルダー公爵家に引き取られたという事が。
こんなの、マジで聞いてない！！

「落ち着いてください」

「おち、おち（スウ、ハア、スウ、ハア）……落ち着いた」

「宜しいです。先月の事件、覚えていますね」

「もちろん忘れてない」

忘れはしない、女神暗殺事件（と事実を知っている人にはそう呼ばれている）

リザードマン侵入、および結界の綻び。

国の一大事であり、下手をすればエルタインの次期国王が永遠に失われたであろう日。

あの日を忘れられるはずがない。

けど、それとどんな関係があるの？

「この件については他言無用をお願いします……侵入者についてはまだ不明ですが……手引きをした者は分かりました」

「……」

それ、初めて聞いた。

手引きをした人がいるってレガードは確かに言った。

それってつまり、スパイ、もしくは協力者がこの国にいるって事だよな。

でもならなんで捕まらないの？

答えは簡単。

そのスパイは『身分』がある人でさらに『証拠』が不十分だから。

脳裏に、あの男達の姿が浮かび上がる。

喉を切られた痛み
刺されそうになる恐怖

「……誰？」

「フオール・ガラ・ガリス伯爵。野心家で、自らの娘も道具扱いる男です。そしてその娘であるミリ・ガラ・ガリス嬢は陛下の、正室候補です」

……めっちゃ地位あるし。まさに最悪じゃん！！
ああもう！！なんか分かってきた。

「あたしがセリオスの傍にいと自分の野望を達成する為には都合が悪い。だからあたしを殺そうと企んだわけね。」

お約束の展開。

しかもあたしは女神として召喚された少女だ。

だから現時点で側室あつかいされていても実際にはもっとも王妃に近い存在となっている。

ガリス伯爵にしてみれば、自分の娘を正室か側室にして王宮の実権を握りたいわけだからあたしの存在というのは邪魔でしかないのだから（それに最近結構セリオスの傍にいたからさらに目障りだったろう）

「ええ。正直、こんなに早く手を出してくるとは思っていませんでした……アイ様、あなたには陛下の呪いを解いて貰わなくてはなりません。その為には、陛下のお傍にいたことがなにより一番だと思っっています。ですが、このままの『身分』ではあなたを守りきることは出来ません。もちろん、男爵程度の身分でも無理だと判断いたしました……この国は、隣国に比べれば平和な国です。ですが、

絶対ではないのです」

「はっきり、言って良いよ」

「最悪、『不慮』の事故であなたが亡くなる可能性があります……
なんの後ろ盾もなければ」

それってかなり危険な状態って事じゃないか!!
うわゝあの日セリオスと一緒に良かったあ。

あたし1人だったら殺されてたよ。リディに感謝しよう、うん。

「でも本当に養女にしくなくても良かったんじゃない？噂だけで十分
じゃ……シヨルダー公爵家の名に傷がつくよ」

「噂のみなら調べられれば一巻の終わりです」

「あ、そっか」

「そうなんです。もう少し、危機感を持ってください。良いですか
？あなたがシヨルダー公爵家に養女として引き取られたからには相
手もそうそう手は出してこないはずですよ。ですが、油断はしないよ
うにお願いいたします。護衛は常に、傍に置く事。1人で出歩かな
いこと。ましてや、護衛を置き去りにして歩きまわるなんてもつて
のほかですよ（ニッコリ）」

「……………ゴメンナサイ（汗）」

ニッコリと、微笑んでいるのに怖いです！

素直に謝っておこう。これは、あたしが悪い。

コンコン

「失礼いたします」

話が終わる頃、控えめなノックと鈴のような声が聞こえた。この声には聞き覚えがない。大方、レガードの部下だろう。気にしないことにした。新しく紅茶を入れなおす……うん。紅茶の趣味は一級品ね。

「どうぞ」

ガチャッと静かにドアが開かれた。見て吃驚。

入ってきたのは男性だった。多分魔道士だろう。法衣にしては実用的な衣類を纏い、『さわやか』という言葉が似合いそうな青年はシリウスに負けなぐらい整った顔をしている。

髪の色はハニーブラウン。その髪はサラサラと揺れ、スツと流れるような瞳は閉じられていた。

けれど、あたしの顔を見てその瞳は開かれた。空色の目。

けど直ぐにまた閉じられた。もったいない……

「アイ様、ここにいらっしやったのですね。心配いたしましたよ」

「アリアス」

レガードがその青年の名前を言う。

アリアス・ファウスト。

ゲーム中ではただ名前だけが出てきた男性。

ファウスト伯爵家の三子で武道の才能が皆無だったため魔術の道を歩んだレガード直属の部下。

紳士的な性格で、二つ名『青竜』の名を持つディオスのパートナー。

(でも、イメージとなんか違う……)

ディオスと組むぐらいだからもつと筋肉質の男性を思い浮かべていた。

なんて言えば良いかな……ディオスを細くしたような感じをイメージしていたのだ。

けど、違った。

良くその体であるディオスについていけるね。

「いや〜丁度いいタイミングで」

「アイ様」

彼はサツと部屋の中に入るとあたしの前へ来ると跪いて手を取った。

……まさかまさかまさか!!

まさかと思ったがやられた。

騎士が姫に送るような尊敬のキスを。

う、うにゃああ!!!

顔が赤くなる。恥ずかしい、恥ずかしすぎる!!!

「本当にご無事でなによりです。さあお部屋に、行きましょう」

あたしの反応を気にした様子もなく、彼は手を取りあたしを立たせる。

「え、あの、ちょ」

まだ話が途中なのに！！

そう振り返ればレガードさん、あなたイイ笑顔ですね。

もう、帰れば良いんでしょう、帰れば！！

「お迎えご苦労様ですねアリアス。ですがわたしの記憶ではディオスが今日の護衛だったと思いましたが？」

……嫌味のオンパレード。

けど彼は真っ向から受け取った。

「彼には急用が出来たので代わりに私が。なにか彼に用事があるのでしたら伝えておきますが？」

「……いえ、気になっただけです」

……アリアスって大物。ニッコリ微笑んでレガードの嫌味をやり過ぎました。

そういえばアリアスはレガードの部下だもんね。嫌味攻撃は挨拶代わりのレガードと毎日顔合わせしているんだからどう対応すればいいかなんて分かりきっているか。

「では失礼いたします……あ、そうそうレガード」

退室しようとした……一瞬の内に空気が変わった。
その空気を出しているのはあたしを守るアリアス。
な、なに？さっきの時の温厚そうな彼ははずこに！？

「いい加減真面目に仕事をしていただかないと私にも考えがありませんから……」

カッと一瞬だけ目が開く。

……こ、怖い（汗）

その思いが伝わったのかアリアスはすぐにあたしに微笑んだ。
安心してください。
そう聞こえた気がした。

「……やれやれ」

アリアスの本気が伝わったのかレガードは仕事を始めた。

「では、お部屋までご案内いたします」

「あたしの？」

この言葉に意味なんて無かった。けれど、

「リディ様のお部屋です」

……あたしの部屋じゃないんかい！！

15章・とりあえず令嬢（後書き）

当初、アイの令嬢の設定は噂だけにしようとしたのですが妹に『調べられたら終わりじゃねえ？』と突込みが入り急遽、直しました。

16章・とりあえずお姉さん

アリアスに連れられてやってきたのはセリナギの文様が描かれた扉の前。

コンコンとノックをすれば鈴のような声の持ち主返事をして姿を現した。

お茶会を始めているせいか、バターや砂糖の甘い香りを纏ったまま。

「あらアイ。来てくださったのね。とっっても嬉しいわ」

こちらに来てください。って、誘ってくれるのは嬉しいんだけどまずはあなたの部屋の中で優雅に紅茶を飲んでいる麗しい美形を紹介していただけませんか？

進められた席についてリデイに入れられた紅茶を飲みながらあたしはちらりと視線を左に向けた。

整った顔立ち。

肩で綺麗に揃えられた髪の色はレッドパープルを少し濃くしたぐら
い。

瞳はアクアグリーン。

着ている服はシリウスと同じ聖騎士団の制服だった。

耳を飾るのは『紫の騎士』の証しである丸い小さな石でできたピア

ス。

この国で取れる鉱石で作られた聖騎士団員の『身分証明書』それは彼にとっても似合っていた。

見た目は文句なしの美形。

だけど、なにか違和感を感じる……なにかがおかしい。

でも良くみればその違和感の正体はすぐに分かった。

体全体が丸みを帯びている。

そう。どうあがいても消す事のできない女性特有の体つき。

ってことは彼は女？

つまり男装しているの？

「あの、失礼な事を聞きますが女性ですよね？」

確認のために聞いてみる。間違ってたらとりあえず誤ろう。

「ええ。女性ですわよ。レオナ、自己紹介なさって」

女性で合っていた。

ひとまず安堵のため息が出た。

リディに言われてレオナ……という人は紅茶を飲む手を休め言い放った。

「ご機嫌麗しゅうアイ殿。私の名前はレオナ・シオルダーという。

今日から家族になるわけだから私の事はぜひ姉上と呼んで欲しい。」

顎に手をあてて微笑む彼女は煌びやかでまるで大輪の薔薇を思わせ
た。

……あたし、生まれて十数年。背後に花を咲かせた人なんて始めて見た。
あ、そういえば姉って……じゃあこの人の家でお世話になったりするのかな。
とにかく挨拶しないと。

「初めまして。アイ・カグラと言います。えっと……レオナさんと呼んでも」

「姉上」

……あれ？

「あの、レオナさ」「姉上」………」

こ、この人。

「あの「姉上」………」

一段と強い言葉で言いなおされた。
こ、この人強い！！なんか逆らうなオーラがミシミシと突き刺さる。

レオナさんは紅茶も飲まずにジッとあたしの顔を見ている。
あ、穴が開きそう。恥ずかしいよ！！こんな美形（女性だけど）に見つめられるなんて！！

助けて欲しいと。助けを求めてリディを見れば完全無視。
むしろ巻き込むとその目をスッと流すと紅茶に手を伸ばしほんとはガン無視。

背後にも無視という文字が見える。 あぁん!! 薄情者!!!!

「……悲しいな」

どうしたらいいか分からずに迷っていればそんな言葉がレオナさんから。

視線を下に逸らし、微かに目を細めた彼女は不意に涙を流す。

……え

「アイは私と仲良くはしてくれないのだね」

「いや、あの、仲良くはしたいですが……」

「ならば!! なぜ姉上と呼んでくれないのか!? 私は、私は可愛い妹が出来る日を今か今かと待ち望んでいたというのに!!!!!!」

「否、可愛くありませんから!!」

「なにを言う。君は自分を過小評価しすぎだ!!」

レオナさんは椅子から立ち上がりあたしの前へと跪くとクイツと顎を持って。

「陶器のように白い肌」

「リデイの方が白いし肌触りも良いですって!!」

「ブラックパールのように輝く瞳。夜空よりも美しいその闇色の髪」

「リデイのアメジスト色の瞳の方が宝石みたいだし、リデイの髪の方が絹みたいにさわり心地が良いですって!!」

「食べてしまいたいほど可愛らしいサクランボ色の唇。思わず触れてしまいたくなる頬はまるで咲きかけた薔薇のよう。」

「リデイの唇の方が……って、何言わすかいな　　!!!」

「なによりその性格が気に入ったんだ。ドンピシャに好みなんだ」

「リデイの方が可愛いじゃん」

「性格に難ありだ」

ああ。納得。

「なんでそこで私を見ますの？」

いや、べつに……

「そういう訳で楽しみだったんだ。なにせ我が家は男しかない。華がない!」

「レオナさんがいれば華あるじゃん」

「残念ながらわたしは」

「レオナは幼い頃から剣一筋なんですのよ。趣味は剣術。特技は武術。礼儀作法は完璧ですのに立ち振る舞いも衣類もまるで男そのもの。もうシヨルダー公爵は嘆いていらっしやいましたわ。待望の

娘だったというのに……」

「うん。まあこればかりは仕方が無いね。男性の服の方が似合ってしまうんだよこの顔には」

ドレスも似合いそうだけどなあ。

「それに、いざというときあのヒラヒラの服では動けないではないか。何度引きちぎりたくなったことか……それならいっそ、男装した方が良いと思わないかい？」

額に手をあてて『あぁっ』と嘆くレオナさんにリディが冷めた視線を送った。

「引きちぎる方が可笑しいのですわ」

「同感……」

「だがもう父上が心配する事は無い！！我が家に可愛らしい【妹】が来るのだからねえ！！」

「言っておきますけど、貸すだけですわよ。返してくださいませね。アイはお兄様と結婚するのですから」

「リディ！？」

あんたなに言ってるの！？

「ふむ……だが聞くところによれば今回の婚約は彼女の同意を得たわけではないのだから？無理強いは良くない。どうだい、アイ。我

が兄上と付き合ってみたら。妹の私が言うのもなんだが兄上はそれはそれは良い男だぞ。紳士的だし、我が家の跡取りだから食うのは困らないぞ。それとも弟を紹介しようか。成績優秀で将来有望だ。なあゝに。アイより2つ年下だが男というものはすぐに大きくなる。その内年など気にならなくなる。どうだ？」

「レオナいい加減になさいませ！！アイは私の姉になるのですよ！！」

……もうほつとっつ。

本人無視して話を進めすぎ。しかも2人とも自分勝手。

あたしは、セリオスともレオナのお兄さんや弟さんとも結婚しません。家に帰るんだから！！

心を落ち着かせるためにゆっくりと紅茶を飲んだ。

あ、良い茶葉使ってるゝお菓子も美味しい

「「アイ！どつちが良い！？」」

……どつちも嫌だつて。

16章・とりあえずお姉さん（後書き）

実はこれを投稿する前に割り込みで13・13章という短編を書きました。レガードとシリウスとの出会い話でセリオスは出てきません。興味のある人は読んでみてください。

17章・とりあえずドラゴン

ヒートアップする2人を放って、あたしはこっそりと部屋を出る。
護衛をしていたユーリがギョツとした顔をしたが無視だ。

あ、こらー！そんなに慌てるとまた転ぶ……って、あゝあ。

哀れな美少年は自分の足を絡ませて頭からすっころんで気絶してしまっただのです。

ちゃんちゃん・・・なんちって。

まあ、丁度良いところにいたという事でユーリを捕獲。あたしを部屋まで送ってといえは送ってくれた。

時刻はもう夜の時間帯に差し掛かる頃だった。

結構な時間、お茶会をしていたらしい。

だから食事は部屋に用意されていた。

メニューは軽めのサンドイッチっぽいものとシチュー。

美味しいと感想を浮かべながらあたしは今日会ったレオナさんの事を思い浮かべた。

あたしの、義理の家族。

義姉あねとなった人。

綺麗でカッコよくて、憧れの『お姉様』って感じ。でもどこか変で・・・リデイの友人。

『我が兄上と付き合ってみたら』

「……………無理無理無理」

唐突に思い出すレオナさんの言葉。
レオナさんの兄ってことは、次期当主。公爵家を継ぐってことじゃ
ん。

そりゃ、王族であるセリオスより身分は低いし義妹いもむとになったんだから近づきやすいかもしれないけど……元庶民のあたしなんかに興味持つわけないじゃん。
むしろ放って置かれるって。

レオナさんもりデイもどうかしてる。
ありえない。絶世の美女ならともかく、平凡顔で権力も財産も無い
あたしだよ。

ないないない！！傍にも寄るなって言われる可能性のほうが高い。
それにしても、

「……………結婚、か」

……………セリオスも、いつかはするんだよね、結婚。
やっぱり、政略結婚なのかな？

この国の人って相手が良く分からなくても貴族同士結婚するってい
うし、それが普通なんでしょう。

やっぱりあたしには無理だね。結婚はやっぱり好きになった人とする
のが一番良い。

豪華じゃなくても手作りの温かい料理。

隣を向けば傍にいてくれる彼。休みの日には一緒にデートして、買
い物をするの。

「……………セリオスとは、無理だよな」

無意識の間にそう呟いてしまい、慌てて周りを見渡した。
だ、誰も聞いていないよね！？や、やだ！！あたし今、乙女全開丸
出しだった！！
ヤダヤダヤダ！！もく恥ずかしい！！
今日のあたしはどうかしてる！！外に出て新鮮な空気でも吸って気
分を落ち着かせよう。

食べかけのサンドイッチを置いて自室のドアからバルコニーへと出
た。

此処は3階だが地面との距離はそんなにない。
下を向けば夜でも園が見えるようになっており、月下の光を浴びて
色とりどりの薔薇が綺麗に咲き誇るのが見えた。なんだか幻想的だ
(ちなみに祝日には一般人にも開放されるらしい)

「……………綺麗」

なんて綺麗なの。そしてその上を優雅に飛ぶ竜……………竜！？

「うそっ！！！？？」

それは間違いなく竜だった。

日本や中国のような馴染みのある蛇の様に胴が長い奴じゃなくてポ
コンとお腹が出ているやつ。

二本足で歩く、西洋でよく見かける竜……………うん。言い方はドラゴン
の方がしっくりする。

首が長くて背中には立派な鬚たてかみ。
ぶっとい尻尾に鋼のように硬そうな鱗うろこ。

真っ白い純白のドラゴンは体中から淡い光りを発しながら空を飛ん

でいる。
ゆっくりと、ゆっくりと。

あまりの出来事に口を開けて間抜けな顔をしてしまった。
だ、だってまさかドラゴンがいるなんて思っても見なかったんだよ
！！

ああ、まさにファンタジー。ちょっと感動（泣）

ポーっと思つめているとあたしに気がついたのか竜は方向を変えて
あたしの方角へとやってきた。

……クワって口開けてないから食われないよね？あたしは食べたっ
つて、美味しくないわよ！！

「ギャアー！！」

実に男らしい悲鳴を上げればドラゴンはあたしの前へと降り立った。
大きさ……身長はあたしよりずっと小さい。膝ぐらい。横もそんな
にないスマートさんだ。

とりあえず危険は無いらしい。あたしはそっと近づいた。

うくん、害は無さそう。ウズウズ……あくん！！触っちゃえ！！
犬や猫にするように横つ腹を撫でればドラゴンはく〜んという甘え
たような声を出して寝そべった。

可愛い。すっ~~~~~~~~く可愛い！！

「ナデナデ……あんだ人懐っこいのね」

思わず首元を見た。

飼い竜ではないみたい（そんなのいるのかさえも分かんないけど）

……人が飼っていないなら飼いたいかも……

「クワ!!クワ」

「ん〜なあ〜に?嬉しいの?それともご飯?」

ドラゴンは甘えたように擦り寄ってくる。まるで犬みたい。
……我慢できない。

「ね、ねえ。あたしの部屋にこない?」

「クワ?」

「美味しいものたくさんあるし、柔らかい布団もあるのよ」

「クワ!」

「そうそう。君もあたしと一緒に住みたいのね」

ヒョイツとかかえて部屋へと戻る。

誘拐?いえいえ。拾ったんです。

部屋に入るとドラゴンは真っ先にテーブルへと向かう。テーブルにはこの国の特産物であるフルーツが沢山バスケットに詰められていた。

食後のデザートや夜食用に用意されたものだ。
それをジーと見つめている。

「……食べる?」

「クウ！」

「じゃあ、ちょっと待っててね」

桃に似た果物をナイフで皮をむき与えてみた。

するとドラゴンは嬉しそうにパクリと食べた。

一口、二口・・・うわ、早くも完食。

凄い食欲。とりあえず果物は問題なし。食べれる、と。

人肉を主食にされたらどうしようかと思っただけどひとまず安心。

あ、そうだ。名前をつけないとこの子の事呼べないや。

名前……名前かあ。

「なにがいいかなあ？」

「クワツ！」

「ん？もつと欲しいの？」

ドラゴンに渡した桃はもはや種を残すのみになっていた。

2個目を剥いて渡す。

リスみたいにコロコロまわして器用に食べる。

お〜お〜早い早い。

「桃かあ………よし！！君の名前、ピーチにしよう！！ピーチ！！ぴーちゃん！！！」

「クワ！！！」

「ふふ…気に入ってくれたみたいだね」

クワクワと鳴き声を出しながらすり寄ってくるぴーちゃんを抱き上げながらあたしはベットの中へと入った。

あ、ぴーちゃん体中が鱗だから結構冷たいんだ。

ひんやりと、まるで冷えた風を浴びているような感じ。

けど冷たすぎるってことはない。

丁度いい。

あたしはギュッと抱きしめて眠りに入った。

セリオスとの事も忘れ、意識が消えていく中、ぴーちゃんが笑った気がした。

夢を見た。

夢の中であたしは白宮の中にいた。

広い部屋に、男といた。

周りには絢爛豪華な調度品が並べられ傍らに立つのは顔の整ったメイド達。

そして、あたしを抱き締めるのは

その白宮の白き主。

『愛している。わたしの、つがい』

主である銀髪の青年はあたしにそう囁いた。

17章・とりあえずドラゴン（後書き）

キーキャラ登場。

そしてまだ

自覚症状の薄いアイの恋心。書いてて楽しいです。

二部では新キャラが沢山でる予定なのである程度たったらまた書きますね。

18章・とりあえず・・・誰？

「き、きやあああああ！！！」

リアの甲高い悲鳴があたしを起こす。

今何時だと思ってるのよ・・・まだ朝早いじゃない。

もぞもぞと体を動かした。悲鳴は未だに鳴り止まない。

ああ、もう煩いなあ。

布団を頭まで被り少しでも声が聞こえないようにする。
その間になんかバタバタという音がする。
誰かが慌てて走っている音だ。

もつと静かにしてよね。はた迷惑よ。ねえ、ぴーちゃん。

無意識の内に昨日拾ったぴーちゃんを探す。
触れた。

けれど昨日感じた冷たい鱗の感覚がない。
あるのは暖かい体温。

そして微かに目を開けて見えたのは銀色の糸。

徐々に視界が広がっていく。
青年だ。銀の長い髪をした青年。
目は真つ赤で綺麗。宝石みたい。
でも何より目に付くのは端正な顔立ち。まるでこの世の美を集めた
かのように美しい。

その顔が、動いた。

「おはよう、アイ」

額に感じたのは生々しい感触。

・・・キスされた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

そこまでされてあたしはやっとハッキリと目が覚めた。
そして今の状況に気がつく。
思わずバサツと毛布を剥ぎ取った。

・・・・・・・・・・メイドが悲鳴を上げるわけだ。

なにせその青年は全裸であたしのベットに寝ているのだから。

うん。体のライン丸見え。あの、ブツも隠していないわけだから・・・

・
バタバタとお馴染みのメンバーが集まってきた。

皆目が丸くなっている・・・レガード以外（奴はニヤけている）

「我はアイと契約した。だからアイが我の主人だ」

とりあえず服を着替えて話を聞けば青年は正真正銘、昨日のドラゴンだという。

この世界でドラゴンは最高ランクの神獣として崇められている。それゆえに現在話し合いの場として設けられたのはこの城で一番の貴賓室。

その椅子にあたしはぴーちゃんに抱っこされた状態で座らせられている。

・・・その面白いつて目をやめてくれないレガード。

「・・・説明しろ。アイ」

少し怒気を含んだセリオスに言われてあたしは昨日のことを思いだす。

説明しろってね、あたし自身、なにが起きたか理解していないんだけど・・・

「とりあえず昨日バルコニーでドラゴンを拾って、食事を与えて、名前をつけて、一緒に寝たらこうなりました」

そう。一緒に寝て起きたらドラゴンは人型に変身していた。

・・・うん。これ以外に説明できない。

とすればレガードが『なるほど』と呟いた。

「つまり、貴方は竜族に『真名』を与えたわけですね。それでこの方の名前は？」

「ピーチ。ピーちゃん」

「・・・ピーチ様はその『真名』を受け取り契約したと」

「・・・どういう事？」

「召喚に使う精霊や魔獣、神獣との契約は相手に『真名』、つまり『名前』を与え相手に承諾される事で成り立ちます。あなたが昨日何気なくつけた名前をこの方が受け取ったことによりあなたとピーチ様の間では魂の契約がなされたのです」

「ふん・・・じゃなんで人型になってるの？」

「・・・さて。竜族の方にあつたのは私も初めてですから・・・ピーチ様はご自分がなぜそのような姿になったのか理解していただけますか？」

「我らは、契約者から力を得ることが出来る」

「力、ですか」

「契約者とは、我らに『生气』を与えてくれる存在だ。元々我らは人型にはなれるがそう長くは持たない。せいぜい、数時間が限度だ。だが、契約者がいれば話は違ってくる。我らと魂の契約を交わした人間は無意識のうちに我らに『生气』を与えてくれる。その力を魔力に変換すれば、長時間の変化も可能だ。そして」

顎をもたれグイツと横に上げられた。
赤と白が視界に広がる。

「アイが、無意識に望んだこの姿に形に取った」

ボンツと湯気が顔から立った。

こ、この世界の住人は揃いも揃ってあたしを萌え死にさせる気なのかよ!!

死んじゃうよ、本気で!!

てか、無意識でも美形を望むって・・・あたしヤバくない？

・・・気をつけよう(汗)

「アイ？」

顔がさらに近づいてくる。

「ちよ、ちよい待ち!!」

恥ずかしさのあまりぴーちゃんの顔を手で隠した。

ギュギュツと押しやれば何を考えたかぴーちゃんはあたしの手を取り、

「いやああああ!!」

舐めた。

赤い、生暖かい舌がペロペロと未だに掌を撫でる。

あまりの衝撃に口がパクパク開き言葉は喉の奥で消えた。

「い、い、いいいい！！！」

「だが、このままでは直ぐにこの姿は失われるだろう。アイの魔力はまだ不安定だからな。アイ、もっと我に力をおくれ。代わりに我も、アイにあげよう」

ピーちゃんの手があたしの手首を掴んだ。
優しく、愛おしそうに、その唇は掌から額に動く。

「契約に従い、我、ピーチ・エシエンドの全てを主アイに捧げる事をここに誓う。いつ、いかなる時も、いかなる場所にも、アイが望めば駆けつけよう」

ピリツと痛みが額を走り、思わずピーちゃんの手を握り締めた。
なにが起きたのか半分も理解しきれない。
皆の視線が額に集まる。

「……これは……」

「……所有者の証、ですわね」

リディの一言が部屋の中で響いた。

……嫌な予感。

この世界で手に入れた危険回避能力が見るなと知っている。
けれど見ないうちには先に進めそうもない。
そろそろと、抱かれたまま横を向いた。

鏡の中に、美しい男性に抱かれたままの自身の姿が映っていた。額に淡い桃色の『花』のような痣を咲かせたあたしの姿が。

「なに、これ」

「所有者の証だ」

今まで口を開かなかったセリオスが眉間に皺を寄せてゆっくりと口を開いた。

「だから、所有者の証ってなんなの？」

単語じゃなくて。

セリオス、説明プリーズ。

「精霊や神族はかなり嫉妬深い。だから契約者を気に入れば自分の印をつける場合があるんだ。胸元とか、頬とか、とにかく主張できる場所にな」

「つまり簡単に言えば『これは僕のもの』という証です。人間で言えばキスマークをつけているようなものですよ」

シリウス、それってつまり……つまり!!

「……………四六時中羞恥プレイ」

「ですねえ。アハハハハ!!!」

レガード、ため、笑うなよ!!!

ああもうマジ恥ずかしい!!!

「うれしい、アイ？」

尋ねてきたぴーちゃんにどうして良いか分からずとりあえずあたしはぶんぶんと勢いをつけて横に振った。

とたんに彼は泣きそうな程に顔をゆがめてしまった。

美青年の、憂い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アイ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アイ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アイ・・・・・・・・・・」

「・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ワイ。ウツレシ

イナア（棒読み）「

負けた。

純粹な瞳に負けてしまった。

ぴーちゃんが満点の笑顔でギュっとしてきた。

白檀に似た香りがあたしを包む。

「アイ、これからはずっと一緒に「んな事させるかああ！！！！！」」

ぴーちゃんの言葉を遮ったのはセリオスでも、レガードでも、シリウスでも、リディでも、リアでもなかった。皆が同時にその声の主に顔を向ける。

窓の外には赤い髪をして右目の下にドロップ型のタリスマンを埋め込んだこっわい人がいた。

ぜいぜい息をして、今やっと着きましたという感じで。

「・・・誰？」

「え、エイリス~~~~~てっめ、見つけたぞ!!!」

「・・・あ、アール」

18章・とりあえず・・・誰？（後書き）

新キャラ、続々登場。ドラゴンはすっごく好き・・・人型も好きなんですがちっちゃいドラゴンがパタパタしている姿が大好きです！

19章・とりあえず・・・誰？パート2

ぜえはあぜえはあと息を切らす青年は窓の外に浮かんでいた（ちなみにここは2階である）

滴り落ちる汗。汚れきった衣服。

あきらかに怪しい人物だがピーちゃんの知り合いつぼかったから騒ぎ出す人物はだれ一人としていなかった（それにこの国には悪意を持った人物が侵入できないようになっていた）

代わりに『また出た』という呆れきった空気が部屋中を満たしている。

とりあえず、

「どちらさん？」

その言葉に赤髪の青年はこっちを向いてギツと睨んだ。正確にはあたしを抱き締めているピーちゃんを。洒落にならないぐらい怖い。目つきが悪いからさらに。

「エイリス、てつめえ、こんな所に居やがったのか！ー！！」

「・・・・・・・・・・あ、アール。久しぶり」

アールメス・・・通称、アールと呼ばれる少年は短い赤い髪をした青年だ。

スツとした、つり目。その下に埋め込まれた大小3つの赤いドロップ型のタリスマンは日の光を受け金色に発している。

うくん・・・顔はそこそこののにその目つきだけで初対面の相手に悪印象あたえそう。

しかも今はつりあがっているから怖さ倍増中。

「あ、久しぶり。じゃ、ねえ！！エイリス、無事ならさっさと連絡よこせよ！お前が連絡怠ったおかげで俺の方にとばっちりがきたじやねえか！！」

「それはすまなかったな。忘れてた」

「忘れてたって、これで何回目だと思ってるんだよ・・・」

少し彼の目が潤んだ。

「・・・苦労してるね」

「分かってくれるか・・・って」

こっそり呟いたのにどうやら聞こえてしまったらしい。
呆れたような顔をした彼は不意にあたしの方へと視線を向けた。
良く見たら猫みたいな目をしている。金の色をして、縦に線が入っ
てる。

彼も竜になれるの？

「えっと、お前は・・・」

戸惑う彼。

そりゃ知り合いの腕の中に女の子がいれば驚くか。事情を知らな
ければ。

とりあえず、自己紹介。

「藍。藍・神楽よ」

「そして我の主だ」

時間が止まるという事を始めて体験した。

ぴーちゃんの発言に固まったアールメスは目を開き、おそろおそろ
と指を前に出してきた。

口がパクパク開き、言葉なき言葉を紡ぐ。

ああ、ちよつと大丈夫？

「お、おま・・・」

「昨日正式に契約した。我のこの姿を見て気づかなかったか？」

「てめえは気が向けば人型になってんだろつがああああー！！」

「!!」

この人苦勞人決定。
絶対貧乏くじ引くタイプの人だよ。

「なにをそんなに怒っておる。少し落ちつけ」

「だつれが怒らせてんだよ!!」

「我だな」

「分かつてんじゃねえかよ!!!!」

アールメスの手が、手近な壺へと伸びる。

・・・それ、超高価な青磁の壺じゃなかったっけ。

「って、ストップですよ」

当たっていたらしい。

ギョツと目を開いたレガード慌てて壺を取り上げる。
間一髪。

「だから少し落ち着けというに・・・」

「・・・大体、契約したって・・・どうすんだよ!!!!どう国に報告すれば良いんだよ!!!!」

「こんちくしょー!!!」

「・・・リア、契約結ぶのってヤバイ事なの?」

「そういうわけではありません。ただ、少し特殊なんです。竜族との契約って」

マズイわけではないらしい。安心した。

今度からはもう少し考えてから行動しよう。

ぐでんと垂れたアールメスの前に瑞々しい果物で出来たジュースが差し出された。

リア、ナイスタイミング！！

「まあ、一杯どうぞ。甘いものを飲んで心を落ちつかせてください」

「・・・サンキュウ」

「それで、そろそろ説明してくれないか。いい加減に」

現状を。

そして、お前は何者だと。

きちんと全て説明して欲しいと。

「そもそも、なぜ竜族がこの国に現れた。竜族は自国から出る事を基本的に禁じ、同盟を結んだ国にしか現れないはずだ」

ほんとーにセリオス機嫌悪いね。やつ当たりはやめて欲しいって・・・
・触らぬ神に祟りなしってね。

「・・・きちんと説明する。まずは、自己紹介をさせてくれ。

俺の名はアールメス。予想ついているかもしれないねえが見ての通り竜族の、赤竜だ」

ぼつりぼつりと、言葉が出た。

始めはみんな真面目に聞いてたんだよ。本当に。

でもさ、半分位になったらンバーが頭を抱えて、話が終わったらもう脱力。

誰もが聞いた話を脳裏から別世界へと追いやろうとしていた。

苦笑したメイドさん達があま〜く入れてくれた紅茶を飲んで心を落ち着かせる。

ハツハツハ・・・ハア（苦笑）

なんのことはない。つまり、こうだ。

一ヶ月前の事だった。

ピーちゃん達の住む竜族や亜人の国『フォルティウス』で大人しくして仕事をしていたピーちゃん・・・もとい、エイリスは息抜きにと散歩に出かけたきりもう二週間も帰ってこなくなってしまった。

普段は真面目に仕事をする彼だがとてつもない好奇心の持ち主で、一度気に入ったものを見つけると連れて帰る、もしくは帰って来なくなるという厄介な性質の持ち主であった。

一応人間で言う貴族の地位にいるエイリスが行方不明とあってはまずい。

しかも彼は白竜だ。人間に捕らえられても不思議じゃない。

この世界で白竜は貴重だ。

100年に一頭、生まれるかどうかと言われるほどの希少種でその美しい見た目も伴い、500年ほど前には白竜狩りが頻繁に行われ

ていた程だと言う。

現在でもその名残があるらしい。
白竜の魔力は竜族の中でも特に高い。
それゆえ白竜の目玉には魔力が宿り、加工すれば最高級の魔水晶になる。

他にも角には薬、鱗は装飾品。
骨は武器とし血は不老長寿の元にもなると言われ裏の世界では今でも取引されるほどだ。

とはいえ、心配はない。

エイリスはこの国で常に上位に位置する実力者。
簡単に捕まる・・・なんてことはないはずだ。

けれど、けれど万が一、がある。

エイリスって結構抜けているし・・・

.....抜けているし.....

.....直ぐに探して連れ帰らなくては.....!!

貴重で美しい白竜。

殺されてなるものか!!

そこで白羽の矢が立ったのはエイリスの親友であり腐れ縁の幼馴染
アールメスだった。

彼は竜族と人間のハーフゆえ長時間契約者がいなくても人間の姿を
取っただけだった。

これほど相応しい人間・・・否、竜はいないだろう。

まあ、予想通りだなと彼は思った。

またいつもの通り、同盟国に連絡を取り、迎えに行くんだろう。

前回はシャルティスで禁書を読み漁っていた。
前々回はユーフィニウスで貴重なセリシウスの花を育てていた。
今回は……今の時期だからどっかの国の祭りにでも参加してやがるか……

そう軽く考えていた。
けど、現実には甘くはなかった。

『エイリスの事なんだがなどの国からも見かけたという連絡がない・
・すまんがアールメス、お前ちよっくら山降りて探してきてくれ。
1人で』

『はい分かり……ハア！？お、俺1人で、ですか！？』
ただ一人で探せと王様に命じられてしまった。

もちろんあの好奇心旺盛のエイリスが1つの場所に留まっているわけがない。
1人じゃいくらなんでも無謀すぎる！！

そう王様に願い出たが帰ってきたのは非道な言葉。

『だってお前以外に外の世界で長時間人間の姿取れるやついないし
く契約者持ちの竜は出払ってるしくによりいざって時に力ずくで
エイリス連れて帰れるのお前だけじゃねえ？』

理不尽だ。

けれど悲しいかな。王命には逆らえない。
だって俺庶民だし。

せめてもの抵抗と、王様の隣に座る王妃様に眼を向けた。
・・・微笑んでいる。

ならばと、王子へと顔を向けた。
・・・すまんという顔された。

最後の望みと、左右で立つ貴族を交互に見た。
・・・顔を背けられた。

そうだな。エイリス探して、かなりランクの高いミッションだも
んな。アハハ!!

・・・俺、泣きたい。

『・・・謹んでお受けいたします』

その代わりに、無事に帰ってきたら長期休みくれよなー!!!!

それから3週間。アールメスは世界の半分を飛び回った。
エイリスが好む場所を特定して。

時に山脈を囲まれた町に

時に湖に沈んだ国に

時に寒く凍る雪の中を

そしてやっと、やっとの思いで見つけた。

この国にいる、不思議と魔力の増えたエイリアスを。

あれつと、首を傾げたがとりあえずアールメスは安堵した。
帰れるって。やっと帰れるって。

でも、現実はまだもアールメスを裏切った。
エイリスは、契約を、契約者を得ていたのだ。
竜族にとつて（というか神族）契約は重要な意味を持つ。
自らの全てを捧げ、また、相手の全てを得る関係。
なにも魔力だけではない。

魂の契約は文字通り、『魂』を縛るもの。
相手が望めば、命すらも奪える危険な契約。
ゆえに、魂の契約を得るには念入りな準備が必要だった。
契約をする人間の、身辺調査や深層心理を探り何ヶ月も掛かって初
めて出来るもの。

そもそも契約には王族の許可が必要なはずだ。
……一応エイリスも王族の血が混じってるけど。
っ！かこれ、国家レベル問題入っちゃってきてるよ（泣）

号泣するアールメスを前にエイリス……ピーちゃんはいいかわら
ずあたしを抱き締めて頼ずりしている。
交互に見るお馴染みメンバー。

『哀れな……』

レガード以外に同情の言葉を貰いました。

「そんなに気にすることはない。アイは女神だ。やさしいぞ」

「優しいとか、優しくないとか、んな問題じゃねえだろう……大
体、なんでこんな国にいるんだよ。同盟国以外に入国するのは硬く

禁じられてんだろ・・・」

「気持ちよく散歩していたら女神の気を察してな、気がついたらこの国にいたのだ。しかたあるまい」

「しかたなくなんてねえし・・・ああどうせまた俺の責任になるんだ・・・グッバイ、俺の給料。俺の連休・・・」

「ああ。頑張っておくれ」

「お前のせいなんだからなあああ！！！！！！」

反省しろよ少しはさあ！！！！！！

ぴーちゃんとアールのメス会話は噛み合っているようで噛み合っていない。

まるでこの世界に召喚された頃のあたしとレガードの関係に似ている。

あ、ほろりと涙がこぼれそう。かわいそうすぎて。

マジ同情するよアールメスくん。

「で、これからどうするつもりだ」

セリオスの言葉にアールメスは顎に手をあてて考えた。

答えは直ぐにでたらしい。

彼はしかたがないと呟き腰にある皮袋から一枚の紙を取り出した。

う、わくわく高価そうな紙。

しかも中心には羽を広げたドラゴンの紋章が金色に輝いてるし、なんか見慣れない文字が紙いっぱい書かれてるし。

どう見ても、誓約書っぽい

「まずは、俺達の国と同盟を結んでもらう。事故(?)とはいえ、正式な契約が結ばれてしまったようだからな。知っての通り、本来、俺らは同盟国以外に姿を現すのは禁じられている。理由はこれ以上竜の乱獲を防ぐためなんだが同盟を結んでいない国に契約者が存在する。これが外部の人間に知られると、まずい」

例外を作っちゃうと色々厄介だからね。

特に、竜族とパイプを作りたい国に知らればこんな風になる。

『 国は同盟を結んでいないのに契約者が存在するそうではないですが。我が国ともせひ、お願いいたしますよ』

みたいな。

可能性は非常に高い。

「……いかがします、殿下」

「……」

しちゃえしちゃえ!!

竜族ってめつたに同盟結ばないんですよ。この機を逃すでない」

「……アイ、お前はどっと思っつ?」

「もち、するべき」

んでもって、遊びに行く。

本で読んだのだ!

『フォルティウス』は猫耳生やした少年に下半身がお魚な美少女がいるファンタジーメルヘンな国なんだって。行って見たかった!!

でも入国は、不可能。

同盟を結んだ国の偉い人しか入れないって書いてあって泣く泣く諦めたのだ。

でも、セリオスが同盟結べば一気に解決。

しかも、あたしは契約者とやら。ピーちゃんに会いに来たって言えば中に入れて貰えるかも!!

うふふのふ〜

「……………分かった」

重い腰を上げたセリオスはレガートと話し、アールメスを連れて出て行った。

ピーちゃんはあたしに夢中なためもう放置。居ても意味がないらしい。

むしろ精神的安定を保つため捕らえていとまで言われてしまった。

……………

「……………ピーちゃん」

「なに、アイ」

「あたし、お腹空いたからそろそろ離して」

この腕を…………って、なにしてるの!?

「はい」

器用に腕の位置を変えたぴーちゃんはフォークにパブトンを刺してあたしの前に差し出した。

恋人同士が良くやる【あ〜ん】だ。

「……………離せよ」

「はい。あ〜ん」

「……………」

リディ、リア、涙目になってる。笑い堪えすぎて。ついでにシリウス、腹、震えてるぞ。

もう、いつそ笑えよみんな!!

「あ〜ん」

ぴーちゃんはあたしを離す気はないらしい。汗がツーンと流れ、一秒が一時間にも感じる。

あ〜もう!! 食べばいいんでしょ、食べば!!!

パツクンと、口に放り込む。

噛めば程好い酸味が甘さを引き立て果汁が喉を潤わした。
……美味しい。

「アイ、もつと食べる?」

「もう、どうにでもしてください」

その行為は皿の上のパブトンが無くなりセリオス達が戻ってくるまで続けられた。
そしてその夜、同盟を結ぶためフォルティウスに向かう事を聞いた。
出発は3日後。

19章・とりあえず・・・誰？パート2（後書き）

区切る場所なくて長くなりました。補足ですがセリオスの機嫌が悪いのはただたんに嫉妬です。

20章・とりあえず到着・・・ってね

フォルティウス国はエルタイン王国から遙か南西に存在する島にある。

四方を山に囲まれたその島へは特殊な方法を持ち入らなければ進入は不可能であり、またその島特有の珍しい草花や動物を外部の人間から守るため、めったな事がない限り入国許可は得られない。

その島に住む住人は竜族と呼ばれる種族を初めとし、亜人、獣人などが殆どで人間は存在しない。

故に人間と言う種族を知らない部族も多数存在するらしい。

その為か『例外』がやってくれば珍しがられるのは当たり前であった。

「でもこれはないよね（汗）」

遠巻きにあたしとセリオス（その他数名）を見つめるのは大小様々な種族さん。

例えば耳がウサギだったり〜お尻のあたりにおっきな尻尾生やしていたり〜

『あら、珍しい生き物がやってきたわね。人間よ、人間』

『ニンゲン？ニンゲンってなあに？』

『ほくずいぶんとまあ』

『美味しい？』

「食つなよ！！！」

無邪気に聞こえた猫耳少年の『美味しい？』一言に思わず叫べば遠巻きに見ていた野次馬が一斉に飛び散った。

足・・・いや、羽速い？

「すみません。すみません。なにせこの国に人間が訪れたのは数年ぶりだったので・・・」

ぺこぺこ頭を下げるのはこの国の宰相さん。

見た目は軍人って感じなんだけどね。色黒で細いけど筋肉質。

デスクワーク向けの人じゃないんだけどこれも竜人の特徴。

竜人って基本的に肉食が多いから筋肉質なんだそうだ。

女性も強い軍人タイプが多いらしい。

「気にしていない」

セリオスの言葉に宰相さんはホッと安堵の息を吐き説明を始めた。

ここから城までの距離が長いいため馬車で行くこと。

あたし達が滞在する場所のこと。

同盟を結ぶに当たつての注意時点。

専門用語も出てきたからもう分かんない。

・・・全部セリオスに丸投げ。

外の景色を楽しんで気がつけば城に就いていた。

全身黒い色合いの給仕服に包まれた侍女に貴賓室に案内された後、セリオスと数人の護衛だけが謁見となりあたしは1人で待たされている。

理由？なんであたしだけここに居るって？

理由はこれ。

「ぐわぐわ」

あたしの足に引っ付いている子供の竜人。

懐かれた。なぜか懐かれた。

そしてあたしの後ろで引っ付いているのは・・・

「アイ、美味しい？」

ご存知、ピーちゃん。

ただいまあたくし、絶世の美男子共に囲まれてウハウハです。

・・・片方は竜だけ。

「・・・カンナ、邪魔」

「くわー!!」

シリウスの言葉に威嚇する竜は見ていて可愛らしい。

ちなみに『くわ』とかし言っていない竜はカンナという名の貴族。

立派な竜の一族で人間バージョンだと12・3ぐらいの少年。

色は緑。だから緑竜。

暇だったから貴賓室を歩き回ってたら見つけちゃったんですよ

隠れてたの。

どうも【ニンゲン】という種族を生で見たかったらしい。（この時はまだ人間の姿だった）

あたしは珍獣かつっのー！！

で、その時お腹がグーってなったからお茶請けのクッキーあげたら懐かれたのよ。

ポンツと竜に変身してクッキー食べる姿はもう・・・萌え／＼／

で、離れなくなった。

さすがに公式の場でこれはまずいとなって留守番に決定した。

結局は後で会うらしいけど。

それで今王様と会わないなら抱き締めていいよねとばかりにぴーちやんくつ付く。

カンナとあたしを取り合って喧嘩始まりあたしモテモテ。

「・・・マジ勘弁」

嬉しさよりも恥ずかしさが勝っている。

「アイ、長旅で疲れた？」

「んゝまあ、ね。だからちょっと離れて」

「嫌。アイと一緒にがいい」

ついには頼ずりが始まった。

なんだかんだで彼との関係もなれてきた。

最初の頃は真っ赤になって恥ずかしがっていたけれどこれが彼流のコミュニケーションの取り方と思えばどうってことない。

頬や額へのチユーも挨拶挨拶。外人さんとの挨拶だ。

・・・やっぱ無理。恥ずかしいものは恥ずかしい。

ペチンと軽く手を叩いてぴーちゃんを離す。

こうすれば彼は一応離れてくれる。短い時間だけだけど。

「でも暇ね」

もう一時間ぐらいはこの部屋に拘束されている。

暇だ。実に、暇。

本ぐらい置いてないかな

「アイ、暇？」

「ぐう？」

「んゝさすがにね」

ただ座っているだけって、暇だ。

「じゃあ、外に行こうか」

「え？」

返事をする間もなく窓から外へとダイブ。

下から突き上げる風が一気に体中を駆け巡り、『まるでジェットコースターに乗っている気分だわ』と、どこかに意識を飛ばしてしま

とてもじゃないがこの感動は口では表せない。
それほどの雄大な自然。

山の向こうでは天にも届くほどの山脈から水が流れ、その麓には色
取り取りの草花が咲き乱れ、
それを囲うように動物達が語り合っている。

湖では尾のある美女・・・人魚が楽しそうに泳ぎ、空では羽のある
鳥人達が優雅に飛び回り、
神話や御とき話、夢に見たファンタジーの世界がそこにあった。

言葉にならない。

「・・・素敵」

思わず呟いたらぴーちゃんが微笑んだような気がした。

それからぴーちゃんはゆっくりと下降して緑溢れる高台へと降り立
った。

空は青からオレンジへと色を変え始めていた。

「アイ、あの白い建物が見える？」

竜から人間へと姿を変えたぴーちゃんは西の方向に指を刺す。
その先には白一色のお城のような建物がある。

「うん見えるけど」

「あれはクリスタルリリー」

クリスタルリリー。
水晶の、百合？

確か前にセリオスから貰った本に書いてあったような気がする。
確か……

「女神の、庭園？」

「そう。昔、我らの先祖がある女性に送った建物。中には彼女が身に着けていた衣類や宝物が納められている……彼女の名前は、マ
イ」

「……………え？」

まいて……

「マイ・クサナギ」

ドクンと、心臓の鼓動が鳴った。

キクナ。

キクナキクナキクナキクナ！！

「マイは先代の女神だった」

「先代の女神って、400年前の女神？」

「そう。アイ、あの中に入るよ」

「……………え」

マジっすか!?!?!?

「なんで!?!?」

「あの中には女神の知識、記憶がある」

「.....」

「アイは知るべき。女神が記す真実を」

真実?

.....っつて、なんじゃそりゃあああああああ!?!?!

20章・とりあえず到着・・・ってね（後書き）

フォルティウス国の入国の仕方。

- 1・海の底の深海から
- 2・遙か空の上空から

一般的には竜車と呼ばれるものに乗って空から入国します。

21章・とりあえずめっけ(前書き)

久しぶりの更新になります。

21章・とりあえずめっけ

「怖い、アイ？」

「・・・うん」

なにか得体の知れない恐怖が体を包む。

それをぴーちゃんは抱き締めることによって消し去ろうとしてくれた。

「大丈夫。アイを危険な目にはあわせない。開けて、アイ」

「うん」

宮殿の高さは推測2階建てぐらい。前に立つと扉がない事に気がついた。

ぴーちゃんに聞くと女神の私物が高額の値段で取引されたためにこの宮殿にしまわれたらしい。

入る事は『女神』にしか不可能。

故にこの建物への侵入は実に400年ぶりとなる。

「ぴーちゃん、これどうやって開ければ良いの」

「そこにある窪みに手を入れれば開く」

あ、これが。

言われたとおりに窪みに手をかざすと今まで見えなかった扉がフツと姿を現した。

あたしの身長より少し高め。結構小さい。

「お邪魔〜って、ぴーちゃんは？」

「我らはこの宮殿に入ることが許されていない。入れるのは、アイだけ」

・・・超不安なんです。

あたしの表情でそんな考えを見破ったのかぴーちゃんがまたあたしを抱き締める。

「アイ、この宮殿は女神に関する全てのものを守るうとする。だから女神であるアイには危険はない」

「・・・それは分かったけど・・・」

暗いんだもん。この建物。

しかもぴゅーぴゅー風吹いて今にもお化け出てきそうだし・・・

・・・ぞわ

「・・・やっぱやめたい」

マジでほんとヤバイって!!
リアルお化けがこんにちわする。

逃げ出したいとばかりにぴーちゃんにしがみついた。
するとぴーちゃんの目が鋭くあたしの目を捉えた。
美形ってなんでこんな顔しても美形なんだろう。
なんかずるい。

「アイ」

「ん？あ、ああ!!なに？」

ヤバツ、真剣な話の予感。
こっぴつ雰囲気苦手なのに

「この場所は多くの秘密が眠っている」

「・・・」

「アイが、本当に元の世界に戻りたいと願うなら真実を知るべき」

「・・・ぴーちゃん」

「アイ、行って」

・・・うん。分かった。

あたし、やるわ!!

女神の秘密、見つけてきます!!

意を決して中に入る。

カツンと靴の音がなりそれがまた恐怖を引き立てた。

中は外の外見と同じで白一色で彩られていた。

不思議な感じ。

壁に触れば陶器のように滑らかな感触が伝わってくる。

不安、恐怖・・・好奇心。

これからどこに行けば良いんだろう？

この建物、広そうなのに部屋が1つもなかった。

・・・とりあえず前に進もう。

道は一本だったから迷いはしない。

結構長い時間歩き続けているとやがて1つの広い部屋に出た。

なにもない部屋。

でも奥の壁にとってもなく大きな絵画が飾られている。

描かれている人物は5人。

中央にはどこかの高校の制服を着た茶色掛かった黒髪のショートカットの少女が微笑んでいて、その隣には赤いマントを着けた美女が右手でピースを作って大笑いしている。

左右には少女を守るかのように立つ青い髪をした美少年と緑の髪の筋肉マツチヨが佇んでいて少女の後ろには優しい微笑で笑う白い髪の美青年がいた。

青い髪の青年、なんかセリオスに似ている。

それになんかこの絵・・・おかしくない？

フツとそこで絵画の下に書かれた文字を見つけた。

『私の生まれ故郷である星に捧げる』

なんの事？

星って地球の事だよね？

この人なにが言いたいの？

いや、待って。

なんでわざわざ『故郷の星』なんて単語を残したの？

なにか、意味があるんじゃないの？

と、絵画の少女が見につけているネックレスが青と白で描かれていることに気がついた。

どことなく、地球に似ている。

ゆっくりと、それに触れた。

カコン

「うわ！！！！」

変な音がして床が光った。

び、ビックリしたビックリした！！

あゝもう。いったいなんなの！？

あまりの眩しさに目をつぶってゆっくり開けばなにも変わってなかった。

夢だった？

そう結論付けてとりあえずなにもなかったとぴーちゃんの所に返ろうとして驚いた。

絵画のあった広い部屋から出れば建物の内部が変わっていた。

人が住んでいた形跡が一切なかったのに、今にも誰か出てきそう。

いくつもある部屋。通路に飾られた壺には新鮮な花が飾られている。

転移魔法・・・失われし古代魔法か。

それに時空関係の魔法もかけられているみたい。400年経っているのに飾られている花が散っていないのはおかしすぎる。

・・・本当に誰もいないっていうんならね。

つか、どこよ、ここ。

慌てて外に出ればレンガに囲まれた庭園に綺麗な花が咲き乱れ、隣には花を咲かす為に用意された噴水が惜しみなく水を振りまいている。

風がそよそよと頬を撫で、その風に乗ってタンポポのような綿が体に付着する。

どこからか漂ってくる草の香りは心を穏やかにし、荒れた心を癒す。

ふらふらと途切れた大地に近づけば遥か下にフォルティウス国が見える。

女神の書に乗っていた。

かつて400年前、フォルティウス国を訪れた女神様に贈られた地。

空中庭園『クリスタルリリー』

あの本に書いてある通りだ。

ならこの先に・・・

「あるはず」

女神と呼ばれた少女の、遺産が。

目的の場所はあっさり見つかった。

今まで見てきた建物とは比べ物にならないほど小さいけれどなんか温かみがあるっていうのかな。

クリーム色の日本風の家。

「・・・すみません、誰かいますか？」

扉をノックして家の中に入ろうと問いかけたが返事はない。すんませんと頭の中で謝罪して家の中へと入る。

部屋の中は特に何もなかった。

ただ唯一、あたしの目を釘付けにしたものがある。

キャリーバッグ。

底に車輪のついた鞆で通常は旅行に行く際に使われる。それがなぜこの国にある？

そう。絵画を見たときからなんとなく気づいていた。

前回の女神とやらは間違いなく『地球』の女子高生だ。

そう。女子高生。

・・・おかしいだろう。

400年前に召喚されたという。

400年前に制服・・・しかもミニスカなんかあった？
あるわけない。

ミニスカートが日本でブームになったのは1967年。
400年前に召喚されて、召喚された時の服装で描かれた絵画なら
女性が着ている服装はゆかたや着物のはず。
制服なんてありえない。

もしかして時間がずれているとか？

「・・・見てみるか」

ごめん！！と心の中で叫びキャリーバッグを開けた。

中から出て来たのは衣類数点に壊れた時計、歯ブラシ、お風呂セツ
ト、財布、旅行のしおり。

そして・・・青い日記。

裏にはしっかりとマイ・クザナギと書かれていた。

始まりは・・・2009年。

あたしがこの国に来た年が2010年。

正確にはマイという人物がこの国に来たのが2009年の7月22
日。

あたしが来たのが2010年7月11日。

この2つの数字が意味するのはたった1つ。

『皆既日食』

古代より、月には不思議な魔力が宿っていると信じられていた。

月が人体や気象に影響を及ぼし狂人が満月になると異常行動を起こ
すとも言われている。

驚くべき事はこれらの推測が実証されていると言っ事だろう。

こんな話を聞いた事はないだろうか？

満月の時は殺人事件がピークに達し、また新月の時には第2のピークに達すると。

他にも満月の夜には自殺者が多い、興奮して交通事故が多発するなど月に関わる伝承は数多く存在する。

この異世界『ルース』にも似たような伝承がある。

私とセリオスが暴漢に襲われた日も『赤き月』の夜だった。

(ちなみに赤き月が満ちる・・・即ち赤い満月の日は年に一度だけ)

昔からルースでは赤き月が満ちる時出来た子供は例外なく神の祝福を受けるといふ。

有名な話だ。

他にも、月が満ちる夜は魔力が高まるとか、異界への扉が開きやすいとか。

となれば帰るのに必要な『鍵』の1つは『月』で間違いなさそう。
後は・・・

息を吸う。吐く。

スーハー

スーハー

・・・なんかとてつもなく悪いことをするような気分。
でも見なくちゃいけないような気がする。

そうしないと取り返しがつかなくなりそうで・・・

何度目の謝罪か分かんないけど、マジごめん!!

あたしはそつとページを捲った。

22章・とりあえず真実（前編）（前書き）

先代女神の日記帳なので淡々と続きます。

22章・とりあえず真実（前編）

2009年。7月21日。

私達は今部活動で鹿児島に来ている。

もちろん目的は皆既日食を見ること。

生で見るなんて初めての事だから興奮が止まらない。すっごく楽しみ！！

早く明日にならないかな

2009年。7月22日。

驚くことが起きた。なんと皆既日食が起これると同時に私は別の世界に迷い込んでしまったらしい。

この国の王子、エリオスから聞いた話しではどうやら私は『女神』様らしい。

勘弁して欲しい。でも目的を果たさないうちには帰れないっていうのだからどうしようもない。

召喚された理由は『魔王を倒す』事。

・・・早くも逃げ出したい。

この世界に召喚されてから2ヶ月がたった。私の前にも何人かが召喚されたという事実を知った。

ただ不思議なことに元の世界に戻ったと言う記録がない。

これはどういうことだろう？

とにかく情報が必要だ。運よく先代の女神の日記も手に入ったら調べに行こうと思う。

殆どが破けて読めない箇所が多いけど欲しい情報だけ分かれば良い。今から読んでみよう。

異世界召喚の秘密を1つ知った。どうやら月が関係しているらしい。そういえば私が召喚されたのも『皆既日食』の時だった。

そして先代の女神の日記に記されていた年月は2008年8月1日の『皆既日食』

偶然とは考えにくい。

ちなみにエリオスに聞いたところによると召喚の儀が行われるのも満月の日らしい。

月が鍵の1つ。間違いない!!

この世界に来てから半年が経った。

魔王退治の為に頑張ってきた修行も身についてきたからそろそろ思い切って魔王のお城に攻め込むべきだと思うの。

聞くところによると魔王とは白竜の事をさすらしい。

さしずめ竜王って所かな。

餞別として金銭の他に王様から魔王退治のための剣を頂いた。

宝剣『フォルトウーナ』

運命の女神という意味の剣。
エリオスにピツタリだなって笑われた。

国を出てから一ヶ月が経った。

色んな事があつたけど一番の出来事といえばエリオスから・・・その、好きだと告白された事。

男性から告白されたのは初めての事だから凄くドキドキした!!
どうしようと思っただけど、エリオスがこの旅が終わるまでは待つと言ってくれたから甘えることになった。

それがどれだけ残酷な事が知っているけど・・・今は魔王退治の事で頭が一杯だしなによりエリオスの事は兄と慕っていたから急な展開に頭がついていかない。

ごめんなさい!!

新しい仲間がチームに入った。

魔法使い兼召喚術士のヨーナと格闘家ザナム。

ヨーナはもの凄い美人で元々は南の国出身の平民でこの大陸にある『書物』を探しに来たみたい。

その書物とは『貪欲な魔術書』
アヴァールス・ケリモワール

とても希少価値の高い魔術書で自らの意思で主を選ぶ意思を持った書物なんだって。

ザナムは強い相手を求めて西の方角からやってきたと言う。

なんでも魔王の話聞いて自分の強さを試したくなつたんだって。武者修行・・・っていうのかな。

とにかく仲間が増えて心強い!!

ヨーナとザナムが仲間に入って2ヶ月がたった。

なんか最近腑に落ちない。

魔王は世界の天敵。

世界を滅ぼそうとする悪の化身って言うけれどその魔王の住む大陸に近づけば近づくほど魔王の・・・竜王の悪い噂が消えていつている気がする。

むしろなんか・・・良い噂ばかり。

これってどういう事なんだろう？

ついに魔王の住む大陸、『フォルティウス』にたどり着いた。

今、私達は戸惑いを隠せないでいる。

だってイメージと違いすぎている。

様々な種族がお互いに手を取り合って生きているし、人間もいる。

魔王は世界を憎んで滅ぼそうとしているんじゃないの？

とりあえず私達は宿を借りて情報を集める事にした。

なんだか嫌な予感がするよ。

ついに魔王と対面。

王座に座り優しく微笑む彼に私達は戸惑いを隠せなかった。

地に着くような長い銀髪の髪は風に揺れ、まるでダイヤモンドのような輝きを放ち、澄んだ青い瞳はまるでコバルトブルーの海を思い浮かべさせた。

顔は文句なしの美形。

ほうつと思わずため息が出るくらい。

『ようこそ、わたしの、城へ』

魔王と呼ばれる竜族の長『プルト』

彼は・・・魔王などではなかった。

むしろ慈悲深い、神様のような人だった。

なぜ彼のような人が魔王などと呼ばれているのか。

理由は理不尽なものだった。

彼が、人間ではないから。

プルトはこう言った。

『人間は弱く儂い。だから自分達に仇なすモノ、仇なす可能性を持ったモノを許してはおけないのだろう』

それって凄く悲しいね。

私がそういうとプルトは悲しそうに笑った。

フォルティウスに来てから半月がたった。

結構この国になれたみたい。亜人達は人間にさほど悪い印象がないのか（この近くに住む人間は亜人に友好的）優しくしてくれるから住めば都。

ただ食事だけは中々なれないけど（汗）

トカゲに似た魚とカエルっぽい生き物のお肉が主食。

これ、本当にどうにかして欲しい（泣き）

最近エリオスの様子がおかしい。

自分達の概念が間違っていたわけだから戸惑う気持ちは分かる。

プルトは気にしなくて良いって言うてくれてるんだけど・・・中々簡単にはいけそうもない。

この国で一番綺麗な場所はどこかと聞いたらプルトが空中庭園に連れて行ってくれた。

プルトの作った特別な庭園。

他人を入れたのは私が初めてだという。

名前はまだないと聞き私が付ける事になった。

中央に百合に良く似た透明の透き通る花が咲いていたから思いつき

で『クリスタルリリー』って名づけた。
水晶の百合。この花のイメージにぴったりだったから。
意味をプルトに教えたら喜ばれた。

エリオスが一度魔王のことを報告するといって国に帰ることになった。

私も一緒にとわれたけれど、私はプルトの傍にいたいと断ってしまっただ。

エリオスの悲しそうな表情に心が痛んだ。

とっても良くしてくれたのにごめんなさい……

エリオスがいなくなつて2ヶ月。

この国に住み始めて4ヶ月がたった。

赤い満月の日の一週間前。

プルトから衝撃的告白を受けた。

プルトがなんと私に『つがい』になつて欲しいと言ってきたのだ。
竜族にとつてつがいとは結婚を指す。

つまり私は今お付き合いをすつ飛ばしてプロポーズされたわけです。
赤い満月の日に答えが欲しいって……私、プルトの事どう思っているんだろう？

自分の気持ちが分からない。

なんで私にプロポーズしたのか分からない。

そうヨーナに言うとヨーナは心底不思議そうな顔をする。
なんでって……分かるでしょう？

だって私、特別美人じゃないし体だつて貧弱だし……
なによりあんな美形に愛されるなんて……変じゃない？

一杯一杯にそう訴えるとヨーナに頭を撫でられた。

『じゃあ、顔だけ取り柄の最低のクス野郎と平凡だけどささやかな幸せをくれる凡人。結婚するならどっちが良い？』

顔がイケメンでも性格が最低なら嫌だって言ったらそうだねって言われた。

『プルトさんが求めているのって顔の良し悪しじゃなくて心安らく存在なんじゃない』

もう一度ゆっくり考える事にした。

ついに赤き満月がやってきた。

私はプルトのいる空中庭園に行くと彼にプロポーズの返事をした。

答えは Y s e

私とプルトは今日この日より夫婦となった。

バラリとページを捲るたびあたしの頭の中はパンクしそうなほど混乱してきた。

おかしい。明らかに。

先代女神様は困難を乗り越えてエリオスと一緒になったんじゃないの？

一般的に普及している書物にはエリオスの父である暴君『アルカナ王』を女神とエリオスが共に手を取り戦って倒したと書いてあった。そして女神は短いながらも共に過ごしたエリオスに恋をして元の世

界に戻ることを拒み彼と共に国を作りそして治めたと。
なのに彼女の日記には結ばれた相手は竜王プルトとなっている。
プルトといえば神話に登場する竜王の事だ。
人間に恋して身を滅ぼした哀れな竜。

「……とにかく続きを読んでみよう」

ペラリと、一枚の紙が捲られた。

23章・とりあえず真実（中編）

私とプルトの結婚式から3ヶ月が経った。とつても幸せな中1つの朗報が届けられる。なんとあのエリオスが婚約したというのだ。

ぜひとも婚約式に参加して欲しいと言われヨーナとザナムと一緒に行く事になった。

もちろんプルトも一緒にと書いてあった。

でもプルトはあまり良い顔をしなかった。

むしろ行くなと言われた。

けれどエリオスは私がこの世界に来たときからずっとお世話になっていた人だ。

だから行きたいと訴えたら最終的にプルトは諦めてくれた。

そしてお守りを私に与えた。

プルトの鱗。

私の命が危機に晒された時、私の命を救ってくれるという。

心配性だなあつと笑った。

騙された！！！！

以前と変わらない部屋（この世界に来た当初借りていて部屋）に監禁された私は目の前の男性・・・アルカナ王をにらみ付けた。

エリオスの婚約式は嘘だった。

全てはプルトの命を奪うためアルカナ王が仕込んだ罠だった。

エリオスも城の地下に監禁されているみたい。

なぜそんなにプルトを殺したいのかと聞けばプルトが邪魔だという。

プルトは竜族の王、竜王。

プルトが死ねば竜族全体の力が衰える。

そこを狙ってなんの罪もない竜を乱獲する気なんだ!!

「まったく、愚かな異世界人だ。セリオスもあのような化け物に絆されよって……」

「王よ!! 残酷な魔王は存在しないのです!! プルトは、プルトは本当に平和を願っています!!!」

「……」

「考え直してください!! 竜族と戦う必要はありません!! エリオスもただそれを伝えたくて」

「……そんな事、とうに知っておるわ」

「……え?」

アルカナ王はクツクと心底楽しそうに笑い私の顎を掴んで視線を合わせた。

それは凄く冷たい眼差しで、

「ま、さか」

まさか、そんな……

信じたくなくて、イヤイヤをしながらその場に座り込んでしまう。

けれどもそんな私をあざ笑うかのようにアルカナ王は言葉を発する。

「竜王プルトが魔王などという噂はただのまやかし。そんな事、先代のときから知っておるわ。そうだ。1つ良い事を教えてやろう。」

魔王などという噂は我が国が、我等の偉大なる先祖が永きにわたり広めたもの」

「ど、どうして……」

嫌な予感ほど良く当たってしまう。

「なんでですか!?! なんで、!?!」

「……馬鹿か、お主」

私の言葉にアルカナ王はゴミに対してするように唾を吐き捨てた。

「繁栄と金の為に決まっているだろう」

「……信じられない」

そしてその方法を、私は喋らないわ。

私の決意を見たのかアルカナ王は私を床に転がすとその手に剣を持った。

殺される。

グツと目を瞑り衝撃に耐えようとした。

たとえ拷問されたとしても、言うものか!!

けれどいつまで経っても衝撃は来ず、代わりに聞こえたのはジャリツという音と頭皮の痛み。

『っ!!! なに?』

目を開ければアルカナ王の手の中に茶色掛かった黒髪があった。

髪を切られたと理解するのにさほどの時間は掛からなかった。

首を動かせば肩ぐらいまでであった髪の一部が数センチぐらいなくなっていた。

一目で分かるほど、ごっそりと。

『・・・なにに使う気』

『攻められないならおびき寄せればいい』

アルカナ王は自分の部下を呼び寄せると小さな箱に私の髪とプルトに貰った鱗を入れ、そして・・・

『っ!!!!』

私の血を垂らした。

『さて、女神様。あなたの夫どのはこの箱の中身を見てどう行動しますかな?』

『!?!?!?』

『私の予想ですと・・・女神を殺されたと思った竜王は怒りに狂い畏だらけのこの国に侵入してあえなく捕まってしまうでしょうな』

『・・・やめて』

『楽しみですなあ。捕らえたらまず初めに首を切り落として女神様の前に差し出して差し上げますよ』

『いやあああああ!?!?!』

こないでプルト。

絶対に助けにこないで！！

程なくして戦いは始まった。

ドラゴンハンターと呼ばれる特殊部隊が組まれ誘い出されたプルトの体に目に見えない槍が打ち込こまれる。

その度に苦痛な叫び声が上がリプルトの体中から鮮血が走った。

まるで赤い雨が降るかのように・・・

『やめて！！逃げて、プルト！！！！』

『あはははは！！！！！！！！逃げてみよ、竜王。その代わり女神を殺してやるぞ！！！！！！』

私のせいで満足な攻撃すらできないプルトは空を飛び回るしかできない。

その空にも結界が張られ、ある一定以上の高さを超えれば雷が降り注ぎ彼の体を焼き尽くしている。

一気には殺さない。

長引かせ、苦しめて、殺す。

その様子をみてアルカナ王は満足げに頷いた。

『・・・最低』

『ん？なにか言ったかのお』

『あんたこそ、あんたこそ本当の魔王じゃない！！！！』

『それこそ我に相応しい最大の賛美じゃ。見よ。既に竜王は捕らえ
たも同じ』

『・・・いや』

『ついに我らの手で捕らえたのじゃ！！！！』

目の前でプルトの翼が裂けた。

『いやあああああ！！！！』

私の悲鳴が城中に響き渡る。

プルトプルトプルト！！！！

地面へと落下し、大地を赤で染めた王はそれでも戦う力を失っては

いなかった。

咆哮が刃となり、尾が刃となる。

地上での戦闘は激戦を極めた。

弱つていてもプルトは竜。

それも竜族の長、竜王。

最強の力を持った空と大地の支配者。

たとえ翼を失おうとも、魔力を封じられようとも、人間程度にひけは取らなかった。

次々と倒れる騎士団。

それに焦ったアルカナ王は最後の手段を使った。

弱ったプルトに竜殺しと呼ばれる特殊な邪法を使用したのだ。

呪文が終わると同時にプルトの体から夥しい量の鮮血が噴出し彼の命を蝕んだ。

私と、プルトの目が一瞬だけ交わった。

私の大好きな赤い宝石のように澄んだ目はどす黒く歪んでしまっていた。

『オノレ、オノレ人間共ヨ！！！！ヨク聞クガイイ！！！！』

我ノ体ハ滅ビテモ我ノ魂ハ滅ビヌ！！！！未来永劫呪ツテクレヨウゾ！！！！！！』

その呪いの言葉を最後にプルトは死に絶えた。

『あ、い、いやああああああああああああ！！！！！！！！！！』

ルース暦3200年。

竜王プルトはこの世から消え去ったのだ。

プルトが亡くなって3日が経った。

泣き疲れ、心労で倒れていた私の元へヨーナが現れ（ずっと引き離されていた）城からの脱出を試みた。

街から何キロか離れた場所にはすでにエリオスとザナムがいてこれ

からどうするか話し合うこととなった。

その間、エリオスは何度も何度も私に謝罪の言葉を吐いた。

エリオスのせいじゃないのに……エリオスを憎んでしまう自分に嫌気がさした。

城からの逃亡生活中、とある盗賊に捕まってしまった。

アジトへと案内されると驚くべき事にそこは国の北にある廃れた城跡で隊長は女性……しかもエリオスとあまり年の変わらぬ女性だった。

話の分かる人で聞くとところによると盗賊というのはただの隠れ蓑に使っているだけ。

本当はこの国を取り戻すための反乱軍『リベロ』を結成していると
いう。

なんでも女性、ラクリアの夫は貴族だったがこの国の真実を知って人知れず闇に葬りさられてしまったらしい。

ここにいる『リベロ』のメンバーはそういった人々の集まりで目的はもちろん暴君アルカナ王を倒しレルガン王国を昔の緑あふれる国に戻す事。

そこで唯一の血縁者であり真実を知りつつも王に反旗を翻したエリオスに『リベロ』の新たな統治者に、私には軍の守り神なってもらいたいと言った。

3日3晩悩んだエリオスはついに覚悟を決め反乱軍を率いるリーダーとなった。

私も、覚悟を決めた。

お飾りでもいい。士気が高まるからとハッキリとラクリアに言われた。

こんな私でも力になれるなら、協力しよう。

24章・とりあえず真実（後編）（前書き）

これにて過去編は終了となります。

24章・とりあえず真実（後編）

反乱軍に入ってから1年の歳月が経った。

竜の乱獲はますます酷くなりついにフォルティウスは亜人以外の生物の入国を一切禁じ、独自の社会を作るとそう世間に発表した。

それにより、世界中の国々から亜人の姿が消えた。

反乱軍にいた唯一の亜人も故郷に帰るといふ。

最近では姿を現さなくなった竜の代わりに亜人達を乱獲し始めているらしい。

亜人は人より魔力を体に蓄積できるため種類によっては魔道具として加工することも可能だからだ。

なんて非道な事をするのだろう。

これが人間のすることなの！？

私は、否、反乱軍は彼女に約束した。

かならず王国軍に勝って、乱獲をやめさせると。

けれど心は不安で一杯だった。

王国軍を倒したところで本当に乱獲は止まるのだろうか？

もしかしたら第二、第三のアルカナ王が現れるんじゃないかって思うの。

竜や亜人から作成された魔道具は世界中が欲している。

アルカナ王を倒してそれで全てが終われば良いけど・・・

また昔のように竜が空を飛び、亜人が村を歩き、精霊が再び姿を現す日は来るのだろうか？

王国軍と反乱軍の戦争は日々激戦を極め2年の歳月を得てついに反乱軍が勝利を収めた。

暴君アルカナ王は長年民を苦しめ続けた罪を文字通り命で償うこととなり手を貸した貴族や老臣は一部を除き生涯幽閉の身となった。こうして、多くの犠牲を生んだ『竜の戦争』と呼ばれる戦いは終わった。

アルカナ王の私室から行ける秘密の地下室にはプルト以外に希少価値の非常に高い黒竜や亜人から作り出された魔道具が多数置かれており、話し合いの結果、これらの物は全てまた悲劇を生むだけの道具になると言われフォルティウスに送られることになった。

もちろん、プルトの亡骸から作成された3つの宝物も。

エリオスに元の世界に帰るかと聞かれ私は・・・この世界に残るという選択肢を選んだ。

元の世界には戻らない。

この世界で、プルトが最後まで願った『亜人と人が手を取り合う平和な世界』を作る手助けをしたかったから。

私の、現在の知識を使って。

いつかまた、竜が安心して空を飛び、

いつかまた、亜人達が国と国を行き来する、

そんな世界を、作るために・・・

フォルティウス国の新たなる王『ガブード王』から秘密裏に会いたいという手紙を受け取った。

ガブードはプルトの弟で私を姉としてずっと慕っていてくれた少年だ。

もちろん私はそのお誘いを受けた。

まずフォルティウスに着くとまず厳重なチェックをされフードを被せられた。

人間という存在を隠すためだという。

次にお城に着くと竜の間　　つまり謁見の間に案内・・・と思いきやそこはガブードの私室だった。

どうやら私を招いた事は民に秘密にしておきたかったらしい。

それは入国の時の嚴重さから分かる。今回の事件で犠牲になった竜は100や200じゃないから人間全部が恨まれても仕方がない。私のことを考えての選択だったのだろう。

ところでなんの用で呼び出したのか？

そう聞くとガブードは赤い箱に収められた2つの魔水晶を大事に取り出した。

コバルトブルーの澄んだ色合い。

プルトの瞳から作られた対の魔水晶。

『どうしても、貴方に見せたかったのです』

ガブードが2つの魔水晶に手をかざす。

1つの魔水晶には文字が浮かび、もう1つの魔水晶には絵が浮かんだ。

黒いインクを垂らしたようにゆらゆらと揺れ、それはどんどん広がって行った。

絵は2人の子供に見える。それに大きな竜。

文字の方は浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返す。

『400年の時・・・を、へ・・・て』

『400年の時を経て過去の亡霊は蘇り二つの息吹を巻き込んで緑の大地へと復讐を果たすであろう・・・救われる方法はただ1つ。

長きに渡り紡がれる女神の血と、新たなる女神の召喚なり』

『・・・どうということ？』

『分かりません。ただ・・・兄が関わる事は確かです』

『・・・プルトが』

脳裏にプルトが発した最後の言葉が蘇る。

【オノレ、オノレ人間共ヨ！！！！ヨク聞クガイイ！！！！】

我ノ体八滅ビテモ我ノ魂八滅ビヌ！！！！未来永劫呪ッテクレヨウゾ！！！！！！】

『このままでは兄は【狂い神】に落ちてしまいます！！』

狂い神。

その名の通り、なんらかの事情で闇に落ちて狂った神々のことをことう言う。

落ちた神を救う事は不可能で死してなお、その魂が救われる事は無い。

苦しみを解き放つ方法はただ1つ。

魂を消滅させるのみ。

しかしこの方法を取ればプルトの魂は永遠に失われることになる。魂を失う。

それはつまり、転生が出来なくなるといふ事だ。

人も、人以外の者も、死ねば皆、輪廻の輪に入る。

そして長い長い年月をかけて魂を浄化するのだ。

何十年も、何百年もかけて。

人は転生する。

これは【生きる】者全てに与えられた神様からの贈り物。

天寿を全うした者も、

生まれてすぐ亡くなった者も、

善人も、

罪人も、

全ての人に平等に与えられる権利。

それが輪廻転生というもの。

けれど魂を失った者にはその権利は与えられない。

与えられるのは完全なる【無】

『・・・プルトが転生するのは400年後なのね』

『だと、思いますが』

『・・・長きに渡り紡がれる女神の血』

これは・・・私の子供が、子孫がって意味よね。新たなる女神の召

喚はもちろん次に召喚される異世界人の事。

それなら、今の私に出来る事は1つ。

『……決めたわ』

私はグツと握り拳を作ると脳裏に浮かぶ言葉を決意の証として吐き出した。

『私、言うわ。エリオスに、結婚して欲しいと』

彼は、私を愛している。と同時に夫を失った私に同情、後悔といった感情を持っている。

だからその気持ちを利用するわ。

そして彼との間に子供を作る。

『マイ姉さん、それは』

『暴君を倒した英雄エリオスの血を引く子供を産むわ。王族の血は絶やしてはいけない。きつと、予言の年まで私の血は受け継がれる』

『……』

『賭けてみる。私達の子孫に。プルトを止めてもらうの』

私は人間だからどう足掻いたって400年も生きられない。

だから私の血を引き継ぐ者達に私の意志を継いでもらう。

庶民なら、血が絶える恐れがある。

けれど王族なら戦争や流行病が起きないかぎり血は守られるだろう。

『ガブード、協力して』

エリオスとの婚姻から10年がたった。

子供はもう8歳になる。名前はセリオス。

長かった。ここまでくるのに。

エリオスは理想の旦那様だったわ。それと同時に、良きパートナーでもあった。

全てを知りながら彼は私に協力してくれた。彼の気持ちを利用した私を許してくれた。

だから、彼との別れがほんの少しだけ……寂しくなった。

けれど、計画を止めることはできない。

止めてしまったら、この国が滅んでしまう。世界が滅んでしまう。

・・・大切な人達を、守りたい。

だから私は使う。

失われた魔法を。

『・・・これで、いい』

呪文を終えた後、自分の体が消えていくのが分かる。

自分の意識が消えていくのが分かる。

そして私は、

彼女に、会いに行った。

パターンと、日記を閉じる。

心臓がバクバクして止まらない。

なんて事だ。女神神話にこんな裏話があったなんて・・・読んだ後にも信じられない。

つまり真実はこう。

先代の女神様は魔王退治のために召喚されたが実際には魔王という存在はおらず魔王と呼ばれた竜王はとても気質の優しい方だった。そして、先代女神様はそんな竜王を愛してつがいになった・・・つまり結婚したって事。

その後幸せに暮らしていた所にエリオスから一通の手紙が届いた。それはエリオスの婚約の話で召喚されてからエリオスに助けて貰いっぱなしだった女神様はぜひ祝いたいと国へと戻ったがそれは暴君アルカナ王の策略だった。

アルカナ王は竜族と亜人達の豊かな土地が欲しくて女神を人質に取り竜王・・・つまり、プルトを魔王として公開処刑した。

その後、仲間の手によって城から脱出した女神とエリオスは反乱軍へと入り女神は軍の守り神として、エリオスは統治者として行動することになる。

終戦には3年もの時間が掛かった。

だがついに2人は暴君アルカナ王を退治することができた。

しかし、新たな問題が発覚したのだ。

プルトの亡骸から作成された魔水晶がプルトに関する不吉な予言を表したのだ。

それは、プルトが400年後になんらかの方法で蘇り世界に復讐するということだ。

そんな真似をすればプルトは狂い神に落ちてしまう。

だから先代女神とプルトの弟ガブードとはある計画を立てた。

その計画がなにかはハッキリとは分からないけれど、ただ1ついえる事は女神の思惑通り、英雄エリオスの血が現在まで続いたということ。

そして日記の通りなら今年が・・・400年の年になる。

つまり、日記に記された【長きに渡り紡がれる女神の血】とはセリ

オスの事。

【新たな女神の召喚なり】はあたしの事。

ドクドクドクと心臓の音が早まる。

これはもう、セリオスの子供を産めば帰れるなんて問題じゃない。ゲームの域を超えている。

なんで？どうして？

こんな設定は無かった。プルトなんてキャラクターは出てこなかった。

そもそも本当に、セリオスに呪いをかけたのはアークザルの手の者なの？

プルトは甦ってしまったの？それとも甦る前なの？

ああ、分からない。

「・・・とにかく、ピーちゃんの所に戻ろう。で、王様に会おう」

現在の竜王は先代竜王の従兄弟だと聞いた。

ガブードは生涯独身を貫き100年の時を経て自分の従兄弟のザナルに王位を譲ったらしい。

だから現在の王は『ザナル』王。

性格は『非常にイイ』らしい。悪戯好きで狡い。ピーちゃんいわく面白いものが好きだという。

話の分かる人（てか、竜）なんだからもしかしたら協力してくれるかも知れないしなにか知っているかもしれない。

日記を抱え急いでピーちゃんの元へと向かった。

空はもう暗くなっていた。

建物の外装にある松明が壁に体を預けるピーちゃんとその腕の中で眠るカンナを映し出す。

幻想的な光景に思わずごくりと生唾が・・・おっと、ヤバイヤバイ

「・・・アイ」

「ごめんね、遅くなった。カンナも待ったでしょう？」

「カンナは眠った。アイ、女神の遺産は手に入った？」

「遺産かどうかは分からないけど日記があった」

「それが1つ目」

「・・・え」

「女神の遺産は全部で3つ。後の2つは女神が使った宝剣『フォルトウーナ』、そして魔術書『アウアールス・グリモワール貪欲な魔術書』」

「え！！貪欲な魔術書アウアールス・グリモワールって見つかっていたの!？」

「元々貪欲な魔術書は竜族の宝の1つだった。そして『竜の戦い』の功績を称え女神に贈られた。これらの遺産をあわせるとある1つの秘宝になると言い伝えられている」

「秘宝？」

「言い伝えでは狂い神を止める唯一の『武器』だと」

「!?!?!?・・・残りの2つはどこにあるの?」

「宝剣『フォルトウーナ』はザナル王が所有している。けれど、貪

アウアールス・グリモワール
欲な魔術書の行方は分からない」

「そ、っか」

「でも、探すよ。アイがそれを望むなら」

「・・・うん。ありがとう、ピーちゃん」

「アイの笑顔が、私の望み」

ちゅっと、頬にキス。

「・・・・・・何度も言いますが、美形のキスにはなれませ
ん！！！！」

25章・とりあえず・・・ゆ、誘拐犯！？（前書き）

久しぶりの更新です。まだまだフォルティウス国は続きます。

25章・とりあえず・・・ゆ、誘拐犯!?

お城へと戻るとマジ泣き5秒前な顔をしたアールがまず、ぴーちゃんへと掴みかかった。

マシンガントークでグチグチ言う。

だがもちろんぴーちゃんはどこ吹く風状態。だから矛先は自然とあたしの方に来た。

苛立ちと苦悩、それからあたし達が行方不明になった後どんなに変だったかを事細かに喋り出してくれて・・・そういえば黙って出てきちゃったね(汗)

「ご、ごめんごめん!! っいつい」

「つい、じゃねー!!!! なんの為に前を与えてたと思うんだよ!! エイリス逃がさねえだめだろうが!!!!!! それからカナ様、カナ様は無事か?!?!?」

「いや、本当にごめん!! あ、そつだ。この子なんだけど寝ちゃって・・・」

「え、あ!!!!!! お、王子!!!!!! カナナ王子

!!!!!!!!

「！」

ここは素直に謝って。ついでにねむねむ状態のカンナを渡すと今度は侍女さん達から悲鳴が上がった。
王子！王子が見つかった！って。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれえ！？！？

ギツギツギツと、まるで油を差し忘れたブリキの玩具のような音を立ててぴーちゃんを見ると彼はいつもどおりニッコリと綺麗に微笑む。

今の状況を分かっているのだろうか。

いや、今までの事を考えると分かっているとしてもスルーしているのかもしれない。

あの、まさか。

嫌な予感。

とアールを見ると彼も青ざめていた。

「・・・・・・・・あの、もしかして・・・・・・・・この子って貴族じゃなくて王族？」

「・・・・・・・・おう。ザナル王の第二子、王位継承権第二位を持つカンナ王子だ。ちなみにお前とエイリスとカンナ様が行方不明だった城中大騒ぎだぞ」

マジ頭痛え、とアールは前髪を右手ですくい座り込んだ。

ひたすら謝り続けていると遠くからガチャガチャと金属音がした。

見ればゴツツイ鎧を身に纏った兵士が何十人も門から現れてこちら

へと向かってきた。

あっという間に包囲され、その内の1人、兵士Aはあたしの目の前にやってくるとロングソードとよばれる剣を突きつける。

あ、マズイ。リザードマンに喉を切られそうになった恐怖が浮かびあがってきて体が震え、

「…………やめよ」

不意に腕の中に居たはずのカンナが目を覚まし地へと降りた。

姿は竜から人型へと。

首下で揃えられた新緑の髪。

大きく溢れるような、けれど意思の強そうな瞳。

ピンと伸ばした背筋に目を奪われる立ち振る舞い。

無邪気な子供だった。

クッキーを美味しそうに頬張って、あたしの隣をびーちゃんと争っていたカンナ。

今日の前にいる少年はともさつきまで一緒にいた少年と同一人物には見えない。別人では無いかと疑ってしまう。

双子の兄弟と入れ替わったのか、もしくは二重人格なのか。

そう考えてしまうほど、カンナは変わった。全てが違う。

振る舞いだけじゃない。纏う雰囲気、鋭い刃のようになった。

触れれば周りのもの全てを切り刻む。

そんな、雰囲気。

カンナはあたしの前に立ち塞がるとキツと兵士達を睨み付けた。兵士Aがまだロングソードを下ろしていないからだ。

カンナは若干イラついたように仁王立ちする。今にも怒鳴り散らしそうだ。

待て待て待ちなさいって。落ち着きたまえ。

この状況は仕方が無いんだからさ。事情を知らない人達にとってあたしは王子誘拐の実行犯だからね。

……てか、なんでカンナがあたしと一緒にいる事伝わってないわけ？

伝わってたら誘拐犯になんてされなかったのに！！

そう考えるとちよつとムカついてきた。

カンナがあたしから離れなかったからあたし1人謁見の間に行けなくて貴賓室に残されたんだよ。

迎えに来た侍女、知ってたはずでしょ。一緒にクッキー食べていたところ見たじゃん！！

この騒ぎならカンナは少なくとも隠された王族ってわけじゃないんでしょ。

不手際じゃん。責任者出て来い！！

「やめよと言っておる！！」

「で、ですが王子。彼女には王族誘拐の疑いが」

「アイは誘拐などしてはいない。僕が自分の意思でアイの傍にいたんだ。誘拐の罪があるとすればアイの同意を得ずに城を出たエイリスにこそある」

周囲の人達がそれもそうだなと頷いた。

納得した兵士Aも目の前にあるロングソードをゆっくりと下ろす。

ぴーちゃんの奇行、かなり有名らしいね。

「それでカンナ様、彼女は」

「アイこそが【女神】でありエイリスの【契約者】だ。客人ゆえ、
丁重に持て成せ」

「わ、分かりました!!」

「それからロザリアに伝える。こんな馬鹿な真似は、二度とするな
と」

「はっ!!」

ロザリアって誰？

それを聞く前にカンナはあたしの手を取った。

「アイ。一緒に来て!!父上と兄上が待ってる!!」

また変わり、子供のような無邪気な笑顔を見せてカンナはこっちこ
つちと手を引いてお城の中へと案内する。

重そうな扉が開き、すぐ目の前にある階段を引きずられるように上
がる。

刃の様な空気が消えて心から安心した。

フォルティウスのお城は左右対称の作りになっており、作りは6階
とかなり大きい。

エルティンのお城が4階立てだから1・5倍ほどもある。

だから階段上がるだけでもかなり辛い(汗)

「ゼエ、ゼエ・・・エ、エレベーターかエスカレーターが欲しい」

「えれべーたー？えすかれーたー？」

・・・異世界だったね。ないよね。分からないよね。

「えれべーたーってなに？えすかれーたーってなに？食べ物？美味しい？」

「エレベーターっていうのは人や荷物を垂直に運び移動するための昇降機・・・つまり、乗り物の事。エスカレーターは移動する階段。乗れば自動で次の階に運んでくれるの」

「人間の世界にはそんな便利なものがあるんですか！？」

「ってか、こっちの多分人間の世界にはないよ。あたしの国（世界）特有のものだし」

「そうなんですか・・・それはどうやって動くの？」

「・・・・・・電気、かな？」

ごめん。お姉ちゃん専門的な事は分かりません。

「でんき・・・雷の魔法かな・・・理論的には・・・ぶつぶつ・・・」

よほど気になったらしくあれこれ聞いてくるカンナにあたしは知っている限りの情報を与えた。

エレベーターの他には扇風機やエアコン。冷蔵庫などなど。

特に気に入ったのはエアコンと冷蔵庫の存在で本当に実用化されれば一年中暖かいフォルティウス国や灼熱の国アルカナンは助かるだろうという話になった。

けれど無理だ。

この世界は魔法が発達したせいで科学というものが殆ど無い。

船は電力ではなく魔力で動く。

空飛ぶ乗り物も魔力で動く。

街道は馬を使つて走る。

車や飛行機といった物が一切無い。

電気の代わりに魔力を使う。

これが基本。

・・・いや、待てよ。

電気の代わりに氷を使つたらどうだろう。

みぞれ、みぞれって確か気温がグンと下がると雨から出来るんだっけ？

水の魔法・・・それから風の魔法を使つて・・・

考え付いた論理を冗談交じりにカンナに話す。

カンナは真剣に聞いて、どういう構造がいいか、また、それを維持する方法も考えた。

所詮、素人の浅知恵であるが。

だが、あたしは知らなかった。

カンナがそれ以降、研究に研究を重ね10年の時を経て【エアコン】や【冷蔵庫】の発明をする事を。

それはまだ先の話である。

25章・とりあえず・・・ゆ、誘拐犯！？（後書き）

誘拐犯その一とその二。もう少し先で謎の少女ロザリアが出てきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3779k/>

Real Game

2011年10月18日06時03分発行